女鑑

明治二十四年八月創刊

第拾参年第壹號

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



新年之御慶

芽出度申納候

東京日本橋駿河町

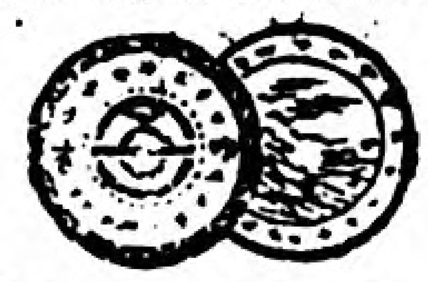
三井呉服店

大阪高麗橋二丁目

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

登録商標

五二會品評會功勞賞牌



THE BEST MADE

SUMIRE

VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子壜入
壽美禮おしろいねり

●壽美禮おしろい●

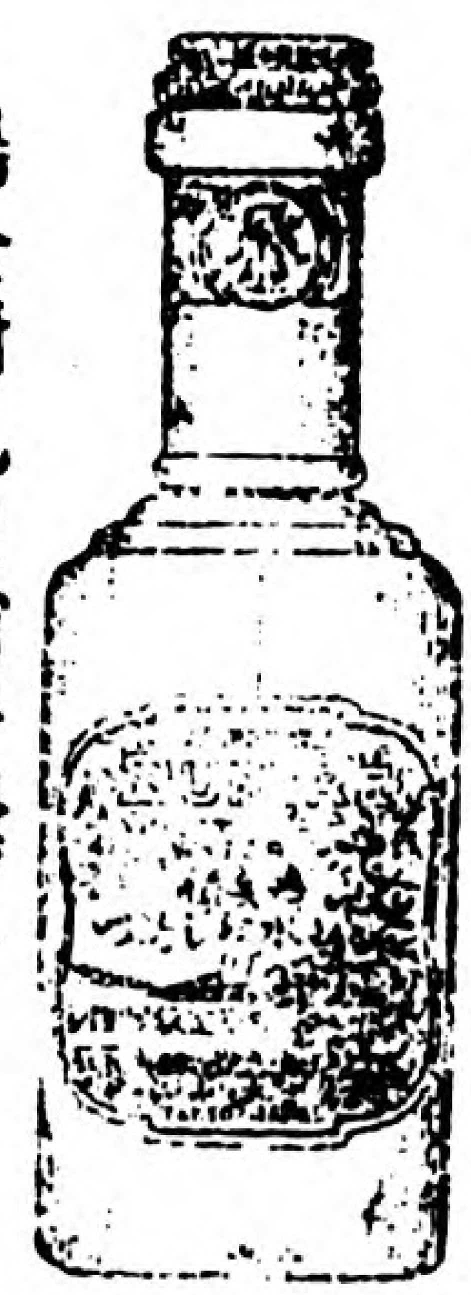


ねり製　定價　大壜二十錢　小壜十二錢

水製　定價　大壜二十五錢　中壜十五錢　小壜十錢

ヴワイオレツト水製

錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成諸體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかにてきび、そばかす、あせも等を生せず御肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雑踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉●

緑、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢

鑵詰六錢五厘　袋入[illegible]錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

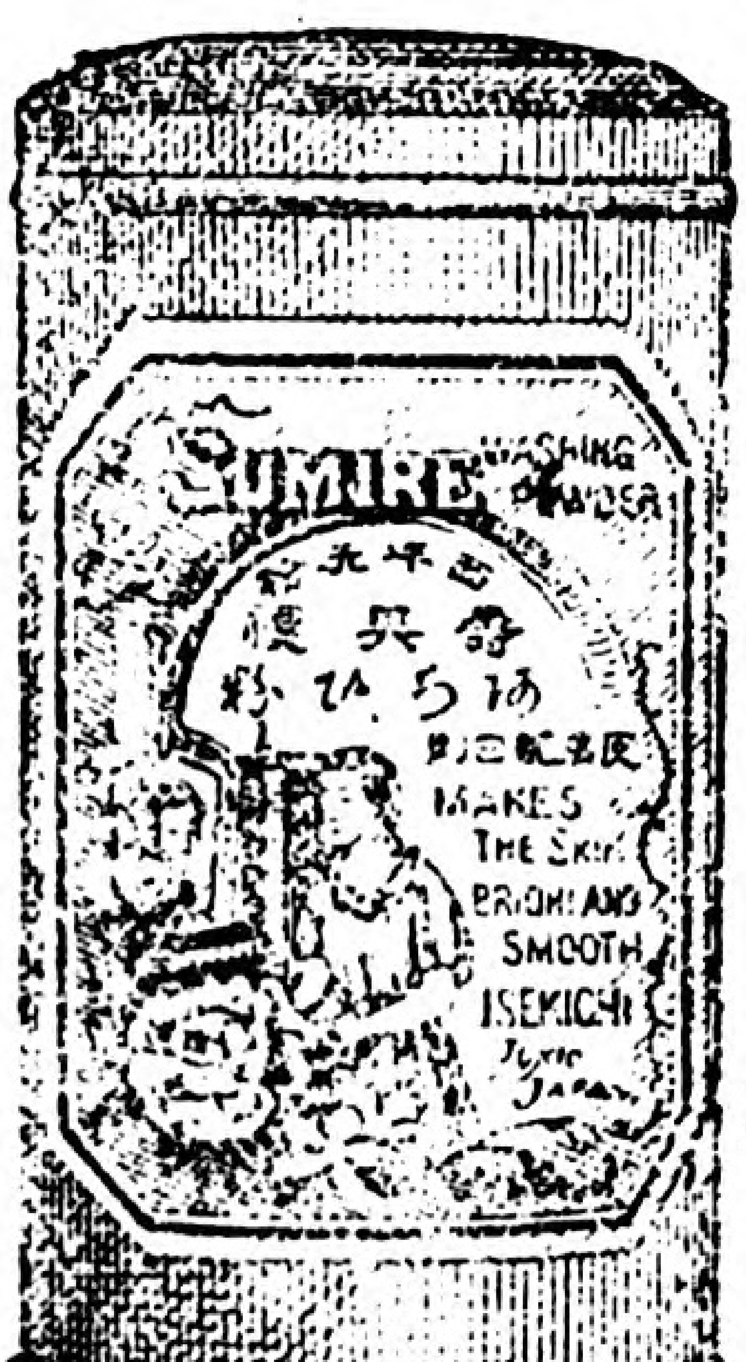
登録商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.

WASHLNG IOWDER.

壽美禮あらい粉



製造本舗

東京東兩國

横網町一丁目

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第十三年第一號目次





Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

謹賀新年

剛にして猛ならず
麗にして艶ならず
優にして俗ならず
此の點に於て二六新報は一面に男性的新聞紙として社會の戰士たると同時に他面には亦女性的新聞紙として大に婦人社會に歡迎せられつゝあるは世既に定評あり。

二六新報

定價

一枚一錢◎一箇月市內二十四錢地方は三十錢◎以上何ヶ月にても其割◎郵劵代用一割增◎爲替拂込神田局

廣告

一行五號活字十九字詰一回一行六十錢◎雜報欄內特別同上一圓◎一日千兩二行に限三十錢六行限一圓

發行所

東京市神田區通新石町
二六新報社

大阪市東區高麗橋五丁目二十六番地
二六新報大阪支局

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



富宮内親王殿下



周宮内親王殿下

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



小川一眞印行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



副島伯爵の家庭

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

美術小間物商

白牡丹本店

店主 松田幸治郎

東京市京橋區尾張町

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

學校賞與品類

青少年書類

自然之友

各冊挿畫入 定價各冊金拾六錢 郵税各冊金四錢 内上巻郵税二錢

◎一巻 通俗物理學講話 秋山鐵太郎著
◎三巻 通俗植物學講話 高桑長興著
◎五巻 自然界の迷信 秋山鐵太郎著
◎七巻 通俗地文學講話 秋山著
◎ 通俗天文學講話 秋山鐵太郎著

近刊
◎ 通俗化學講話
◎ 通俗動物學講話 上下二冊
◎ 高桑著 小生物之大作用
◎八巻 生活法の多趣 近刊

畜類のまごころ

本田増次郎著 挿畫入 定價金五錢 郵税二册迄二錢

本書は畜類に同情を寄せ、彼等に代りて動物虐待の無法なることを絶叫したるものにて、各種の事例を兒童少年に分かり易く面白く叙べ綴られたる小冊子家庭の読み者學校の賞品年頭の贈物等に最適當なり

公德童話 一名御伽奉公

土居耕雨著 口繪入 定價廿五錢 全一册 郵税金四錢

本書は公德養成に關する好材料を小說体に記述し言文一致なる上に漢字に總振假名を付けたれば兒童少年の讀本小學校の褒賞品として最適當なり

家庭讀本

堀内新泉著 全四册 各挿畫入 定價各金拾六錢 郵税各四錢

全部目次

春之巻 (一)古稀の賀 (二)自愛 (三)女船長上 (四)女船長中 (五)女船長下 (六)花ちる里 (七)おもちや (八)御國の風俗上 (九)御國の風俗中 (一〇)御國の風俗下 (一一)母のおもかげ (一二)初旅 (一三)おぼろ月夜

夏之巻 (一)庭の若葉 (二)螢狩 (三)游泳の名人 (四)雨後の月 (五)蚊やり火 (六)姫百合 (七)うすゞみ (八)夕立 (九)扇子

秋之巻 (一)秋の旅 (二)ゆく秋 (三)雁がね (四)十三夜 (五)千草百草 (六)虫の音 (七)紅葉狩 (八)かくれ家 (九)暮れの鐘

冬之巻 (一)初時雨 (二)木枯 (三)霜夜 (四)冬の月 (五)雪の月 (六)寒紅梅 (七)うづみ火 (八)水鳥 (九)歳の暮

土佐の長平漂流談

肝付海軍少將序 北村重敬著 定價拾六錢 郵税四錢

◎情之學生

高野友次郎著 定價 郵税 二八 錢錢

發行所 東京市神田區小川町 電話本局二四二〇番 開發社

御注文の節は本誌廣告に據りたる旨御附記被下度候

◎九重の華に對する
全國新聞雜誌の評

◉教育實驗界　こは皇太子殿下同妃殿下の御性行御逸事等を輯め奉りたるものなり、將來國父母と仰ぎ奉るべき御方を知り奉らざるべからざるは勿論なるが、殊に皇太子殿下の英明なるは我が國民の夙に欽仰し奉るところにして本書よく之をしるし奉れり修身、教材參考書とし、又は學童賞品として恰當のものなるべし。

◉京都日の出新聞　我が皇太子殿下の御懿德と同妃殿下の御淑德の御事蹟を編し奉りたるもの大人繙くべく兒童亦讀んで以て皇德を仰ぐべきなり

◉新愛知　皇太子殿下御懿德高く在はします事は夙に國民の感佩し奉る處、本書は兩殿下御聰明の一斑を記述し奉り讀む者をして益々畏敬の念に堪にざらしむ表紙の美裝目も覺むるばかりにて小學校の賞品などには誠にふさわしかるべし

◉福岡日々新聞　東京教育社編輯所の著はす所東宮殿下の御懿德同妃殿下の御淑德を叙したるものにして之れを少年に讀ましめば以て忠君愛國の念を發揮せしむるに足るべく花長月夕家庭好箇の讀本たるべし

東京教育社編輯所謹編
皇太子殿下
皇太子妃殿下
御肖像鮮明寫眞版入

新刊

九重の華　冊

全一冊美本定價上製九錢◉並製七錢◉郵税金二錢

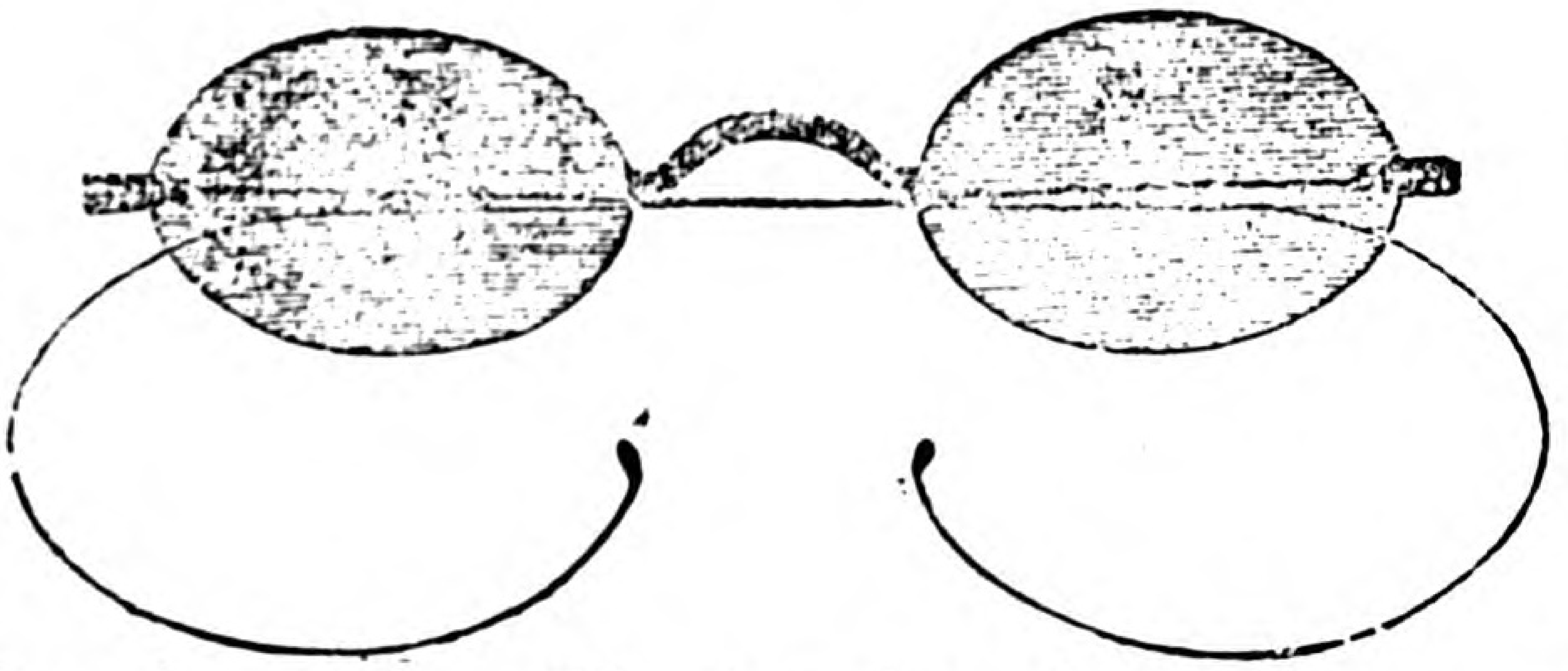
申すも畏こけれど、皇太子殿下が、御孝順の念に厚く、御聰明に渡らせられ、仁慈の御心に富ませらるゝは、吾人臣民の常に欽仰し奉る所なりとす、而して　妃殿下の御淑德高くおはせらるゝは亦萬人の均しく仰ぐ所なり。本書は將來の國父にて在ます　皇太子殿下の御睿德と、將來國母にて在ます妃殿下の御美德を景仰の餘り洩れ承る處を蒐め玆に謹編せしものなり。乞ふ購讀の榮を賜へ

東京神田千代田町二番地
（電話本局百四十四番）
博報堂書店

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

恭賀新年

金銀縁眼鏡



蔓掛
- 廿二金 一匁三分附 十圓二十錢
- 廿金 一匁二分附 十一圓
- 十八金 一匁二分附 十圓也
- 十四金 一匁一分附 七圓八十錢
- 十二金 一匁附 六圓七十錢
- 九金 九分附 五圓五十錢

差込及
- 廿二金 一匁[illegible]分附 十九圓五十錢
- 十八金 二匁[illegible]分附 十五圓四十錢
- 十[illegible]金 一匁七分附 十二圓六十錢

新製切子縁
- 十八金蔓掛 一匁一分附 九圓八十錢
- 十八金縄蔓掛 一匁八分附 十二圓也

縄蔓掛
- 廿二金 一匁八分附 十六圓二十錢
- 廿金 一匁七分附 十四圓五十錢
- 十八金 一匁六分附 十二圓七十錢
- 十四金 一匁五分附 九圓八十錢
- 十二金 一匁四分附 八圓六十錢
- 九金 一匁三分附 六圓九十錢

牛掛
- 廿金 二匁二分附 十七圓五十錢
- 十四金 二匁一附 十二圓
- 九金 一匁八分附 八圓廿錢

六ツ折〇八ツ折
四枚玉〇引出し
鼻掛等種々

郵券代用一割增●爲替振込所南傳馬町郵便局●遞送料十里迄五錢百里迄八錢百里以外十二錢申請候

右の外御注文次第調進可仕眼鏡は遠視近眼普通等御好み次第〇金質は金性の割印捺し確實なる保證書相添萬一相違のかど有之候へば他品と御交換又原價な御返戻申べし

美術袋物商 貴金屬細工

特製純銀振出簪



- 丸形無地 二圓
- 八角無地 二圓廿錢
- 四角無地 二圓三十錢
- 同彫刻附 二圓五十錢
- 同彫刻附 二圓七十錢
- 同彫刻附 二圓八十錢

各縞珍袋付箱入但（御紋彫刻御好次第御調進仕候）

風流御莨入



百圓　七十五圓　五十圓　四十圓　三十圓　廿五圓　二十圓　十五圓　十圓　七圓五十錢　五圓　三圓五十錢　三圓

遞送料實費（十里迄五錢百里迄八錢
百里外十六錢書留迄廿二錢ノ申受候

右の外弊店は御好みに應じ雜貨を首とし諸品共廉價調製仕候間陸續御用向之程奉希上候
爲替振込所は南傳馬町郵便局●郵券代用一割增
小包料内地は金拾錢●臺灣清國朝鮮は金參拾錢申請候

東京市京橋區南傳馬町三丁目十六番地（電話本局二十番）

丸屋商店

金子直吉

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



仙臺市青葉城天主臺昭忠碑

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



京都三十三間堂

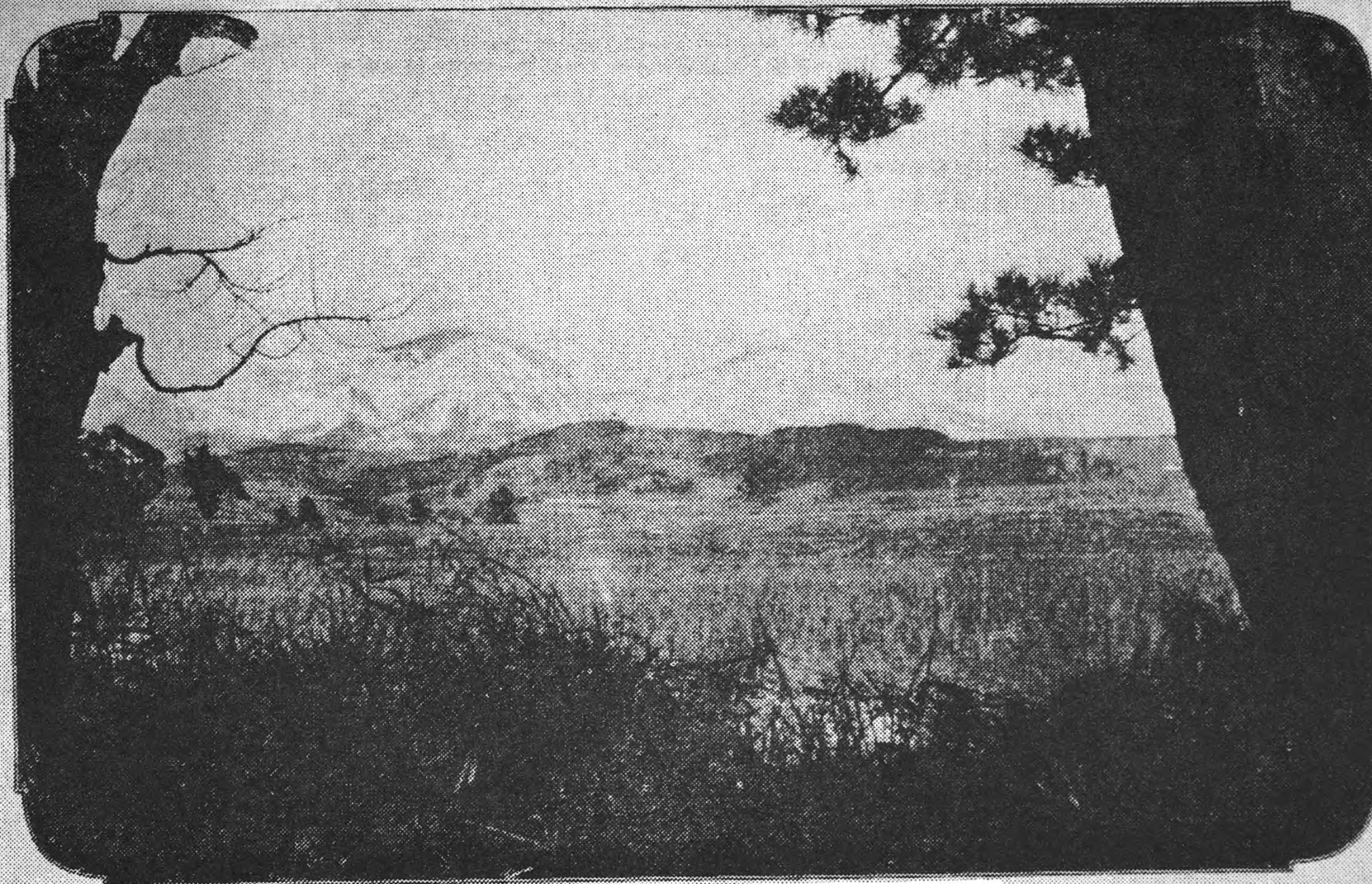


京都模造大極殿

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



信濃小諸町より淺間山を望む

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

婦人界

第一巻第七號　三十六年一月一日發行　定價一冊金貳拾錢　郵税金貳錢

口繪

洋裝天使—暗色—渡頭—ペーンスの愛兒—短冊と色紙—水車小屋—（ホペツマ筆）—令嬢鑑—宮中料理—三井と白木屋

婦人界

●發刊辭
●抜粋……………佐々醒雪
●竹の園生………二十頁餘の長文………

小説

●懸賞小説選抜につきて……齋藤弔花
●懸賞小説當選批評につきて……平尾不孤
●袖の露（懸賞小説一等當選）……白露
●羽衣衣會（同二等當選）……内山柴子

論説

娯樂問題
●娯樂と音樂（鳩山春子）●同（東京音樂學校教頭上原六四郎）●娯樂と遊戯（華族女學校學監下田歌子）●平和と娯樂（文學博士井上哲次郎）●露西亞人の娯樂（正教神學校教師瀬沼恪三郎）●家庭と娯樂（德富猪一郎）●佛蘭西人の娯樂（フランソワーサラズエン）

家庭

●他の家庭に於ける妙齢女子の生活（元高等商業學校長寺田勇吉）●家庭教育に於ける乳母の地位（文學博士松本亦太郎）●亞加米人の子守歌（加島汀月）●兎の圖遊び（科學）（在大學田中葉郎）●黄金の兎（福田琴月）

社會

●宮中三月の御獻立……
●新年料理……四方亭　岩間芳松
●割烹料理……八百善　栗山善四郎
●社會の半面（毛利公の掛堂）茅原華山●三十五年の婦人界を論ず（羽仁もと子）●工女の新年（松山天涯）●貴婦人のよそほひ（樂川生）●春着の衣裳（蝶々子）●春着品（玉寶堂店員談）

文藝

●女歌人集講義（一）……佐々木信綱
●枕草紙選註（一）……文學士佐々醒雪
●源氏物語手引……新保磐次

附録

文藝雜録
●勇敢なるエールス夫人……野田まづま
●歌を讀む眼……與謝野鐵幹
●出迎茶屋……中村春雨
●新年植物界の女王……農學士町井正路
●門松の風……森桂園
●稲荷草のはなし……農科大學　綠山隱士
●春のくさぐさ（一）……井上折山
●落湖記（二）……齋藤弔花
●新體詩……高橋山風
時報、豫告其他

發行所　東京本町　金港堂書籍株式會社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

謹賀新年

定價 壹袋壹錢 鑵詰五錢





此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舖製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覧の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也

東京淺草區黒船町

梅素亭謹製

電話浪花二千二百三十四番

林軍醫總監發明

驚くべりうまちす根切

梅毒根切

複方快丸

半劑試み

大效なければ服すべからず

⊙五劑三圓五十錢二劑一圓五十錢送四錢

五年十年長病二劑服し全快す

複方克快丸は其効驚くべし克快丸に三倍す

責任調劑…順天堂合資會社長…植木彌一

本店 東京市淺草區みな木町

支店 大阪市[illegible]通

順天堂合資會社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

宮中御歌所寄人中郵秋香著
華族女學校講師小野鷲堂書

新編書簡文例

新編書簡法文例

最新刊廣告

木版半紙摺
高尙優美本
男女各一冊
定價六十錢

書簡の文體は直に其人の品位を上下するに足るべく其人の知識を推測し得べきものなり斯の如く交際上貴重のものなれば一日も苟もすべからざるは論を待たず本書の文例は現代の文豪中郵先生の腦漿より迸出せしもの一言一句津々たる趣味あり擬古に陷らず流俗に同せず繁簡宜しきを得眞に今日書簡文の好模範たり書は筆硯界の巨擘鷲堂先生の手腕に成りし者習字の一龜鑑として上乘の書也曩に新篇女子書簡文例發刊以來一年有半の短日月に拘らず女子大學校始各女學校の參考書或は教科書に採用され異數の世評を得たるは茲に贅せず今新に男女用の文例を發賣す世の文筆に志ある士は座右に一本を供せられんことを

中郵秋香著　訂正三版

文鑑 千草の錦

和裝優美本
金三十五錢
郵税六錢

本書は男女學生の模範となるべき（美文）（記事）（紀行）（論說）（消息）（物語體）等無慮數百編を撰出せられ特に上段に要語數千を載せり作習の模範と應用に供せられしは他に其比を見ざる國文學研究の好資料也

中郵秋香著　訂正再版

新編書簡文法式

金字入無二の美本◎定價五十錢
郵税六錢
總クロース金字入無二の美本定價六十錢
郵税六錢

新編女子書簡文法式

書簡文の法式男女に別ちて大成せる者は、古來未だ曾て有らず、何人に禮儀の缺くべからざるが如く苟も人に禮儀の書簡法式なからんか其人如何に貴と雖又如何に富めりと雖、一日も交際場裡に立つことを能はざるべし

御歌所寄人中郵秋香先生深くこゝに感ぜられ、今日の現狀に依り舊新を對照して以て時の宜に從ひ適當の式を設けられしものにして新篇書簡文例と相待て完璧と稱すべきものなり

久津見蕨村著　訂正增補五版

家庭教育 子供のしつけ

洋裝頗美本
定價廿五錢
郵税四錢

家庭教育不完全の弊漸く世に喧しく世上是が適切なる參考書を要求すること頗る急にして其之を缺くがために子女教育上大なる不便を感じつゝあるは識者の常に遺憾となせる處なり

本書は著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚、兒童、少年、青年、時代の四段階に至る家庭教育の仕方を言文一致にて十三章百六十餘條に說き示されたる者なれば婦女子にても容易に理解せられ直に實際に試むることを得べきやう記述したる近來稀に見るの好著述なり

●●初版再版三版四版賣盡し增訂五版發行す日本の父母兄姉は座右に一本を備へられん事を

發兌元　東京日本橋箔屋町十六　前川文榮閣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下候

登録商標



本品縮圖

二八水は

肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひゞ●すべて肌のあれおしい下に用ゐて尤もよし

又芳香發郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり（中瓶一本十五錢）



花王石鹸

●品質ノ善良ト衛生ト經濟ヲ旨トシテ製煉シタル佳品ナリ

發賣本舗

東京日本橋區馬喰町二丁目

長瀬富郎

（電話特浪花三）

女鑑

第拾參年第壹號

謹みて讀者に告ぐ

新年は人に生氣に與えて、活動飛躍の心を起さしむ。予輩は玆に明治三十有六年の文壇に上りて、吾が女鑑第十三回新年初刊の筆を染め、讀者諸君と相見ゆるの光榮を負ふに當り、謹みて諸孃子の萬福無疆を祝すると同時に、敢て一辭の以て告げんと欲する所のものある也。

娘たる時代、細君たる時代、母たる時代の三時期は、女性がその生涯に於て必ず經過すべき歴史の區分なり。歳月は實に容顏花の如き可憐の娘子をして、双親の膝下より離れて、一家經營の任に當るの主婦たらしめ、哺乳鞠育の責を負ふの母たらしむ。斯くの如くにして、女性の本分は、歳月の進むに伴ひて、隨つて解決され、隨つて重課せらるゝ也。昨日までは娘子として深窓に養はれたる人々も、今日は他家の細君となりて、夫に事へ、舅姑に事へざるを得ず。今年は合歡の樂みに、餘念なき花嫁も、來年に至りては、可愛の子女の爲に、一身の歡樂を犧

性とせざるを得ざるべし。是れ之を女性天受の義務と云ふ。

思ふに本日を以て發端とせる、今年三百六十餘日の間に於て、わが讀者諸孃の中にありても、娘たる時代を去りて、細君たる時代に入る方も少なからざるべく、將た細君たる時代より進みて、更に母たる時代に遷る方も多からん。これ則ち一の義務を終へて、他の義務を負ゐ、以て女性の本分を全ふする所以なり。予輩は歳月が、諸孃子を促がして、斯くの如く次第にその本分を盡くすの道に向はしむるを祝す。

然りと雖も、たゞ娘たり、妻たり、母たりといふのみにては、苟も生を兩間に受けて、雌雄の別あるもの、孰れかまた然らざるを得ざるものあらん。娘時代に於けるもろ〳〵の修養は、妻たり母たるの道を敎へて、正經を誤らざらしめんが爲にある也。妻たらんときには、妻として守るべき道あり。母たらんときには、母として行ふべき道あり。女性がその本分を全ふするは、此の道を踏みて以て、過たざるにあるや、固より論なき也。

吾が女鑑が發刊の初より抱負とするところは實に此にあり。今日の主張と雖も又之に他なら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ざるなり。然りと雖も、開明進歩の今日にありて、頑癖固陋の見識を以て、女子問題を解決せんとするが如きは、株を守つて、兎を獲んとするの類のみ、誰れか其迂愚を笑はざらむや。明治の新婦人としては、孃子たると、細君たると、慈母たるとに論なく、開明進歩の見地より觀察を下して以て、正當の見解を求めざるべからざるなり。しかも勉めて圭角を避け、鋒鋩を包みて、圓滿熟成の期を待つは、婦女生來の德性を重んずるの道ならずんば非ずと信ず。夫の輕薄の筆を執りて、淫靡の文を弄び、快を一時に買ふが如きは、豈予輩の爲すを潔しとするところならむや。

予輩は三十六年の新文壇に上るに當り、讀者諸君に謹告せんとするところのものは之に外ならざる也。令孃、令夫人、及び慈母たる吾が敬愛すべき讀者諸君幸に此意を諒として以て、今後の女鑑を愛讀せられなば、予輩の本望何を以てか之に過ぎんや。



婦人教育と衞生の關係

前警察醫長 醫學士 山根正次

凡そ人間に身體と云ふものが存する以上此の身體を保護して滿足に保もつて行くと云ふ事は何より大切なる必要であります、それで、身體を滿足に保つてゆく方法が、即ち衞生と云ふ事になりまするが、こゝに私は、此の衞生と云ふことが、今日學校に居られて、種々なる教育を受けておらるる婦人方にどう云ふ關係をもつて居るか、それを述べたいと存じます。

婦人教育、一體教育と云ふ事は、智育でも德育でも、人間皆同等に必要のものであります、殊更に婦人だけ差がふ譯のものではありません、けれども婦人は重に家庭の内を修めるものであるから、其教育を實際に應用する時には、男子と異ることがありませう、實際智識道德の教への方則は、男女の別でそう異るべき筈はありません。

併し體育は少し異います、是は何故かと申すと、今日は婦人の身體の境遇が男子と大に異つて居るからであります。例を擧げますれば、婦人は家の内に居ることが多く、男子は家の外に居ることが多い、それから、男子は力の要る仕事をしても、婦人は力のいらない仕事をすると云ふ樣に、日比

の動作もちがひますが、今一つ差がふのは、身體についた事であります。

婦人の身體で、男子と異なる事がたしかにあります、我國の婦人には、頭に髪を結ぶことゝ、腰に重き帶をする事があります、それから何國の人でも婦人に免れぬは。月經と云ふ事であります。

頭に髪を結ぶことが、どう云ふわけで敎育に關係するかと申しますと、日本風の結髪は、大變に毛髪が引張れて、其上重いから、自然頭の皮膚が押し付けられて、血の通ひがわるくなる、鬱血とか貧血とか云ふ事になつて、頭痛がしたり、氣分がふさいだりして、學問をする、即ち腦の力を使ふに大變のさわりとなります、それであるから、敎育上にては、日本風の結髪は廢めていたゞきたいものであります。

それなればどうすれば宜しいかと申すと、私は髪の毛は毎朝よく梳き立てゝ、そうして輕く束髪にして置くが宜しいと思ひます、外國の婦人は、皆髪を毎日結ひます、毎日櫛を入れて、頭をさつぱりと心地よく掃除をする習慣であります、然るに日本では、婦人が髪を結ふと、一度結ふたのを、二日も三日も持たせて置く。こう云ふ人は行儀が宜いと云つて、人が譽めるから、一度結ふたのをなるべく大事にして、結直さない樣に心がける風がありますが、是等は甚だ笑ふべき事であります。日本でも昔は束髪であつたのであります、百人一首の繪を見ましても、昔の女は皆下げ髪であります、今日の樣に髷を結うて居るものはちつとも書いてありません、然るに徳川時代から、遊女などの姿を見て、良家の婦人達が、其眞似をする事が流行り出して、今日の樣の風俗となりましたのであります、此の事はどうか一般にやめて仕舞

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひだい事であります。

それから帶であります、是れは胸と腹にかつて壓し付けるもので、甚だよくありません、婦人の胸には成年になりますと、乳房が發育して、胸がふくれるものでありますから、幅廣の帶をすれば一層さし支えて、身を屈めるに苦しい位で、隨つて、身體の運動を妨げます、尤も日本の婦人方の衣服は、すべて體育によくありませんが、殊に帶がよくありません、完全なる教育を受けるには、身體の健康が最も必要であります、からどうかこう云ふ弊害を改めたいものと考へます。

(衣服改良の事は拙著改良服圖說に詳なり)

それから月經であります、是は婦人衛生上大切の事であります、之を注意する心得は常に知らなければなりません、(月經の攝生法は、拙著婦人の生活に詳なり)此の事に就いて教育上に注意すべき事は、月經の時期には身體が常より弱けるので、頭痛、耳鳴、倦怠、いろ〳〵のなやみが起りますから、修學中の人は殊に學問上に手心をしなければなりません、難解い科目を無理に勉強して調べたりなどしてはいけません、冬期などは感冒をひかぬ樣に注意しなければなりません、此の時期に於きましては、教育をする人も、教育を受くる人も、倶に注意しなければなりません、尤も人を教育する方の人は、教育を受くる人の月經の有無を知ることは、一寸困難でありませうが、修學者の身上には常に注意して、此等の塲合には、適當な便宜を與へることを、心得へていたゞきたいと思ひます。

此の如く、教育上婦人には、特別に衛生上の注意を要することがありますから、婦人にして教育時代に在らるゝ人々は、能く身體の上に關係の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある箇條を心得て、之をよく注意すべきこと、思ひます。

わらはに嬬の字

大槻如電

我國の言語に男性女性の別なしとは。近來の沙汰なり。されど婦人の自稱にわらはと云へるは。女性にてあるべし。

さて此わらはの語は古より童兒の義にて、童男童女を。そのわらはめのわらはと呼び分てり。其婦人の自稱となりしは。鎌倉時代より後ならんか。平家物語一の卷妓王の條に。

　妓王を出させまゐらせて。わらはが一人めしおかれなば。いと〻心うくこそはべらはんずれ

とあるは、佛御前の自稱なり。又謠曲の熊野に

　山の名の音羽わらしの花の雪。ふかき情を人や知る。わらは御酌にまゐるべし

とあるは。熊野御前の自稱なり。或人が雅亮裝束抄に。わらはを我の如く用ゐし所ありと告ぐ。雅亮も鎌倉時代の人なり。本書を一わたり檢せしが。其語は見當てかねつ。

又漫畫隨筆といへる書に論語季氏篇なる

　邦君之妻。君稱レ之曰二夫人一。　自稱曰二小童一。

とあるを引きて。貴女の自稱して童と云ふは此語に因るとあるは。漢學者流の例の説ならん。論語は船來最古の者にて。歷世誦讀の書なり。此書より採りしとあらば。夙く源氏榮華など古き物語ものにて。見るべきにこそ。さるに其事なきは穿ちたる言と見てよけん。

近時刊行の俚言集覽また隨筆索引に。此小童説を撈海一得の所載に註すれど。撈海には得る所

なし

わらはを婦人の自稱とするは。卑下の義無智の意と。和訓栞にあるは、其意を得たる說なれど、如何にして自稱に移りしかを說きおかざるは。ものの足らぬ心地すなり。いで私見を述ぶべし。

後房にて使令に供する女童を。わらは〳〵とのみ呼びしより。女童も召に應じて。わらはにてさむらふや。或はわらは此事つかうまつらん。など云ひしが。いつしか大人に移り、一時に流行語となり。はては大小彼我共にわらはと呼び來り。其流例ぞ婦人の自稱となりしにはあらぬか。鎌倉武士の時を得て。京人も東國語をつかふ世となり。雙方の語の互み替りに混ひ入りし折などに。わらはも婦人の自稱となりて。起りしにはあらずや。平語と云ひ謠曲と云ひ。はた裝束抄も其時代を詔するに足るなり。今日東京言葉の上方語を交へ。上國西國に江戸言葉の行はれつゝあるは。昔も今も異なる事なきを思ひ合するに足りなん。

そは兎も角もわらはの語は。六七百年來婦人の自稱即ち女性の言語となつて傳へ來れるなり。

さて此わらはに當つる漢字は。古くより妾の字を用ゐ。今も用ゐる人あれど。其字は側室の通語となり居れば。一般女子の自稱に用ゐんは。おもしろからず。余は嬬の字を以てわらはに當てんと思ふなり。是は他にあらず。女嬬と書きて。めのわらはと訓み來れるより考へしまでなり。

妾の字の正義は側室にあらず。支那の古制に。天下萬民の天子に對し。男は臣と稱し。女は妾と稱す。此事は尙書周禮などに見ゆ。臣の字は說文に屈服の象とあり。妾は接の本字にて。卑者の貴人に接給する義なり。此故に民の男女は皆君上に屈服接給すべき者なれば。臣妾の字を用ゐるなり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我國にても其制を用ゐさせ給ひ。儀制令に皇后皇太子。以下率土之內。於天皇太上天皇。上表。同稱臣妾名と載せ給へりかゝる御法なれば。君上に對し奉りてこそ。妾の字を用ゐるべけれ。對等の人に向ひては。餘りに卑下すぐる嫌ひありと思はる。

又禮記月令の註に妾謂內外命婦とあれば。元來給使の女を稱せしなり。其側室の稱となりしは。接幸の意より一轉せし者なるべし。禮記內則の禮を以て聘せしを妻とし。聘禮を行はぬを妾とす。是れ左傳に謂ゆる副室なり。我國にて專らメカケテカケに用ゐるは。この第二義あり

されど妾は多く側室の方のみに用ゐ居れば。わらはの稱には。ふさはしからず。因て妾の字を止め。新たに嬬の字をわらはに充てんと思ふなり。

清人錢辛楣の十駕齋養新錄に。婦人稱奴の條あり。宗の時より。奴を美稱として。皇后さへも奴と自稱せられし例を擧げたり。現今の女學生が。君よ僕よと呼ぶは。此奴の字に通ひて妨げなきが如し。されど奴隷、婢妾も人品の上からは。さまでの差別はあらじ。又同書に據れば。儂の字もよからんと思ひしが。詩吟めきて好ましからず。

嬬の字は字書に弱也とありて。手弱女の意に適ひ。又妻を嬬といふともあり。國のあづまに吾嬬を書くも此意より來る。女嬬をめのわらはと訓じ來れば。嬬をわらはに充てんも支へあらじ。而して漢字の字義に弱也妻也とありて。婦人の性行を表すべき好文字と思ふ。さればわらはに、この嬬の字をかゝれん事を御婦人方に望むなり。

此頃フト思ひ得たる說にはあれど。わらはの事は貞丈雜記などの諸書にも見えず。近來大著作なる故事類苑にも載せられず。世の博識者に照會せ

れん事を。女鑑に願ふなり。自惚鏡の見とな見たまひそ。

趣味論

文學士 沼波瓊音

趣味といふ語は面白味といふ意味に使はれる、またこの語は其の面白味を味ひ得る力といふ意味にも使はれる、例へばあの人は音樂の趣味を持て居る等といはれる。

趣味を持つといふは即ち好きだといふことである、好きといふは其物の面白味を會得して居るといふことである、趣味を持たぬ人から見れば全く無意味に思はれる物でも趣味を持つて居る人から見れば大なる意味を持ッて居るものである、圍碁の如き、知らぬ人が見れば無意味なる線の上に無意味なる白石と無意味なる黒石とを併べて居る、とより外は見えぬ、而し斯道に趣味を持ッて居る人の目には、其線其黒石其白石が悉く生命を持ッて精神を持ッて映ずるのである。

趣味は言で以て語ることの出來ぬものである、上戸は酒がうまいといふ、下戸は菓子がうまいといふ、何故にうまいかと互に問合ッた時には互に返事に窮するのである、其うまみといふものは言語で以て說明することは出來ない、文章の妙味の如きも同樣である。學校で教師が或る文章を講義する際にも只其難解な語を說明したゞけでは、其趣味を傳へることは出來ぬ、併し趣味は言以て傳へることが出來ぬが、方々より說いて人に隱れて潜んで居る趣味を描き出して來ることは或る程度まで出來る、この邊は其の說く人の技倆によることである、先日芳賀先生が帝國教育會の席上で文

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

學教育といふことを演說をされたが、其中にもこれと同意味の條があつた。

趣味には進步がある、教育して學力を養成するやうに趣味もまた練習によッて養成せられるものである、分り易いものから分り難いものに入るのである、小兒は深赤深青等の色を喜ぶが、大人は淡赤淡青若しくはいづれとも付かぬ色のやうなものを好むに至る、色でいへば華美なものからじみなものに、進む、音樂でいへば調子高きものから調子低いものに移り行く、平安朝時代には庭を造るのに廣濶な野邊をまねて居たが鎌倉時代になッては鬱葱たる深林をまねるやうになッた、からはいへども、じみなものを好むやうになッてもはでなもの丶外味を解せぬやうになるといふ意味では無い、趣味の範圍が廣くなるのである。

今一層廣く見れば、趣味の變遷は或程度まで波動をなして居る。はでなものからじみなものに、又じみなものからはでなものにおるもので、衣服調度より美術音樂文學の如きもの丶流行は皆其國の趣味の移變をあらはして居る。

人は何かに趣味を持つて居る、趣味の全くない人といふは決して無い、何かに趣味を持てばこそ人は生を好んで居るのである、學問に對しての趣味は無くて飮酒に對して大なる趣味を持つて居る人もある、これでも趣味は趣味である。

かくて趣味には體慾上のと（今少しくひろくいへば物質的の趣味）精神上のとある。この各のうちにも趣味はいろ〳〵等級がある、或る料理人が織田信長に第一等の料理を出したところが甚だまづいと言ッた、だから今度は第三等のを調理したが其れを大變喜んだといふ話があるが、これは信長が食物に就ての趣味が低いとを顯はして居る。

論說

貝原益軒の樂訓に、『讀書の一事は友なくしてひとり樂むべし、一室の中に居て天下四海の內を見、天地萬物のことはりを知る、數千年の後にありて數千年の前を見る、今の世にありて古の人に對す、わが身おろそかにして聖賢に交る、是れ讀書樂なり（中畧）これを好む人は天下の至樂を得たりといふべし』といッて讀書の趣味を皷吹して居る、これ等は精神上の高尙の趣味である、精神上の趣味こそ趣味中の趣味として尊ぶべきものである。

維新の頃には名所の櫻を伐ッて薪にする、名寺の垣を大砲で打ち毀つて畑にする、金屛風の金を剝がして取る等のことが盛に行はれた、其時代には實用以外の物の存在の必要を認めなかッたのである、其當時の趣味は物質以外には皆無であッたことを示して居る。

精神上の趣味が欠けて居る人は物質的に傾いて甚だ下品である、さういふ人で成立ッてる國は其國に品格といふものが更に無い。

嘗て讀賣新聞に我國の特長と題して、『歐米の中等以下の者の趣味は案外低くて、カルタを取り下等なる舞踊を踊り、玉突をする等、居酒屋で得る快樂の外は殆ど無い、わが國は殆ど各階級を通じて詩的趣味が普及して居る、鍬をとる農夫、庖丁を手にする魚屋にしてなほ且つ俳句をよむものがある、其苦吟に耽る瞬間には彼等は一の詩人である、又文學的會合が殆どあらゆる階級に行はるゝこと我國の如きは稀である』といふ意味の論があッたが、かゝる特色は保存したいものである。

趣味の無い人は何につけても不熱心である、高山博士の論に、『かくて趣味なき人は趣味なき家庭を作り、趣味なき社會を作り、趣味なき國家を作り、この大いなる人生をして徹上徹下趣味なきも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のとなし了らむとす、かの情を抑へて其の色を動かさゝる人は大いなりとして尙ばる、されど性を矯むるものは皆これ僞りには非ざるか、あはれ離愁に泣かず、公義に憤らず、冷灰枯木の如きもの何が故にひとり大なる』といふ語があッた、實に快絶の論である、こゝにいふ趣味は餘程意味の汎くて複雑なる內容を持つて居る、近頃出來た或る中學の敎科書に、この文が出て居たが、この文の意味をしみ〲と生徒に會得せしめる先生が、東京は知らず、地方に果してあるであろうか。

趣味の程度種類は其人の境遇によッて相當のものでならねばならぬ、繁忙な商業家の主人でありながら、非常に繪畫に耽ッて店のことをかまはず名畫採集にとりかゝッて居る如きは、趣味のために家を亡ばし身を亡ぼすものである、これは程度の過ぎたものである、普通敎育を受けて居る學生が卑しい小說に耽ッて學科を等閑にする如きは、趣味のために方向を誤り身を亡ぼすものである、これは種類の不當なものである。

普通敎育を受けて居る時代には、各學科に通じてひろく趣味を持つことが必要である、學科といふものを只苦しいものと考へて、苦しいが試驗に落第するのが恐ろしいので勉强し、いつまでも其の趣味を解せぬ人は、不幸にしてまた愚の極である、何にも身につくところが無い、牛乳の嫌な人が强て牛乳をのんでも充分に滋養にならぬのと同じ理である。

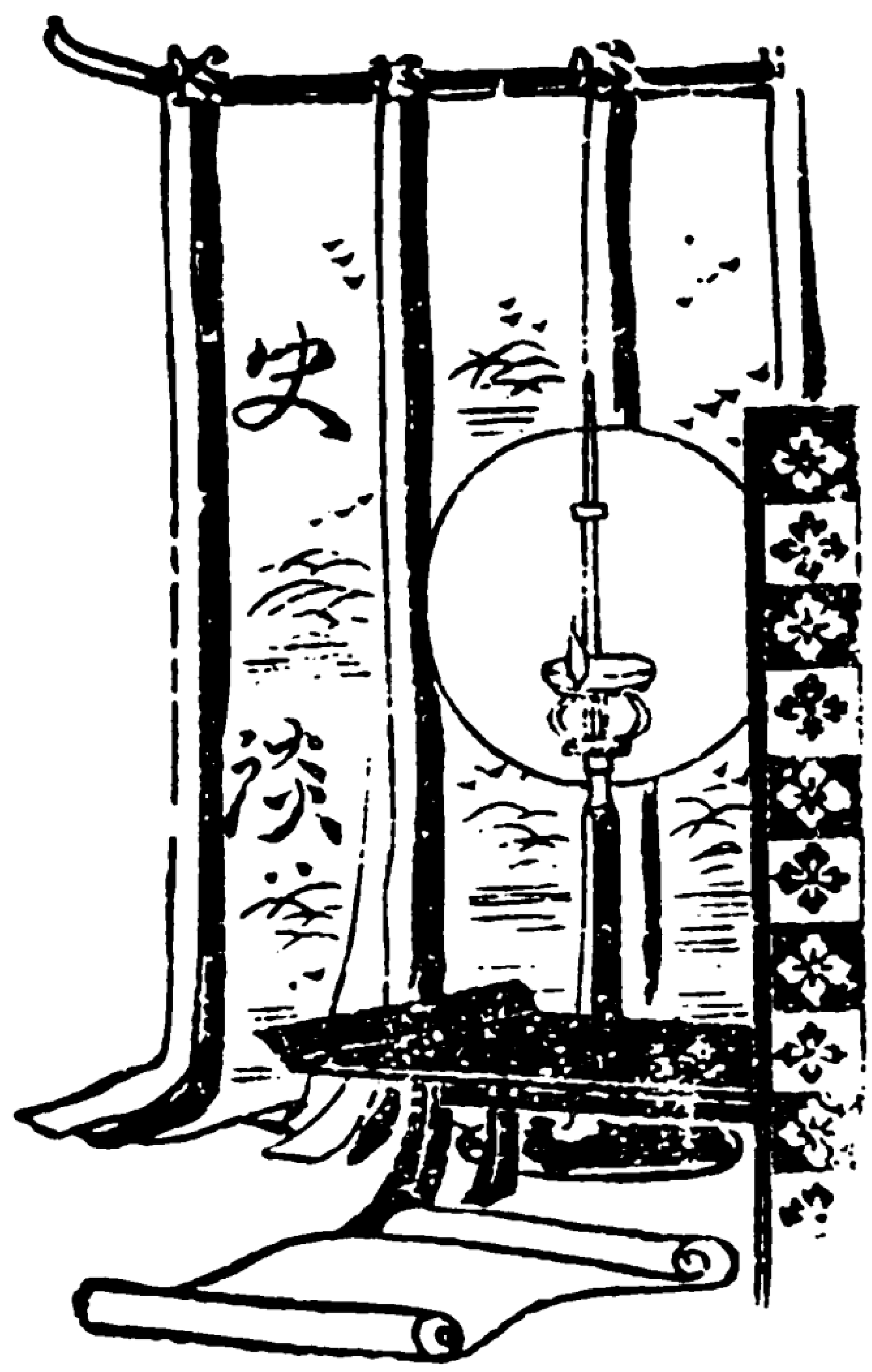
我は盲從的の勉强をするよりも、趣味を感じての勉强を男女の學生に望んでやまぬのである。

（をはり）

人の品格は其讀む所の書籍に由て之を判するを得べきこと猶ほ其の交はる所の朋友によりて之を判するを得べきが如し　スマイルス

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

史談



女優美巴孃

マリーコレライ女史作

河越てる子譯

あはれ其美しさと崇高かさとは、此世の者としも思はへぬばかりにて、儂の始めて彼女を見しは、さる名たゝる劇場に、彼が、妖魔の女王を装へる、其美しき姿なりき。

手は光輝ある笏を握り、小さき胴は薔薇の花環に飾られて、星の冠をいたゞける白き額の上に、房々とたれたる前髪の、さしも美しく、清らなりし彼美巴孃よ、孃が僅に、六才の罪なき其顔に、溢るゝばかりの笑を漂へて、立舞ふ姿は、夜毎に見る人をして袖を絞らしめ。男の堅き心をすら、熱き涙に滿たしめつ。

あはれ繊弱き其手は、絡まれ、拗撃けられて、あらゆる狂言の苦に堪へ、練り上げられしが、孃が斯くて日毎に技に進み、いつしか劇場前の浮帖に、驚くべき女兒俳優美巴孃と名を標さるゝに至りぬ。

這はいたく孃が罪なき魂を喜ばせしのみならず、猶一しほの喜悦と高慢を感せしめしは、同じ年の基督祭に、妖魔の女王を装ひて、魔棍をうち振り、花靈、巫女なんど、様々の從者を喚出す、

いとも崇高き所作狂言にてありき。

然り孃はいと好くなしぬ。さしも美しき魔棍の振方と、嚴肅なる勅令は、世に聞えある君たちと雖、容易くはなし給ふまじ。

されど、いやまさりて、儂の心を動かせしは、第二番目の幕にて、月さえ渡る妖魔の森に、可憐の孃が、魔棍を振りつゝ、大なる茸の周圍を跳り舞ふ處なりき。月の光は匂好き前髪を照らし、清く恭しき顏は、さながら繪の如く美しかりき。やがて唱歌となるや、囃方は調子を低め、いとも細やかに、美しき孃が音聲を妨げぬばかりに、徐々と進みつ。

燃ゆるが如き日の光
彼方の岡にかゞやきぬ
波立つ流に粲めきて
來れよ妖魔よとく來れ
わが永遠のふるさとの
月の後の玉の宮居に

聽衆が心の底より沸き出したる喝采は。わきて此唱歌の時にありて、孃は其小さき手に接吻し、いとも嬉しげに感謝の意を表はしつ。

次は取わけ優れたる者として、始より掲示されたる孃が秀逸ある舞踏にて、師の名だゝる某女史すら、いたく其才を誇りたりとなん、やがて幕は開かれ、可憐の孃は、匂やかに裝ひて、宛がら雲雀の遊ぶが如く、いとも輕らかに舞臺を飛翔し、驚くばかりの進歩をもて、名殘なく舞ひつくしたる樣は、あはれ純粹なる美術にて、見物人はひたすら感に打たれ、破れんばかりの大喝采の中に孃を葬りぬ。

憐むべき者よ、儂の目は涙に滿ちぬ、年まだ幼き女兒を、温き母の慈悲に浴せしめんとはせで、

一向に賞そやさんことの、なか〳〵に不便ならずや。

其後數週間を經るも、猶孃の姿の、まのあたり見ゆる心地して、忘られざりければ、一日興行主に書を送り、孃が來歷について、尋ねしに、細やかなる返書來り、且つ孃の病になやめることを告げ知らせければ、心もとなくて、急ぎ訪問れつ。

汚穢げなる旅舍の、なかば朽ちたる楷子を危みつゝ登りゆき、音なへば、戶は內より開かれ、姉にもやあらん、十七才ばかりある美しき少女の、多き髮の毛を、ゆら〳〵とたれて、眼を淚にはらし、無都かしげなる樣したるが、やゝ銳き聲を立て『何の御用です』と尋ねしかば、斯くと來意を告げしに『お這入なさい』と云ひつ、內に入れば室は眞暗く、いぶせきこと云はん方なきばかりにて、其那邊よりか、いとも氣力なき唱歌の聲の響くをきゝぬ、此時儂の胸は、云ひしらぬ哀に滿ち、靜に耳を澄せば、悲しや、孃が過る日の復句を謳ふにてありき

　來れよ妖魔よとく來れ
　わが永遠の古鄕の
　月の後の玉の宮居に

『那邊に居ます』と猶は無都かしげにながめゐる少女に尋ぬれば、彼方の隅に首を向け無言にて、其所と知らせつ、見れば粗末なる寢臺の上に、憐ひべき孃が、熱に浮され、輝やく眼を名殘なく開きて、髮もおどろに、悶え苦しむ樣の、心も破れんばかりあるに、あはれ猶、謠ふことを止めざりき、少女はいと倉卒に、『腦病です、醫者が明日は死ぬると云ひました、働が過ぎて喰物が足りなかつたからです、母は死んで仕舞つて、父が大變の酒喰ですから、私等の儲けるのを皆浪費つて仕舞

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ます、多分妹は死んだ方が樂でせう、私も死んで仕舞たいと思ひます」

斯く云ひたる時、少女の美しき顏にひそみたる執拗げなる色は、遽に失せて、目は柔らぎ、寢臺の傍に身を投くるや、咽び泣きに「可哀想に〳〵」と叫びぬ。

儂は泣入る少女を、ねもごろにいたはりて、何くれとなく心づかひし、燃ゆるが如き孃の額に接吻して、立ち別れしが、明くればとく其訃音に逢ひぬ、あはれ孃は夜半の嵐にさそはれて、苦多き浮世を離れ。永遠に其配下なる月の後の古郷へと旅立せしなり、今はのきはにも彼の美しき歌を繰り返しつゝ

來れよ妖魔よとく來れ
わが永遠の古郷の
月の後の玉の宮居に

（をはり）

三大女工傳

須藤求馬

我が國、女子の工藝は、いまだ幼稚にして、國家經濟の進運に向うて、その與ふる勢力は微々たるのみ、尤も、養蠶、製絲、機織、紡績等の事業に至りては、大に女子の手を待ち、常に女子の力に依り、旣に成功せるに相違なきも、其他の工藝に至りては、これとして觀るべき事業の發達を聞かず、そは固よりその筈ならん、武家時代を回顧すれば、女子工藝の範圍は、實に以て狹少にして、殆ど一家日用の外には出でざる姿なり、然るに近來、漸くその範圍領分を擴めんとする進運に向ひ、從來は男子の業と定り居たる事も、今日は、稍女子も之に從事する者出來つるに至れり、遂に國家擧つて、女子實業敎育を唱へ、女子工藝養成を說

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くに至り、女子に於ける美術工藝の、教育機關續續設立せらるゝ事とはなれり、誠に國家の爲、亦女子の爲、賀すべく祝すべき氣運時節到來せりといふべし、女子の獨立心を强め、女子の地位を高むるには、此上もなき次第なり、試に松にからめる藤を見よ、其高さも松の高さに比例し、その美觀も松に賴りて見らる、動もすれば、只松にからむのみならず、まゝ、松の繁茂を妨ぐることあり、而して松仆るれば俱に倒れ、また疇昔の態度を持つ能はず、これ昔時女子に於ける情態にあらずや、遂に、女子を以て家の累といはしむるに至る、亦所以あるにあらず、係累と家累とは、女子に對し、甚以て失敬なる言分なれど、名は實の賓とやら、事實なら、亦是非もなき次第なり、されど、昔時とても、藝あり能ある女子は、一見識を立て、身は、よし不如意の境界にあるとも、心は常に自由

鄕裏に住める例尠からず、されば、今その二つ三つの例を舉て、讀者の一覽に供せん。

浦上龜女（鑄物）

龜女は、肥前國長崎の人なり、父は浦上藏六といひて、代々鑄工を業とす、藤六性恬澹にして酒を嗜む、その技非凡にして名作多く、氣韻甚だ高く、その鑄冶せる物は、大抵皆高貴の美術品なり、龜女はその長女にして、容儀も賤しからず、性質聰慧くして、父藏六の氣質を受けて、物事に凝滯せず、幼より父の膝下に在りて、鑄冶の業に親炙し、好みて其の眞似をなす、長するに及びては、父の業を補助し、父歿するに及び、終にその箕裘を繼ぎ、女子ながらも家聲を落さす、龜女善く香爐を鑄る、娘藏六といひて以て世に賞翫せらる、龜女人となり豪放にして、婦女柔弱の體をきらひ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

父に似てか酒を好み、常に多くは男子に交遊せり、家貧しきも意に介せざるもの丶如し、客數十金を入れて、注文する者あれば、先づ酒肴を買調へ、近隣交遊を招き集め、樂飲し數日にして仕事に取懸る、嘗て長崎奉行、執政官の意を承けて、龜女をして香爐を製せしむ、半年を踰ゆれども未だ成就せず、そのうち奉行は、任期滿ち將に還り去らんとす、因て督責甚だ嚴急なり、歸期に先だちやうやく成る、されど、猶は未だ奉行所に差出さず、一日かの製する所の香爐を以て案上に置き、床に踞し大管を持して烟を吹き、熟視すること數刻、風致意にかなはず、乃ち斧を揮て一喝打碎す、奉行東上するに及び、香爐竟に隨はずといふ。

かゝる氣性の故を以て、その製作の氣韻あること、男子もなか〳〵及び難き所あり、余嘗て西遊の際、その製品を一見せしに雅致愛すべき者多數ありき、因てかれの氣性を想見せり。

高畑式部（和歌、管絃、彫刻、）

式部刀自は、高畑清音か妻にして、父某は、もと伊勢の國人なり、式部生れつき、敏くして、心匠細密、彼れに三つの優れたるわざあり、敷島の道、絲竹の藝、彫刻の技是れなり、式部幼き時より和歌を好み、父その好めるまゝに、當時斯道のの巨匠香川景樹が門に入れて、その敎を承けしむ、式部、性音樂をも嗜み、そのわざも亦尋常ならず、笙、箏、琵琶の三道をよく調べ、嘗て奈良の春日に詣でける時、彌生の三日、友かき三四人、打ち連れ、袖ふりはへて三笠山に遊び、麓より登る程に、高き松三本ばかりある蔭の、巖の上に蹲げていこひ、こゝにて、湯などたぎらし、瓢など取り出で、打ちみわたすに、四方の景色、えも言へぬ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のどけさに、笙一面吹きおんなど勧められて、袋の緒をとき、王昭君林鐘など吹きすさびければ、おもひきや、梢より寒蟬の聲、夏にもまさりて鳴き出でたるに、人々展轉して興じけり、刀自は、只に過すもかひなければ、

笛の音に永きねふりやさましけん
　　彌生のけふのせみの一聲

とかくなん詠み出でたりとぞ、また刀自は、女性には珍らしき彫刻の技に長けて最も精緻を極め、世に「式部彫」とこそもてはやさる、或る時、あやしく彫りたる物を友垣に送りたるに、その友の許より、詠みおこせたる歌の返しに、

敎へおきひか事ありてひかむしの
　　はひわたりたる跡ぞやさしき

と詠みて遣はせしとぞ、すべての事、世の人に立ちまさる女性になん、されば其の名も、當時海內

にきこえ渡りて、かくれなかりける。夫清音は、植松家の鍼醫にて、これも同じく歌よむことを好み、若き時より、芝山持豐卿に敎を年久しく受けしとぞ、清音身まかりて程もなく、師の翁景樹大人もなくなりたり、其の七日にまか出て、

かひもなく草の軒はを八千度も
　　くひに水鷄のたゝく成りけり

其の後刀自は、植松雅恭卿に仕へて、歌の事とも承はりつゝ、怠らず詠み居たり、或る時、

寄レ道祝

君はきみ臣はをみたる眞心の
　　道行にしそたのしかるらむ

又

八百萬いつれを行も神の道
　　わか眞心をおるかひにして

水無月はじめつかた、おてなる姫君にしたがひ、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東山の瀧見にまかでたるに、落ちくる清水を、きみら御手に掬ばせ玉ふを、

わて人の玉手に結ふ瀧のいとは
　大山姫やくりいたすらん

宮仕し丶時、その大殿なる有功卿、御心くるしう思ほしたまひし事ありしを、刀自ゆるひ上げ奉りし功にとて、式部といふ名を、黄金數々と、御歌添へさせ給はりたる、其の御歌。

にしこりの野邊に千年をつまんとは
　この若菜にてしるへかりける

給ひたるを、刀自かへしたてまつりて、

この春の惠みのかたま持出て
　老せぬわか菜千代もつま丶し

と、著す所「麥の舍集」「唐はりもの丶譜」の二書あり、麥の舍集は、刀自の平生に詠み出たる歌を集めたるものなり、明治四年歿す、年八十八。

太田垣蓮月尼

（書畫、和歌、陶器）

蓮月尼は、名を誠子といひ、太田垣傳右衛光古の女なり。光古は因幡國鳥取の人なり、故ありて京師に出て、智恩院廣間侍となれり、誠子その長女なり、みめかたち麗はしく、性質穎敏にして和歌をよくす、父母は掌中の玉と爲して鍾愛せり、はや年ごろにもなりしかば、近江國彥根の人、近藤某が子を養ひて、誠子にめあはせ、男女四人產みたれど、みな早世し、打ち續きて夫も亦みまかりしより、世のあぢきなさをかこち、みどりの髮を惜氣もなく剃りおとし、名も蓮月と稱す。そは三十歲のころなれは、殘れる花の匂深く、若木の枝よりも、見處多くありけれは、其の邊の若き男ども、そのうるはしき色香をめで慕ひ、兎やかく

史談

といひ寄る人多きを、いともうたてきことに思ひ、或る時、いと重き、秤の分銅の緒を以て、吾歯にかけて、拔取りたるより、その容顔も稍そこなひ、且つはその壯烈に膽を消し、またいひ寄らんする徒もなかりしとぞ、四十歳のころ、父光古も、みまかりたれば、家道もとよりゆたかならねば、因て活計の爲とて、かねて好める陶器を、手づくねに物して、それに自ら詠み出でたる歌を描きつけ、以て鬻きたりしかば、世の人その雅致あるをもてはやすこと大方ならねば、都邊の狡猾なる陶工は、そを模造して利を得たる者尠からず。而して、陶器は摸し得れども、筆跡は摸すべからず、終に相共に謀りて、尼が許に來り、其の如何せば可ならんかを請ひ問ふ、尼乃ちかれ等に陶器を作らしめ、躬ら歌を題して與ふ、因りて以て、尼の製陶を摸造する者數十家、爲めに糊口を得たりといふ。

また國々より都に上りたる者、歌詠みつたひてんやと、色紙短さくを持來りてこへる人多きをいといひて、家居を定めず、此處彼處と、うつろひ住みしに、終に西加茂なる神光院の茶所に住居ぬ、故に都人の口さがなきは、屋越の蓮月と綽號したりき、蓮月尼即ち一首を詠み出つ。

宿かさぬ人の心を情にて
朧月夜の花の下臥

と、こはよく人口に膾炙す、かくて明治八年十二月十日、その西加茂に於きてみまかりぬ、時に年八十五歳なり、やがてその寺内に葬りぬ。

病いまだ篤からざる時、いひ置けるやうは、尼のなからん後、柩の中へは、年頃持ち傳へたる短刀を必ず納めてよ、また屍には、男の手をな觸れさせそとなり、固より節操を主とし、儉勤を專らとしたる尼なれば、衣服調度などは、たゞ必用のみ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聞て、數多持たねども、病床の費は言ふまでもなく、埋葬の事より、讀經佛事に至るまで、毫も人を煩はせじとて、貯へ置きたるを、親しきまめ人に預け置きたりとぞ。その用意の周到なる、大方の男兒の及びがたき所あり、また女丈夫といひつべし。又筆の跡拙からず、畫もまた一つの趣あり、歌も年ころよみ捨てたるを、或る人拾ひ集めて、櫻木にゑりつけ、題して「海女苅藻」といふ。秀句いと多し。げに、いみじき女性にこそ。（をはり）

貴婦人の功績

無腸道士

寳刀舊主に還る

哲婦城を傾く、牝鶏の晨するは家の索るなり、婦賢くして牛賣損ふと誡め。其一方には親と夫とは無理なるものと思へ、亭主關白の位、抔と途方もなき事を説き。かりそめならぬ一家第二の主人公、内務兼大藏大臣とも云ふべき妻女をば、優柔猫の如く、沈默木偶の如くなれと敎へ導きたる其結果は、此の任重くして責大いなる妻女を無能卑屈に陷らしめたる、洵に嘆はしき事ならずや。今日識者の憂ふる國の貧しと云ふも、畢竟は家の貧しきにて、家の貧しきは一家の庶務を料理する妻女の無能卑屈其一因なるが、是れ併しながら妻女其人の罪にあらずして、其罪は之を敎誡し壓制したる男子にありと謂はざるべからず。斯の如く東洋流の敎育に束縛せられたる一般婦人の狀態極めて優柔に極めて卑屈なりし時代に在て、左に掲ぐる貴夫人の如きは、實に空谷の跫音、鷄群の一鶴と謂ふべき者ならん乎。

夫人名は豐姫、正親町大納言の息女にして、讃

州高松藩の第三世松平賴豐(謚惠公)の奥方なり。賴豐二十九歲にて義父賴常(謚公節)の讓を受けしが、間もなく奥方の御入輿あり、御夫婦の間も甚だ御睦かりしと云ふ。

先是高松家第一の寶物とする大原眞盛の銘刀を節公の時代故ありて柳澤甲斐守へ進せられぬ。其實は威力をもて强て請ひ取れしものなれば君臣上下惜み嘆けども如何とも詮方なく、節公にも此事を殘念に思し召されしが、御病氣に障りて遂に御逝去ありしと聞く。惠公より或時此事を奥方へ御物語ありしに奥方も深く氣の毒に思召され、妾如何にもして其御刀取戻し參らせんと御請合なされけり。元來柳澤家の奥方も京都の人にて 此の奥方の叔母に當られける。故郷に懸離れたる事、殊には一人の姪子とて大切に致されしかば、奥方も時々柳澤家へ參られ、甲斐守にも屢次面會せられぬ。或時甲斐守至極の上機嫌にてお元に何か進じたく思ふに、何品かよろしきや希望みあるべしと、云ひ出てられ。奥方は此處ぞと思ひ、先年より御家へ參り居り候 大原眞盛の刀は私方家寶の由に申傳へ候、御當家にては餘り御用ひもなき事に候條、右を私へ下し置かれ候樣にと思ひ入て願はれたり。甲斐守はよしなきねぎ事を言出てたりとの氣色も見えしが、今更拒みもならねば。それこそ易き御所望なれとて右の銘刀取出して、奥方へ遣はされけり。是れ全く奥方の御働きなりとて高松藩の君臣上下喜ぶこと限りなし、此銘刀今も高松家秘藏せらるゝとかや。

此奥方御輿入濟むと間もなき時の事なり、龍の口の上屋敷伊庭彌助の長屋より出火し、近隣の屋敷二軒を燒き拂ひ、奥御殿へも火懸りければ奥家老水原惣兵衛奥方の供廻りを揃へて御前へ罷り出

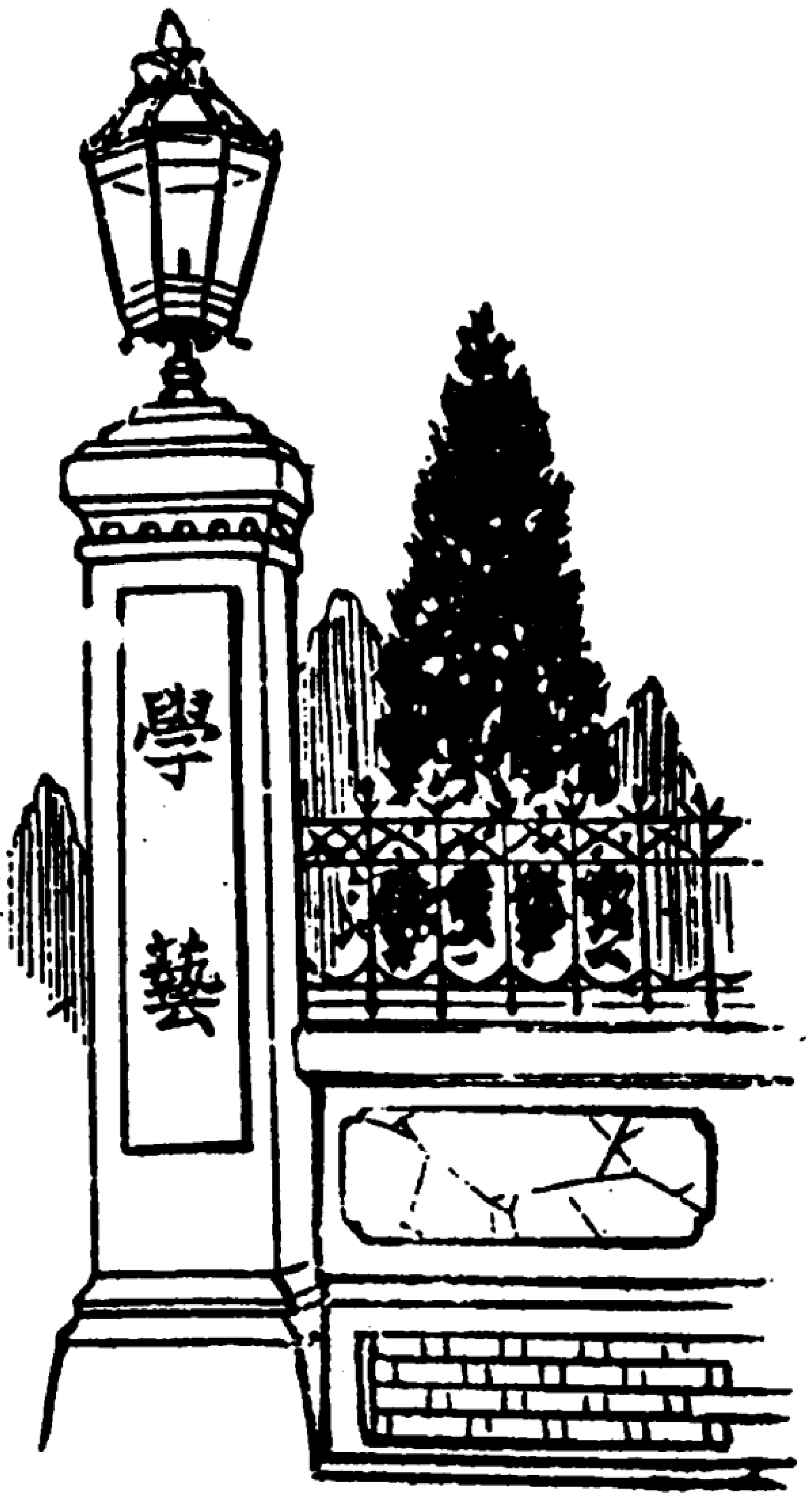
最早火かゝり候間早々御乘輿遊ばされ候へと言上す。此時奥方には少しも御搆なく侍女に命じて髮を揃へさせておはし、惣兵衞頻りに乘輿を勸れども、承引なく、餘り度々言上せしかば惣兵衞を叱りて、女には化粧といふ事あり、身仕舞の濟まざる内は一切外へは出でぬ法なり、若化粧の内に火かゝりて自分燒死候はゞ、其方は切腹せよ、と仰せられて緩々と髮を結はせ給ふ、彼是する間に火先は早く御座間に及び、天井より火の粉少しつゝ落ちかゝりければ、惣兵衞今は是非なしと覺悟を極め、陸尺共を指揮して御駕籠を御前に搬据へ、奥方をむづと抱きて駕籠の裏へ無理に押入れ、駕籠の戸をハタと閉て、急げと下知して目黒なる下屋敷へと御供申し、危き難を免れける。火事濟みて後惣兵衞、危急の場合餘儀なしとは申しながら、奥樣へ手を掛け甚だ慮外仕候、此上は如何樣にも御仕置仰付られ度旨願出でしに惠公仰せに、惣兵衞致し方道理あり、とて何の御搆もなかりしと、公家の御息女故勇氣はあらせられまじ、抔と殿中にて蔭言する者ある由を漏れ聞かせ給ふて、一人武威を張せられしならんと諸人感心せしとぞ。蕙蘭茂らんとすれば秋風之を摧くとかや、斯く迄智勇兩つながら勝れ給へる御身なるに天其才を與へて其年を與へず、程なく御逝去ありて栴檀院と稱し奉る、上下擧て惜まぬ者なかりしと云ふ。

扨右大原眞守の寶刀が柳澤家の手へ渡りし顛末を繹ぬるに。抑高松藩の先祖頼重卿(謚英公)と申すは、水戸家の先祖頼房卿の長男にて、東照公には御孫に當り、水戸の第二世黄門光圀卿(謚義公)の御兄上なるが、天性聰明にして、其上勇氣絶倫なりしかば三代の將軍家先公に信任せられ、寵

過大方あらず、追ては大國をも進せらるゝ筈なりしに、公には中壽にも至らずして御他界ありしかば、其より後は怏々として樂まず、軈て退隱ありて嫡子賴常（實は水戸義公の長子謚節公）に封土を讓られぬ。英公には元來五代將軍綱吉公と御間柄宜しからざりしに、水戸家は將軍にも柳澤家にも兎角反抗の氣味ありしに因るか、節公は柳澤に深く忌まれ、公儀の首尾甚だ惡しく、國替仰付けらるゝよしの御沙汰專らなりき。此時節公倩々思召さるゝ樣、我一身は如何になるとも惜しむに足らざれど若國替を命せらるゝに於ては、家中一同の難儀せんこと不便至極なり、此上は耻を忍びて柳澤へ取入り、一藩の無事を圖るより外なしと種々工夫を凝されしが、幸ひ浪人伊庭彌助なる者流浪の時柳澤と懇意ありし由を聞出され、三百石を以て召抱へ、右の手蔓にて柳澤家へ取入り、一ケ年三千兩宛を定法の付屆とする約束されしも甲斐守には猶捗々敷推輓する模樣もなかりしにぞ、節公キツト御思案あり、錫製の砂糖壺六個取寄せ給ひ、一壺に小判千兩づゝ都合六千兩を入れて自身に封印し、進物に遣はされしに、是より甲斐守の機嫌直り、其後は將軍御成の節には毎々先詰を命せられ、將軍四書を講ずる折は聽問を仰せ付けられ、染筆の額面を賜はり、又は城中にて御能の時仕手を命せらるゝ等、首尾殘る所なかりし。斯の如き次第なれば右眞盛の家寶も彼に望まれて餘儀なく贈進せしが、幸にも媳婦の働きにて再び其家に還りしこと、內助の功績洵に匙なりと謂ふべし。

人間には或る職業を嗜好するの性癖あり此の職業に從事すれば必ず世上に用ゐられ幸福を受くべし之を立身すべき天運といふ

エマーソン



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義（四十三）

かんたちめ、座をたちて、御はしのうへにまゐり給ふ。
殿をはじめ奉りて、攤うち給ふ、紙のあらそひいと、まさなし。

釋義

○かんたちめ　上達部にて、三位以上の公卿の稱○座をたちて　着坐せる席より起ちてあり○御はしのうへに　御殿の御階の上になり○攤うち　攤は雙六のことなり、物品を賭けて、勝負を爭ふ遊戲にて、當時さかりに、行はれしもの。此の遊びは、印度にはじまりて、支那に入り支那より、朝鮮を經て、日本に來れるなり。印度にて、波羅塞戲と名づけたるが、支那に入りて雙六と稱へけるにや、初め六の箸を投じ、白棊と、黑棊と、各、六を行るゆゑにいへりしが後、雙六盤とかはりても猶、もとの名を存せるあり。一說に、攤は雙六とは、全く別物なりといへどしからず。其の證は、

大鏡（九條右大臣師輔分の傳）に
九條殿さふらはせ給ひて、人々あまたさふらひたまひて、だうたせたまふついでに、冷泉院の

はらまれおはしましたるほどにて、さらぬだによひと、いかゞとおもひ申したるに、九條殿、いで、こよひのすぐろく、つかふまつらむと、おはせらるゝに、このはらまれ給へるみこ、をとこにおはすべくは、でうろくいでこ、とて、うたせ給ひけるに、たゞ一どに、いでくるもか。ありとある人、めをみかはして、かんじもてはやしたまひけるに

と、見えたるにて明らかなり。

さて、雙陸盤には、雙方、おの／＼十二の格あり采のふり方には種々ありて、昔のは知られざれど普通は、まづ、おの／＼馬、十二をならべ、黒と白とを以て分ち、さて二箇の采を、竹の筒に入れて、かはる／＼振りいだし、その出でたる數ほど格をかぞへて、馬をおくり、早く敵の格の中に送りおはりたる方を勝とせり、くはしくは、雙陸指南など見て知るべし。今、小兒の玩ぶ出世雙六道中雙六、京都名所雙六、などはこれより轉れるなり。徒然草にも

　盃などとれば、酒を思ひ、さいをとれば、攤うたんことを思ふ

など見えて、世間に流行せることは、はなはだしかりしなり、（猶諸書に見ゆれど畧す）〇かみのあらそひ　攤をうつにつきて、紙を競ひ爭ふことありしなり。

公茂公記に、乾元二年（後二條天皇の御宇年號にて今より、六百年以前なり）昭訓門院御產、三夜の條に、次立切燈臺（取替座上之高燈臺也）次置二圓座一枚於座上一（兩座中央也）次置二筒簺一次居二公卿座紙一（十帖許縛之（上に薄様三枚許加レ之（居二折敷一置二土高坏一上臈次第居レ之、奥座人前ノ板ニ居レ之、端座人後ノ緣ニ、一人ニ一束ヅ

、居之也)次自ニ下﨟置紙、其儀藏人、、參進置紙(圓座上)次藏人、、置紙(同前、元ノ紙ノ上ニ重之)云々、次予置之(其儀。兼季卿復座之後、折座下膝(右也)指笏左廻、取ニ紙一帖ニ(不取薄樣紙、一帖許ヲ拔取也)自中押折之由、舊次第有ニ所見、然而如ニ檀紙疊之間、只ウハカヒノ折目ヲ、今スコシ深ク折ナシテ、シタカヒノ折目ト、同程ニ折ナシテ持之、(是、今案、人々所爲、又、大畧如此)横持之、(切目左右ニナル、ウハカヒノ切目、前ノ方ヘナル也)當ニ劔柄上程持之、雖不帶劔、縱令如此)不揖起座、參進(左廻也)置紙(皆、一所ニ重置也、圓座上也、其儀、先懸ニ左膝昇ニ長押上、膝行(三度、先進右也)置之(紙ウハカヒノ切目ヲ、座下ノ下方ヘナシテ置之也、退不拔笏)右廻復座、不揖、先例經ニ兩座間置之歟、而、今度、皆、經ニ緣座ニ間狹之故歟、予、同經緣也)云々、次自ニ下﨟參進擲(按察大納言、入ニ賽於筒、各令打之)云々、予作法、不揖起座、參進膝行、(其儀、如ニ置紙之時)擲攤(賽ヲ上首人、納筒(兼テ納之、參進之後、可納之歟、但、今度如此)予取之圓座之上ニ移ス、其後、置筒(圓座上ニ、如元立ル也)其後、上首之人、取賽納筒也)畢、逆退、拔笏、右廻復座揖云々

など見えたり○まさなし　見苦しく、よろしからぬ意あり。さて、この條を、榮花物語、初花の巻に、

上達部ども、殿(道長公)を始めたてまつりて、攤うちたまふに、かみのほどの論、聞きにくく、らうがはし

と見ゆ

解譯

上達部なども、庭上の酒宴に飽きて、座を立ちて御殿の御階の上に參り給ふ。殿(道長)をば始め奉りて、攤を打ちて、おのおのの勝負をあらそひつゝ遊び給ふ。攤の勝負を決するとて紙の爭など、人からよからず、甚、見惡し。

通俗土佐日記　(第六回)

廣島商業學校教授　兒玉彌三郎

八日障ることありて尙ほ同じ處なり、今宵月は海にぞ入る之れを見て業平の君の、山の端逃げて入れずもあらなんといふ歌なむ思ゆる、

○障ること　とは此の頃旣に陰陽家の說、世に行はれたるなるべし、季節に應じ干支に依りて舟出を忌むこと、拾芥、諸事吉凶日部に詳かなり、折角、天氣好くて風波なき日は、生憎に忌日に當りて、一日も早く離れたき此の國をば未だ得去らざるの歎き尙ほの字に籠りて哀れ深し、

○月は海にぞ入る　とは普通に、月は山にのみ入る者と思へるが故に、特に、斯く言ひて、此の國に任せられずば斯かる月をば見まじきにと、是れも土佐の任の歎きを漏らせるなり、今宵に限り月のことを記せるは、連日曇りなどして見えざりしあるべし、

○之れを見て　の詞は、下の業平の君の云々を隔てゝ思ゆるといふ詞に續けて見るべし

○業平の　君四品阿保親王の第三子にして桓武天皇の孫なり、從四位上行左近權中將兼美濃權守にて陽成天皇の元慶四年五月廿八日卒す、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

尙は詳しくは、二月九日の條下に記せるを見るべし、

○山の端逃げて云々　是れは伊勢物語に「十一日の月も入りなんとすれば、あるじのみこ醉ひて入り給ひなんとす、右馬の頭の讀める、飽かなくにまだきも月のかくるゝか山の端逃げて入れずもあらなん云々」とある是れなり、今古集にも入れり、

○思ゆる　とは物の似かよひて思ひ合はせらるゝ義なり、

若し海邊にて讀まゝしかば、浪立ち碍へて入れずもあらなむとも讀みてましや、

○浪立ち碍へて　とは遮る義なり、

○てましや　は上の讀まゝしかばに對せるなり、上の海邊にて讀まゝしかばといへるも假設なれば此處も假設にて、業平の往昔の情と紀氏の今の情と、月の惜しさの少しも違はぬを思はせんが爲めなりやは疑の詞あれど穩かならぬ遣ひ方なり、

今此の歌を思ひて或る人の讀めりける、

照る月の流るゝ見れば天の河出づる湊は海にざりけるとや、

○思ひて　とは業平の歌の情を思ひてといふにて、專ら月を惜む心をいふなり、

○或る人　とは紀氏をほのめかしたるにて、此の歌、後撰集には貫之として出せり、

○照る月の流るゝ　とは月の天を渡ることの疾くして、既に入らんとする樣を思はせて、天河に寄せて流るゝとはいふなり、

○天の河　とは唯月の天を渡るのをいふなり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所謂銀河とは異なり、是は月の行くこと疾くして、舟の流れに隨ひて疾く下る樣に似たるをいはんとして天の河を取り出でたるなり、

○出づる湊は云々　此の出づるといふ詞は、天の河の流れ出づるをいふにて、出づとは海に流れ出づるなり、河は總て海に流れ出づるものなるが故に斯くいふにて、今の河尻、河口など是れなり、其の意は常の河こそ海に流れ入れ、天の河は其の例にはあらじと思ひしに、月の、天の河を流れて海に入るを見て、猶は普通の河の如く海に出づるものなることを知れりとの心なり、

○此の一首の意を解するには、此の歌の前の詞に今此の歌を思ひて云々とあれば、始終、此の意を離さで思ふべし、即ち此の歌は、朝臣の山の端逃げての歌の心を思ひて讀めるものなればなり詳しく言はゞ、彼の業平朝臣の山の端逃げてと讀みし時、天の河は元來海に流れ出づる者なれば、其の流れを渡る月は、山の端には入らで海に入る者なりといふことをば知らずして然か讀みたりしならんとの意あるなり、

○とや　とはとぞなどの如く、下の詞を省きたるなり、而して此のやは疑にて、確かには臆記せねど斯く讀まれたる樣に思へりと、女の記者の推測したるらしく書けるなり、

○此の一段は舟に乘りし日より、空曇り風波荒れて物憂かりしに、今日珍らしく空晴れ月も見えて海も靜かなるより、月の入るを惜む心を主として、業平の歌を引きたるなど、襟懷の打ち紛るゝを喜びたるも、畢竟此の任の憤りを晴らさんが爲めなり、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

◎會員募集

大日本英語學會

○會長 子爵秋元興朝君　講師坪内文學博士外數名

學期 本科、講習科共に一ヶ年 授業料 本科一ヶ月金五十錢○一ヶ年六圓講習科一ヶ月卅八錢一ヶ年四圓廿錢何れも初學より授業す詳細規則書に載す規則書は郵税二錢送付われは呈す

講習科用講義錄要目

- ●ナショナル第一、二講義
- ●各種讀本拔萃講義
- ●全
- ●全
- ●ブッシング
- ●チェスタフィルト尺牘
- ●文法
- ●作文
- ●會話
- ●全

文學博士 金澤庄三郎
文學士 畔柳都太郎
文學士 上田敏
高等範師教授 岡倉由三郎
文學士 土井林吉
文學士 上田敏
米國文學士 岸本能武太
米國公使館譯官 杉村廣太郎
松田一橋
博言博士イーストレーキ

東京市神田區西小川町 **大日本英語學會**
電話本局二八六一番

○**和英會話及會話文法** 講師イーストレーキ氏か會員の爲め特に講述せられたるもの各地の學校及び學生諸氏の希望多きに就き一冊として發行せり價償金五十錢郵税五四錢

國語漢文講義

◉本年度より更らに會務を振張し且つ紙面の面目をも一新すべし

本會講義錄の實質に就ては既に世間定評あり今日迄に講義紙上に登載し來れる講義其他の科目は左の如し

○增鏡(文學博士萩野由之)太平記(松井簡治)○宇治拾遺(文學士高津鍬三郎)孟子(文學士松山直藏)大鏡(藤岡繼平)○左傳(文學士桑原隲藏、同宇野哲人)○外史(文學士有馬祐政)○三代集(文學士武島又次郎)○論語(島田鈞一)○文章軌範(竹村鍛)○日本文學史(文學士和田萬吉)○支那文學史(文學士飯田御世吉郎)○國文釋義(文學士高木尚介)日本文典(國倉由三郎)○言語學(岡倉由三郎、文學士藤岡勝二)○漢籍解題(文學士桑原隲藏、文學士中山久四郎)○歌學雜話(文學士芳賀矢一)文部省檢定試驗國語漢文科問題答案其他各種の有益なる講義

入會金廿錢會費一ヶ月(講義錄二冊に對し)卅五錢一ヶ年四圓二ヶ年(全部四十八冊)七圓五十錢●規則書は申込次第送呈すべし

東京神田區西小川町二丁目九番地
國語漢文學會
(電話本局二八六一)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

勞働世界

月三回三の日發行
一部五錢
郵税不要

◎第一號には大隈伯の勞働問題談●第二號には安部磯雄氏の勞働問題の二要點●第三號には板垣伯の余が社會改良家となりし動機●第四號には浮田和民氏の社會主義に對する余の態度●第五號には天野爲之氏の其罪大盗よりも甚だし及文部大臣菊池大麓氏の職工教育談●第六號には矢野文雄氏の社會主義談●第七號には大原祥一氏の實力の養成及虚無黨之首領クロポトキンの肖像●第八號には西川大學總長の勞働問題談及戸水博士の談片●第九號には新渡邊戸博士の社會主義談●第十號には江原素六氏の御眞影と命人及原胤昭氏の犯罪人の通有性●第十一號には福池源一郎氏の日本の國粹は社會主義なり及江原素六氏の勞働問題談●第十三號には大學助教授荒川文六氏の電氣燈の話、杉山重義氏の天下の大勢に注意せよ及矢野文雄氏の四級開改善の急務●十四號には佐治實然氏の現時の三大謬想及安部磯雄氏の勞働者の得べき權利●第十五號には松村介石氏の今後の我及記者の社會主義獄中傳道●十六號には和田垣博の共働備貓園、福本日南の軍人と人民、片山潜の借家問題、職工のトプ水入浴●十七號安部磯雄氏の治安防害、宮田榮助氏の職工及徒弟、片山潜氏の文明と借家、小塚空谷氏の佐介宗吾●十八號にはコエーベル博士の日本人觀、幸德秋水氏の進化と社會主義、荒川文六氏の電氣燈の話●十九號には矢野文雄氏の四級開改善の急務、横井時雄氏の社會の腐敗等あり

●初號より連載論文片山潜氏の勞働問題の解決(十二號終)西川光次郎氏のクロプトキン傳(十八號終)幸德秋水氏の社會民主黨建設者血性男子(十五號終)野村逸民氏の佛國社會黨の首領ミルランの社會事業、堺枯川氏のゾラの新作勞働の梗概(數回)十九號より各國社會黨首領列傳を載せ首領の肖像を入る

●第廿號には杉山勞太郎氏の勞働問題談小崎大人氏の布哇に於ける日本勞働者●第廿一號幸德秋水氏の商業道德と社會主義浮田和民氏の社會問題と基督教●廿二號木下尙江氏の淺草區の社會的觀察、米國の大頭領ルウスベルト小松綠。●第廿三號片岡健吉氏の不生產的人物の製造所。江原素六氏の言語に付て矢野文雄氏の理想の幸福國●第廿四號には松村介石氏の大洪水來るべし。大崎辰五郎氏の貧民長屋

●毎號渡米案內の記事を載せ渡米者の便を計る內外の勞働界、社會主義一口ばなし等あり

ジヨン・パアンス

西川光次郎著

定價十二錢
郵税不要

要目●勞働者の同情者●詩人パアンスとジヨン●パアンス●石油箱上の辯士●彼は聽衆中より其の妻と師友を得たり●獨身者だからカマロの嘘●志士苦心多し●赤旗の人●テルソン起念碑上より炎々の氣焔を吐く●市會に於ける彼●大同盟罷工●國會に於ける彼●パアンスの書齋●パアンスの最後●結論

社會講演

定價十錢
郵税不要

本書は矢野文雄先生の「四級開改善の急務」と安部磯雄先生の「勞働者の得べき權利」とを以つて成り社會問題及勞働問題に意ある人々には好個の參考書たるべし。

書名	著者	定價	郵税
續渡米案内	片山潜著	一五〇	〇二〇
六版 渡米案内	片山潜著	一五〇	〇二〇
再版 社會主義	村井知至著	一五〇	〇二〇
英國今日ノ社會	片山潜著	五〇〇	〇六〇
ラッサル傳	片山潜著	一五〇	〇六〇
日本勞働運働	片山潜西川光次郎共著	二〇〇	〇六〇

申込　神田區三崎町一丁目十番地

勞働世界圖書部

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

第九號發行



毎月一回發行十五ヶ月完結◎會費一ヶ月二十五錢五ヶ
月一圓十五錢十ヶ月二圓二十錢十五ヶ月三圓三十錢

卷頭には本誌臨時增刊『講話集』に添附せし**新案懸賞**題の解答合格者**一千餘名**の姓名を披露し又**新年の中等教育**に並**第二講話會**開會の豫告を掲げ口繪には**早稻田大學開校**當日の光景を**精巧なる三色版**に附せる寫眞版**大隈伯邸の菊花壇**ベルギイの牛乳壷**新案**繪はがき**講話**には志賀學士、松村博士、糸講師、石川博士、横山博士、浮田講師、横地學士等の諸講話**講叢**には**四十**年前**夢物語**奇人譚、父と子三美譚、千古の波音**雜錄**には**文科大學**久保天隨氏の『ぬれ笠日記』**日用語彙**人と說話、通信、葉書帖實業用語案內、新刊紹介**中學日記、懸賞作文**を披露す

第三號…**三版**……第二號…**四版**……第一號…**五版發行**

發行所 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部內 **中等教育會**

賣捌所 東京神田 東京堂 同 有斐閣 京橋 東海堂 其他書林

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



今の業に鉛槧に従ふの徒、曲學阿世滔々
俗を爲し。眞に社會の耳目たる者。晨星
の寥々たるが如き時に當り。毅として此
く。濁流の外に立ち。三十二年一日の如
を懲し。弱者の枉屈を伸べ。強者の驕傲
者の犧牲たる事を辭せざるもの。敢て少數
れ我毎日新聞の本領なり。若し夫れ。是
犀利の論鋒を喜び。俠硬の詞章を娯
まんと欲する者は讀め！高尚の趣味
を味ひ。多大の實利を收めんと欲す
る者は讀め！庶幾くは汝の善友たら
ん。

本紙定價

一葉	金一錢五厘
一ヶ月前金	金三十五錢
三ヶ月前金	金一圓五錢
六ヶ月前金	金二圓十錢

外地方郵便税一ヶ月金十五錢但三ヶ月以上前金拂込の向に限り特に一ヶ月郵税金五錢に割引すべし即ち三ヶ月前金郵税共金一圓二十錢の事

廣告料

第一面特別廣告	一行金五十錢
一回以上	一行金卅五錢
三回以上	一行金卅三錢
五回以上	一行金三十錢

東京市京橋區尾張町新地七

毎日新聞社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の變するものよりして之を觀れば則ち天地も曾て一瞬なること能はず、其の變せざるものよりして之を觀れば則ち物と我と皆盡くることなきなり。（蘇東坡）



和畫通信講義

山崎彩峨

墨書にては、先淡墨を含めし筆先に、濃墨を附して、石を畵き、淡墨の隈を施し、また、淡墨を含めし筆に、濃墨を附して、花草を畵き、土を書て

季畫

淡墨のみにて、土の點を打ち、淡墨の隈を施し、後ち、濃墨にて、花心葉脈石點を打ち入るゝなり彩色なれば赭墨か墨淡かを含めし筆に濃墨を附して、石を畵き、極めて淡き墨か淡き藍墨が赭石の量多き淡き赭墨かにて、隈を施し、濃墨にて點を打ち（綠青を加ふるもよし）夫より胡粉を筆に含め、胭脂を先に附して、花を畵き、（八重は紫色なり、符號の順に（鮮綠色にて、草（イロの印は筆端に胭脂を附く）葉（裏葉は黄かちの青色）莖幹を附し、土を畵き、淡き黄かちの青色にて、點を打ち、淡墨を含めし筆先に、赭岱を附して、土に隈を施し、濃き青色にて、花帶の線、（芙蓉の條參照）濃き藍墨にて、葉脈を入れ、胭脂にて、花線花心（紫色の花は、紫色にて入る）を入るゝなり。（石皴は他日山水の條に詳說すべし）


一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
イ
ロ



家庭

老人の看病（保育會に於ける演説）

後閑菊野

高うございますが、是から申上げます。實は今日私の勤めて居ります學校の、高嶺校長に此御會から何か御話をと云ふ御依頼があつたさうでございますが、校長は御差支でもございますか私にまゐつて何かお話をしますやうにと云ふことでございました、の私は思ひ寄らぬことでありますから再三御斷りを申したのでございますが、是非にと云ふことで據なく御請けを致しました。御集りの皆さまに對しましてはさぞ御失望でゐらつしやいませうと誠に御氣の毒に存じます、私は斯う云ふ御會に出まして御話し申すことは一向いたしませぬのでございますから、どう云ふことを申上げれば少々でも御聽き下された甲斐があるでございませうか、其邊の所も誠に不案内でございます、從ッて事柄の選び方も不行屆と存じますが、併し此頃色々と見聞いたしたことで少々感じましたことがございますから、今日は老人の看病と云ふことを御話し申さうと思ひます。事柄は趣味もございませず、且つ申上げ方も甚だ拙うございましてさぞ御聽惡うございませうから、御退屈になりましたり、或は自然御用でもございました折

は御遠慮なく御立ち下さるやう前以て申上げて置きます。

一體婦人が家を治めると申すことは是は天然自然の職務でございまして、此事に付きましてはたれも疑ひを容れず、異存を申さぬ所でございませう、それは婦人の性質が温和でございまして爲事に能く行屆いて居るからでございます、デ近頃は段々女子の教育が盛んになつて來ましたに付きましてはそれ〲、專門の學問を修めまして、それで以て、身を修め、銘々一つの職業に從事して、家事などには餘り關係しない人も隨分でございますが、それは特別の事情のある人であつて、自分の女子から申せば、人の母となりまして、家を治め子供を教育するのが當然でございます、其當然の勤めを盡しまして、尚は其上は餘力がございますれば慈善事業なり、又世の中の公益になることとなり、又は教育或は技藝のことなり、何なりとも自分が相當と思ふ所の事業に從事いたして、其事に骨を折ることはそれは、宜いのでございます。それで、此御會なども、色々御目的がございせうが先づ第一には、慈善と云ふことを御事業として、御設けになりましたといふことを伺ひまして、誠に結構と存じます。さう云ふやうな風に色々の事業に付ても、婦人が今少の世の中の公益事業に力を入れるやう、將來益々奬勵して行くやうに、ありたいと思ふのでございます。併ながら、ドウも家々の都合に依りまして、雙方に力を分けることが、出來ないと云ふことがございますなら、公共事業は暫く差措きましても、家事には熱心專門に力を盡さねばなりませぬ。即ち天賦の職分と云ふものは、ナントとしても避けらるゝものでないと覺悟をせねばなりませぬ。

以上一家を治めると云ふことは、是は婦人の必ず司るべきものであると云ふことを、念の爲に申上げたのでございます、デ其家を治めると云ふについての事柄は、色々でございます。家事と申す中には色々の事柄が含まれて居ります、今日御話申上げる、老人の看病と云ふことも、即ち其家事の一つでございます、さて此老人と申します者は一家に取りましては、祖父母とか或は老父母とか申す者でありますから、尊長者で最も尊敬すべき人でございます。其老人は若い時から夜晝心を盡し、骨を折りまして、家事の切り盛りを致し、子供を教育し、社會に對しまする所の勤めを終へて是から餘命を安心に送らうと云ふ、時期でございます。現在跡繼におなりました、息子や娘などが一度び此老人の惠みを受けて、自分が是ほどまでになッたことゝ思ふならば、ドウしてそれを尊敬せずに、置くことが出來ませうか。さう云ふやうに尊敬すべき人でございますから、心の中に尊敬しやうと云ふ念がございますれば、キッと之を外に現さねばなりませぬ。唯心の中で思ッて、自分で決めて居りましても、之を外に現さねば、向ふには通じませぬ。之を現しますのは外でもございませぬ。言語擧動に現れねばなりませぬ、其言語擧動に十分注意を致しまして、言葉を恭しくし擧動を鄭重にし、萬事に付て尊敬して居る心を現さねばなりませぬ。我國では、昔から老人を尊敬すると云ふことは、他の國に優ッて居るのでございます。是は日本が特に孝道を重んじ、又風俗が總て手厚いと云ふ所からで、あらうと存じます。實に是は善い風でございます、我國の美風なのでございますから長く存したいことでございます。西洋ではさほど老人を大切にすると云ふことは申

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しませぬ。人道の上からも衛生の上からもあまり申しませぬ。それは國風が違ふからでございます我國で漫りに其眞似を致して、息子娘などの口から、老人と云ふものは、別居するが宜いなど丶云ふことは、決して言ッてはならぬのでございます。尤も他方から申しますと、老人と若い者は、別に居さるが宜い點もございませうから、さう云ふ意見を持ッて居る人が、老人になッた時に、さう致しますのは宜しうございますが、今假に之を老人に申すことは、愼むべきであります。成るべく同居して居ッて、朝夕尊敬の意を以て、之に孝養を盡さねばなりませぬ。老人と申すものは、もう既に世の中の勤めを終へて、仕舞ッた人々でございますから、自然人と交際することも少くて、樂みといふことに乏いため動もすれば退屈を感ずるものでございます。そこで其家の人は、皆努めて之を慰めやうと、思はねばなりませぬ。それには老人の好む所のことがございますならば、豊に之を備へるやうにするがよろしうございます。例へば詩歌を好む老人もありませう、或は音樂又は謠曲――謠ひのやうなものとか、或は圍碁――碁でございます、それから骨董の好きな人もございませう、又書畫の好きな人もございませう、或は茶道の好きな人もございませう、又は盆石盆栽など色々の好みがございませう、さう云ふ類のものは、素より暮しの程度に、應じますのでございますが、成るべく急でない所の費用を省きまして、其方を豊に備へて、さうして、心を慰めるやうにせねばなりませぬ、其上成るべく、其老人の好むことに付ては、若い人も一緒になッて、好むやうに致し、又時々は、同じ道を樂む友達などを呼びまして、會を催し、お茶の好きな人であれば、お

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

茶會の友達を呼んで、時々會を催す。それは若い人から勸めて、チヨッとお茶でもなされてはいかがとか、何會を催してはいかゞとか勸めるやうにして、始終慰めて參る。又ドコと宜い所がございますればそこへ同行を勸めるやうに、折々の景色などを利用いたし、秋なら菊見に行ッたらドウでせうとか、夏なら涼みにまゐりませうとか、一年中色々時期がございますから其時期を利用して、誘ひ出すやうに致し、又色々の會もありますから差支ない限りは、老人の最も慰みになることは、成るべく連立つやうにして、運動を怠らせぬやうにするがよろしいのでございます。老人を安らかに靜にして、置かうと思ッて、一室に籠らせて置きますのは、老人を慰める所以ではなくて、却ッて健康を損じて、退屈を感ぜしめますもので、身體及び精神にとりまして決して良い養いでございませぬ。樂隱居にして、用の無いやうに、蒲團の上に座らせて置くのは、決して幸福でありませぬ此節は、老人の會なども、開かれて居るやうでございますが、至極善いことゝ思ひます。あゝ云ふやうなことは、若い方々が、色々御加勢なされて面白い組立てにして、益々出席の方が多いやうに會を進めて行くのは、善いことゝ思ひます。是等のことは、老人の心を養ふに大事でございます。唯衣食住の養ひが十分であッて、それで、足りて居ると云ふものではございませぬ。即ち樂隱居として、食物衣服を十分備へてあるから、それで十分盡して居ると思ッては、間違ひであります。それより一層高尚の孝養の仕方は、精神の保養でございます。それに又老人と申しますものは、記憶力が餘ほど乏くなッて、居るものでございますが、經驗の多い所から、自然判斷力に富んで居ります

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭

さうして事が周密で能く行屆て居ッて、人の考へ及ばぬ所に氣が付いて居ります。故に經驗の少い若い人は何かと指揮を仰ぐが、宜しうございます、決して老人などは、話相手にならぬなど丶言ッて、侮ることなく、大抵なことは老人に相談して、其事を處するやうに致したい。老人を度外に置いて、何事も關係させぬといふことは、老人の感觸を惡くするものでございます。我が家には父母が居られて誠に有難い、我々はいかほど其おかげを蒙つて居るか、知れぬとカウ若い人々が思つて居るといふことを知らしめねばなりませぬ、それを老人は最も喜ばれるものでございます、さう云ふやうに、精神を能く養ひますことに、平生から氣を付けねばなりませぬ。

（つゞく）

運命も德に勝つこと能はず　プルターク

感冒の話

尼子四郎

頃日は寒冷の砌で、感冒者が大部多き樣でありますから、一番感冒の御話を致しましよう。

感冒は全身又は身體の一部が、冷ゆるために起る病氣でありますが、急に冷ゆるが爲に起るよりは、寧ろ徐々に冷ゆるが爲に起るものであります假令て見ますれば、冬の日に水中に落つるか、或は水を被るが如く、急に身體の冷ゆる場合よりは机に倚り何か面白き仕事に氣を奪られ、寒冷を忘れて居る場合か又は夜中蒲團の外に足杯を出してその冷ゆるを知らざる場合等に、感冒に罹る方が多くあります。故に感冒に罹りますには、身體に觸れる寒冷が強さよりは、寧ろ少々弱くとも長く觸れると云ふことが必要であると申さねばなりま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せぬ。彼の夏に於ても、感冒に罹りますのは、全く此理でありまして若し感冒に罹るに強き寒冷に觸れることが、是非必要であるとしますれが、夏季感冒に罹るものは全くない筈でありますが、實際さうではい處を以て見れば強き寒冷に觸れて必要のないことは明かであります。又皮膚のみ冷へて深部まで冷へざるときは、感冒に罹らぬものであるか足のみ冷へて下肢全體の冷へざるときも感冒に罹らぬものであるかと云ふ問題がありますが決してそれ等の區別はありませずして、何れの部にても冷へさへされば、感冒を起します。然らす全身又は身體の一部の冷ゆるときは、何故に感冒を起すか、詳しく申しますれば、寒冷が如何なる働きをなすが故に、身體に感冒と云ふ病的變化が起つて來るのであるか、と申しますに、古は只神經の作用、即ち神經の傳達作用のみによりてこれを説明致して居りましたが、今日では身體中に血液分配の不平均を起すからであると云ふことを以て説明致して居ります、即ち吾人の身體は寒冷の空氣又は水が觸れますと、皮膚の血管は神經の作用にて、收縮（痙攣）致します、故に、皮膚の血液は身體の內部の方に追ひやられます、そこで皮膚には血液が乏しくなりまして、其部は厥冷し且つ蒼白色を呈しますが、之れに反し身體內部の臟器は非常に血液に富むで參ります。斯の如く吾人の身體は寒冷の爲めに血液の配分に不平均を起されます。辭を代へて申しますれば、皮膚は貧血し內臟は充血致します。されども此皮膚が健康でありまして、加ふるに寒冷に觸るゝ時間が、短くありますときは、皮膚の神經の作用にて、所謂反應と云ふものを起しまして、寒冷が去ると同時に今迄で收縮して居た處の血管は直に擴張りまし

て先に內臟の方に逐ひやられました處の血液は再び皮膚の方に還流ります、そこで皮膚も再び暖くなりまして、赤色を呈す樣になります。故に斯の如き場合には、感冒に罹らずに濟みますが、之れに反しまして、斯の如く速に反應が起りませぬ場合、又は全く反應の起りませぬ場合に於きましては皮膚は何日迄でも貧血狀態に止まり、又內部の臟器幷に筋肉等は何日迄でも充血の狀態に止まり、血液分配の不平均が何日迄でも去りませぬが故に、遂に內部の臟器に種々の障害が起ります、吾人が感冒と申します處のものはこの障害でありまして、この障害を起すには、斯の如き順序を經るのであります。尙は深く立ち入りて研究しますれば、感冒の爲に血液にも一種の變化を起しその變化の爲に血液は外部より來る各種の病原に抵抗する力を失ふ樣になるに違ひありませぬが、憾むらくは今日尙未だその研究が、十分に行き届きて居りませぬから、果して如何なる變化が起るものなるか、茲に御話し致すことが出來ませぬ。

前にも略ぼ述べましたが、不意に劇しき寒冷の身體に觸れる場合とを徐々に劇しからざる寒冷の身體に觸れる場合とを、比較致しますに、甲の場合に於ては感冒に罹ることが、至つて稀れでありまして、殆んど感冒に罹らずと申しても可き程でありますが、乙の場合に於ては、最と容易く感冒に罹ります。その故如何と申しますに甲の場合に於きましては、吾人は能く寒冷を覺へることが出來ますが故に、直に外套を着し、頸卷を纏ひなどして、之れを防ぎ、又一方に於て皮膚異常のなき限りは、直に反應を起しますが故に、感冒に罹らぬのでありますが、乙の場合に於きましては、寒冷を覺ることが出來ませぬ故に、之れを防ぐこと

が六ケ敷、縱令寒冷を覺へ之れを防くと致しましても、その時に、既に機を失して居りますから何の役にも立ちませず、又一方に於ては皮膚の反應の起ることが、至つて少なくなりまして、皮膚血管の收縮（痙攣）が長く續きますが故に、皮膚は久しく缺決蒼白等貧血の狀態を呈し、從つて血液分配の不平均が容易に故の如くに復しませぬ。故に感冒に罹り易いのであります。

身體並に身體の一部が冷へますと、斯の如く感冒に罹りますが、冷へずして單に流通する處の空氣に觸れ、忽ち疼痛を起すものがあります、斯の如き人は直接に寒冷の空氣に觸れずとも、能く疼痛を起しますが故に、この疼痛は身體の冷ゆるが爲に、起るものにあらざることは、明かであります。即ち此疼痛は身體の冷ゆるを待たずして、起るのであります、而して何故に流通する處の空氣に由て、斯の如き疼痛を起しますかと、云ふに、皮膚の神經、所謂空氣性神經が過敏となる故であります。元來皮膚には濕神經及び冷神經の二種がありますが、其外に此空氣神經がありまして、空氣に感じ疼痛を起すと思はれます、彼の痛風又は僂麻質斯に惱む癖あるものは、多くはこの神經を有するものでありまして、斯の如き人は、能く氣候の變換及び、天氣模樣の變化等を、早くより豫知致しますが、その確實なることは善良の時雨計にも優つて居ります、而して何故に斯の如く、能く氣候の變換、天氣模樣の變化等を豫知致すかと申しますに、身體に疼痛を覺ゆるが故でありまして、此等の人は天候が不良にならむと、致しまするに從ひ、益々不安となりますか、或は電擊樣の疼痛を感ずるものであります。されども天候が順當に復します。と此等の症狀は全く無くなりますが

故に、恐くは空氣の電氣緊張に由りて、皮膚の神經が刺撃せられ、斯の如き症狀を起すのでありましよう。近き頃まで大學校の御傭教師でありました處の、ベルッと云ふ人は、暖き居室と寒き隣室との間の戸が、僅に一分六厘計り隙きて居ても忽ち脚部に疼痛を覺へ、又兩手を室温と同温の水中に入るゝときは、初め半分時間寒冷を覺へ、次でたの感覺消失し、却つて腕部全體に劇しき疼痛を覺る、性質を持つて居らるゝと云ふことです。之れは空氣に對する感じの強い一例でありますが總心て僂麻質斯に罹り易き素因を有する人は、極めて僅かにして、殆んどその寒冷の知れざる程の刺戟が空氣神經に加はるときに於ても、忽ち僂麻質性發作若くは神經痛等を起すものであります。故に前にも述べましたる通り、此場合に於きましては、寒冷の作用は必要ならずして、却つて短時間の空氣の刺戟が、必要なのであります。併しながら空氣の温度、温潤若くはその電氣緊張は皆な空氣神經を刺戟して、斯の如き症狀を起さしむるのでありますが故に、獨り只だ短時間の刺戟のみに、重きを置くは、穩當の説とは申されませぬのであります。

次に何故に感冒に罹り易きか、感冒に罹り易き原は何處に在るかを、穿索して見まするに、その實は獨り、吾人の皮膚の神經機能に在りまして、この機能に異常を來しまするときは、容易に感冒に罹ります、彼の神經質の人すなはち、其神經衰弱して、感應力甚だ強き處の人は、事物に感動し易く、且つ瞋怒し易くして、又些細の事に驚愕するの傾向ある計りでなく、低き音響、音樂等を嫌ひ、時としては縫針の落つる音すらも嫌うて、耳を塞ぐ癖がありますが、そは此等の音が神經に

餘り強く感じるからであります。之れを均しく吾人の皮膚の神經も、斯の如く衰弱して、感じが强くなりますときは最も僅かの寒冷に遭ひましても甚だ强く感じまして、直に皮膚血管の收縮、次で皮膚の貧血、筋肉及び內部臟器の充血を來しますが、同時に反應を起す力が減じて居りますが故に、反應が容易に起りませず、從つて血液分配の不平均が、容易に故に復しませず、よし故に復しましても、甚だ不十分であります。之れ即ち斯の如き神經を有する人の、感冒に罹り易き所以であります。要するに感冒に罹り易き原因は、皮膚神經の感じの强きと、反應を起す力の弱きとにあるのであります。

而して、斯の如く皮膚神經の衰弱して、感じの强くなります處の原因は、他の神經の衰弱して、機能の不良となりまする原因と同じものでありまして、他の神經が、その機能を失ひますときには皮膚の神經も亦その機能を失ふものであります。彼の神經質の人が感冒に罹り易きは、全く之れが爲であります。されども皮膚神經の機能を失ふ主たる原因は、皮膚の軟弱となることでありまして凡べて神經、筋肉、臟器等は之れを能く使ひ慣せば、慣す程その機能、善良となるものでありますが、若しあまり之れを使はずに置くか、或は全くその用を廢しまするど、神經にせよ、將た筋肉にせよ、時を經るに從ひて、自然とその職分を忘れまして、尋常の機能を營み得ざるに至ります、故に餘り防寒に注意して、冬も夏も綿入れの下着を放さず、戶外に散歩するには、常に「マンテル」若くは毛皮製上着を着し、室內に在るときは、常に室溫を列氏の二十度に保ち、更らに身體を洗はず又決して浴湯に行かず用心に用心を重ね只管その

家庭

身體を寒氣に觸れしめざる樣に、致しますときは皮膚は寒冷に對する反應即ち反對作用を起すの機能を失ひまして、偶まに寒冷刺戟に遭ひましても普通健康の皮膚の如くに最早赤色を呈することが出來ませずして、却て蒼白色を呈し、且つ厥冷致します。從つて先きに寒冷の爲に不同となりたる血液の分配を故の如く平等にすることが出來なくあります。之れ即ち同時に皮膚の神經が衰弱するからであります、斯の如き軟弱にして、神經機能の十分あらざる皮膚を有する人は、瞬間時の油斷にて、忽ち感冒に罹り、少しく足が冷ゆるか、又は身體が冷へますと直ぐに鼻感冒、咳嗽、及び身體或部の疼痛抔を起すものであります。(つゞく)

健康なる時に病を研究せよ。　英國俚諺

裁縫

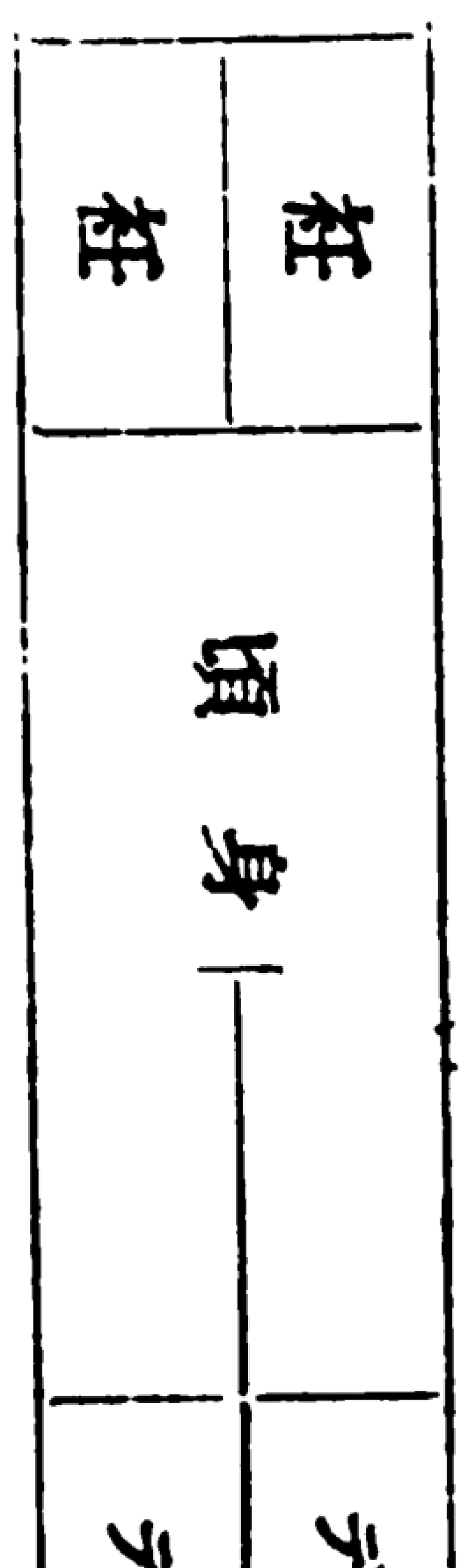
一つ身袷の裁方

橫濱高等女學校教師　中村むめ子

一つ身の袷の仕立方を、お話致そうと思ひますが、表は前回にお話致しました、裁方に依てお裁ちになりますれば、よろしいので、ありますから、此度は裏の裁方をお話致しませう。

巾九寸五分長さ九尺二寸の布にて、一つ身裏の裁方

但し袖丈一尺四寸衽下り二寸



14,×2=28,……袖丈

(92,−28,+2,(衽下り))÷3=22,……身丈

22,−2,=20,……衽丈

裁方の解

九尺二寸の內から二尺八寸取りまして、之を竪に二つに折りまして、半巾に裁ち兩袖に致します、次に四尺四寸裁ち切りまして、身頃とし殘りの二尺を衽にするのであります。

積り方

總尺から袖丈の二倍を引きまして、それへ衽下りの二寸を加へ、そして三で割りますれば身丈であります、

又表の身丈に依て裏を裁ちますときは、例へば表が袖丈二尺二寸、身丈二尺三寸の裁ち切りとしますと、此裏の總尺は九尺五寸九分いります即ち

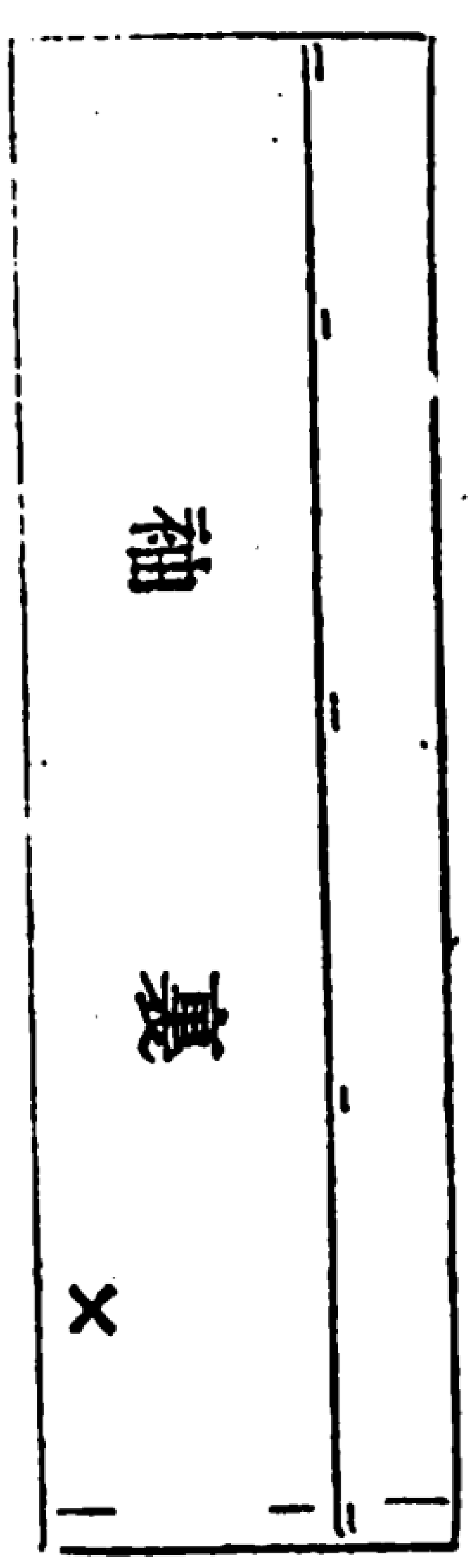
14,×2=28,　23,+,3=23,3

23,3×3=69,9　69,9−2,=67,9

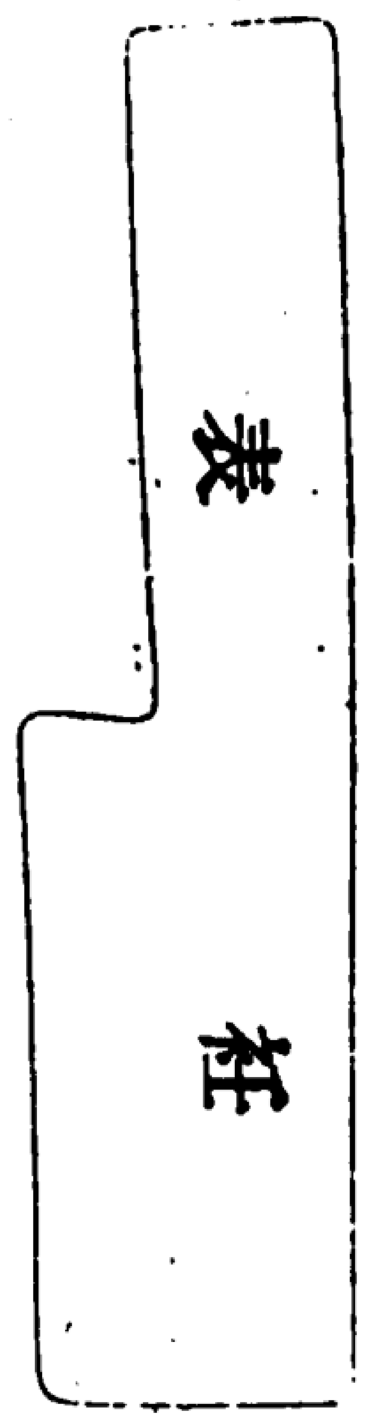
67,9+28,=95,9……用布

箆の仕方

表の袖と身頃とは、前の單衣と差異はありません、只裏は糸目丈巾をつむればよろしいのです、それ故此處には、裏袖と衽との箆の仕方を、圖でお目にかけませう。



袖口を重ねたる圖



衽を四枚合せたる圖

同縫方順序

先づ裏袖に袖口をかけまして、折は袖口切の方に返します、次に裏袖を己の向ふに表袖を前にして合せ、袖口切を少しくひきつる加減に針を打ち(袖口切の品質により裏袖巾へ切を足す)其處を縫ひ、

縫目は表の方に返します、板の上に置きまして、袖巾の印を付けます、それから八つ口を縫ひまして、其縫目は裏の方に返します、袖下は裏表共四枚一所によく合せて縫ひ、出來ましたらば引き返し縫目を正しくして躾をかけます、これで袖は出來ました。

だいどころ

女子東京美術學校講師　石井湧太郎

初春のまゝごと　松竹梅

中皿　松風　さより

椀　竹の子　うすうち　花かつほ

猪口　梅あへ　たゝき牛蒡

○椀の拵方、鑵詰の竹の子を小口からなるべく薄く切り湯に入れて一寸茹でゝ、後ち鰹節の煎汁一合と醤油三勺の割を以て合せ（竹の子の多少に由り煮汁の加げんあるべし）煮立せ之れに入れて下煮を爲すべし、又花かつほは鰹節の眞を盃猪口の片砕を以て削り置くなり、大概の物を調味なさんと欲する時は第一番に煎汁を取り置く事肝要なり、煮汁の取り方は、鰹節を三分間程ぬるま湯に浸して、其の外部を削り捨て、其の次に削りたるを用ふるなり、例へば四合の煎汁を取らんとならば、沸湯四合の内に、片手に一ト握（大凡十匁程）の削り鰹を入れ、直ちに鍋を火より卸し、少

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時靜ませて後煮汁漉にて漉すべし、此の器なき時は布巾にて漉すもよろし、さて煎汁四合に醤油一勺五夕（盃に八分目程）味りん一勺二夕、食鹽一匁を入れよく煮立せ、椀に竹の子を盛り露を入れ、終りに花がつほを少し摘み入るべし。

◎中皿の拵方、醤油と味りんを等分に合せ、火にかけて煮つめ、半分程になりたる時下し置くべし、之れはてりの製法なり、細魚は少しく鱗をふき（ふきとは取ることなり）次に首をつき（つきとは切ることあり）腹をわけ腸を出し一度洗ひて、開らき中骨を取り次手に尾も切るべし、之れに鹽を振りて暫らく置き、鹽の大略染みたる頃鐵の串を指すべし、此の時魚の兩端を少し裏面へ折り返し（之れを妻折と云ふ）て指すあり、然して水をかけて鹽を洗ひ落し、火に掛て兩面を燒き、二三度てりを引き、板の上に置きて熱きうちに串を拔き、煎りたる芥子を皮目の方へ振りかけるなり、之れは二つ付けして出すべし、芥子を掛けたるを松風とは云ふなり。

◎猪口の拵方、牛蒡の皮を剝き三寸程に切り水に浸して置き、よく其のあくを出して後ち鍋に湯を沸し之れに入れて茹で充分柔らかになるまで湯を三度程取りかへてなすべし、次に又煎汁にて之れを煮込み爼の上にて摺木を以てたゝき崩し五分位に切りて梅びしほを以てあへるなり。

反復熟習せざれば至つて易き技藝と雖成熟すべからず反復熟習する時は至つて難き學業といへども成就せらるべし

スマイルス

ふみ讀めば大和もろこしむかしいま
よろづのことを知るぞうれしき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



保育に就て（承前）

醫學博士　三島通良君演説

そこで親の乳を哺ませ、或は牛乳、コンデンスミルクを哺ませるにしても、乳は何月まで哺ませたら宜いかと云へば、凡そ一年と言はなければならぬ。殊に本邦の子供の發育を觀ますと、生れてから五ヶ月乃至六ヶ月に達すると、生れた時の目方の二倍になる、例へば生れた時に八百目あッた子供は、五ヶ月乃至六ヶ月の所で一貫六百目になる、滿一年で三倍する、即ち其子供は滿一年になッた時は二貫四百目になる是が原則です。歐羅巴の原則も之と全く同樣でございます、日本の生れ立ての赤子の目方は凡そ三千グラム八百目ございます、それで此子供が五ヶ月遲くも六ヶ月で二倍、十二ヶ月で三倍になります、五つになッて五倍になる、男は十三十四女は十二十三になッて十倍になります、是が日本の子供の育ち方であります。そこで生れた時の目方の三倍にあッたくらゐの時が、先づ普通乳を離して宜しい時と言はなければならぬ。それはさういふ風に極めて置きました所で、先刻來申します通り子供の育ちの善いのと惡るいのと、又乳の適する適せぬがございますから、是は無論其時々に依つて始終斟酌して行かな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ければなりませぬが、先づ大體から申せば一年といふくらゐが先づ宜からう、是ならば我邦の子供にも餘り不適當で無からうし、マア一番都合の好い所ぢやアないかと、私は考へて居るのであります。

併しそれなら乳を離すまでは、子供に何んにも食はすことは出來ぬかと云ふと、是はさうではございませぬ。我邦の子供は通例生れて八ヶ月目(七ヶ月)に至ッて齒が生ります、女の子は少し早うございます、男は少し遲うございますが、平均七ヶ月(第八ヶ月)に於て齒が生え初める、通例下顎から生え初める、上から生えるのもありますが、先づ下から生えるのが並みです。齒が生えて來たといふことは、同時に幾らか澱粉質の物をこなす働きが是から附くぞといふ徵しである、齒が生えて來たソレ直ぐと物を食つて宜いといふのではありませぬ、齒が生えて來れば是からソロ〱澱粉質の物を消化し始めます、左樣御承知下さいといふと同じことで、其齒が生えて來るといふと唾液の分泌が始まる――唾が出る、澱粉質即ち米麥とかいふ風の物は、唾液の働きがございませぬと本統にこなれるものでは無い、齒が生えて來て、唾液の分泌が始まつて來まして、初めて是から澱粉質をこなすことが出來ると云ふのです。其時澱粉質の物をソロ〱與へて行けば、それで子供は育ちます、併し隨分是まで皆樣も御聞及びでございませうが、下等社會などで子供が生れて母親が死んだとかいふ時は貰ひ乳をする、それも思ふやうに行かぬで仕方が無いと乳の粉といふもので育てます。乳の粉は何かと云ふとアレは多く米の粉を寒晒にしたもので、それを煮てさうして其中へ少し砂糖を加えて飲まして居るのです。從來西洋

にも乳の粉はございますが、牛乳や玉子の黄みを他の澱粉に混ぜたものであります。日本の乳粉は大抵米の粉即ち眞粉でございます。ソンな物を生れ立の子供にやつて居つてもドウか斯うか育たないことも無い。それは育つことがございます、育つことはございますが、謂はゞ餘程運の好い子供と言はなければなりませぬ。全くそれでも育たぬことはありませぬが、併しそれは十人に一人で大抵はソンなことをして置けば、マア死んで仕舞ひます。ドウしても子供に向ッては人間の乳か、或は動物の乳といふものを與へてやらなければ本統に育つ譯に行きませぬ。そこで矢張是等の物を與へて行ッても――即ち人乳を與へ或は人工養育をしても、共に此齒が生え始ッたらばそれから先きは漸々澱粉質を以て養ふのが通例であります。此頃は少し物を欲しがるやうになると、ビスケットを遣る、私の考へます所ではビスケットも悪るいことはありませぬが、鹽煎餅が宜い。鹽煎餅も成るたけ硬いので……さういふ物を與へますと小兒はビチヨ〳〵是を舐ッて居ッて、到頭唾で之を柔らかにして食べ始めると云ふ工合です。さうでなければ葛湯或は粥湯のやうな物、即ち澱粉質の極薄くした物を少し鹽氣を入れて食べさせる、さうして段々馴らして行く。其の内には齒もおひ〳〵生えて、唾液の分泌が盛んになッて來るといふと、モウ食物を取るやうになります。それで早い子供は第十ケ月ぐらゐからドシ〳〵物を食べます――百姓の子供であるとか下等社會の子供でありますと十ケ月ぐらゐからおちやくらゐ煮て食べさせて育ッて行くのであります。それも一時にやらぬやうに少しづゝ馴らして行けば、段々硬い物を食べさせても能くこなれます。斯ういふやうに御考

へになッて御置きになれば宜からうと思ひます、即ち身體にそれだけの徵しが現はれて來たら、段々氣を附けて少しづゝやッて行けば害の無い食物を與へることが出來ます。

それからソンな風の事柄でまだ御話をしたいことがございますけれども、又折があッた時に御話をするとしまして、私はモウ一つ皆樣方に今日御話をして置きたいことがあります。それは添寢のことです。先刻申しましたやうに我邦では子供を可愛がる所からして、必ず親が子供を抱いて寢る、是は甚だ宜しくない。成程下等社會などになると一體寢具が少ない、是は已むを得ぬ譯で、さうして貧乏人は子供が一人生れると夜具の一枚違ふと言ひます。子供が寒いだらうと言ッて、親が抱いて寢るのは不都合千萬であります、其譯は親の方で何時でも子供に溫められて居るのです、子供が寒からうと言ッて抱いて寢ますが、子供の方から言ッたら「旨く言ッてらア」と言ひませう。それも寢具が足らぬ爲めなら已むを得ませぬが、寢具が澤山有る所で乳母が抱いて寢たり、親が抱いて寢るのは宜しくない。何故宜しくないと言ふのに子供を抱いて寢る爲めに受ける害が非常に澤山ございます。一は子供を側に寢かして置くと、親が寢返りなどすると子供が目を覺す、目を覺まして、啼くからちやうずが出たいだらうと言ッてちやうずをさせて其後で乳を哺ます。さうしておッかさんが子供を抱いて乳を飲ませながらツイ自分が眠ッて仕舞ふものです。さうすると此乳房で以てスッかり子供の鼻を押へる、そこで窒息して殺す、それがどのくらゐあるか知れませぬ。私は始終其調べをしやうと思ひながら、ツイ自分の職務が忙がしいのでさう參りませぬが、東京府下でもチヨ

附　録

イ〜新聞に出るのを見ますが月に二つ三つぐらゐは必ずあります、年に東京府下だけで三十人四十人ぐらゐの子供は、必ず母親或は乳母の不注意の爲めに窒息させます。是が子供が六ヶ月以上になると自分で首を振ることが出來る、そこで若し母親が誤ッて乳房で塞いでも、首を少し振れば鼻が明いて居るから鼻で息をします、それ故六ヶ月以上になれば危險を避けるやうになる、それ以前の子供は自から首を振ることが出來ませぬから、親が乳房で壓しても「おッかさんいけませぬよ」とも何んとも言はないで其儘子供が親に殺されて仕舞ふのです。是等は實に僅かばかりの不注意の爲めに、非常に長い間自分が大事にして居ッた子供――大事にしておなかに十月も居た子供を僅かの不注意の爲めに自分で殺して仕舞ふのであります。此は日本全國の統計を取ッたら存外澤山の數であらうと思ふ。而して是は此母親が添寢をする添乳をする弊から起つて居る事なのです。其他にもまだ害がありますが此は略します。若し子供といふものに添乳添寢をすることは、保育上大變害が有るといふことを母親が知り子供は自分より離して置いて、さうして子供が目を覺したら起きて乳を哺ませ、自分は自分の床へ這入ッて寢るといふことになッて居りますれば、マサか餘程の不注意餘程居ぎたない女でなければ自分が其儘打ッ伏して眠ッて仕舞ふことは無くて、必ず其の害が少なくならうと思ひます。斯ういふことはドウか皆樣方の方で矢張保育といふことに就いて、社會の爲めに始終繰返して新聞なり雜誌なり御話なり世間話なりで宜しうございますからして御注意なすッて、此不注意なる母親又は乳母が斯ういふことの爲めに、子供を窒息させることを一日も早く救

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

濟したいと私は豫て心懸けて居ります。尙ほ子供を獨りで寢かしては冬は寒むからうといふことがありませうが、それは誤りで決してソンなことはありませぬ。それは布團が薄かッたら格別、子供は冬獨り寢かして置いても足はポカ〳〵して居ります、其足が冷めたいやうな子供なら到底育たないくらゐのもので、さういふ子供は特に注意しなければなりませぬ。併ながら年取ッた姑御さんなどは大變心配するもので、子供を獨り寢かして置くソンなことはないと言ッて、叱られませうが、何と言ッても是は實行せねばなりませぬ。ソンなことを言ッて此處におッかさんが御出でになりましたら內證にして御貰ひしませう。又寒からうと思ふ時は麥酒の德利ぐらゐに湯を入れますとか、或は懷爐でも宜しうございます、それを子供の足の先から一尺程隔ッた所に置けばよい、ソンな物は要りませぬが足が冷える心配がありましたら、懷爐或は麥酒の德利に湯を入れて、卽ち湯たんぽを拵へて其子供の足から一尺程隔ッた所へ置きますと、決して朝まで子供の足が冷えることは無い。さういふことを考へますれば、子供の爲め子供の爲めと云ふが、實は母親の爲めに身體を溫めてやるやうなものだと、子供の方では云ふに違ひない。そして今のやうに僅かの不注意の爲めに一人の子供を殺して仕舞ふ、斯ういふ恐ろしいことは無いから添乳添寢といふものは廢して、それを氣を附けたら大變世の中の子供の爲めに利益だらうと思ひます。チヨッと今日此保育のことに就いて御話する機會を得ましたから、此事は皆さんにも御願ひして倶にドウか注意を世の中に與へるやうに御骨折を願ひたいと考へます。それで此子供の保育のことはナカナカ澤山ありますから、一日

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

や二日の御話で盡す譯には行きませぬからして、復た折がありましたら御話をすることに致します。

一つ申上げて置きますが此に掲げました日本小兒發育表でございます。是は私が十二年程掛ッて日本の子供に就いて調べました發育表でございます。是は生れまして一週間二週三週間までは毎週のこと、それから先きは一ケ月毎に十二月まで出て居ります、それから先きは一年毎に滿十五年まで男女の子供成長の有樣を平均數に據ッて顯はしたのであります。ドウか少し御子さんの育て方に付いて御注意なさらうといふ御方は、此表を何處ぞ御懸け置き下さいまして、さうして月に一遍、それ程、度々いけませぬければ三月に一遍でも宜しうございますから、御子さん達の目方などを御量りになつてさうして此表と合せて御覽になりますと、御子さんが普通の發育をして居るか、普通の子供より劣ッて居るか優ッて居るかといふことが分ります、又それを繰返して御やりなさると、中には若し御子さんに側から見ては何も障りが無いやうだが、何處か身體に故障が有りはせぬか體重が増さぬと云ふやうな時は、直ぐに、御自分にわからなければ、醫者に賴むといふことも出來ます。子供を育てるには斯ういふ物を備へて御置きになることは最も御便利のことであります。聊か手前味噌のやうでございますけれども、是は私が作りましたので、まだ誰も他に研究した人が無いのでありますから遠慮なしに自分のを持ッて來て此へ掲げました。それから此數は學問上からやりましたので身長はセンチメートル、體重はキログラムで出て居ります、それを日本の目方、尺に換算する方法は下に附けてございますから、極簡單

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に皆様がチョッと鉛筆を御持ちになりまして、日本の寸尺貫目に御直しなさることが出來ます。それの御入用の方は御直しになッて御使ひになれば直き之に慣れます。體温器は大抵攝氏の寒暖計を使ッて御不自由ないやうなもので、御慣れになれば此數を見て直ぐに御分りになるやうになります。まだ御話したいこともございますが、少し今日は齒の痛みがある爲に演說が甚だ不充分でございます、依つて後日舌の運轉の良い時充分に御埋合せを致しませう。

（完）

附言　日本小兒發育表は定價三十錢郵稅二錢にて京橋區銀座一丁目廿二番地大日本圖書株式會社に於て發賣して居ります。

瑣事相集りて完璧を作る而して完璧は最早瑣事にあらざるなり　ミケール、アンゼロ

漫錄

女性と俳句

小泉三申

『女性と俳句』といふ、一寸面白き問題ならずや、俳句が美文學で有るとか無いとかの理窟は深く問ふを要せず、僅かに十七文字の短形詩を以て、情を叙し、懷を述べ、天然の風光、人事の變遷を詠ふ事の、容易にして且つ趣味多きは、之れを他の遊戯娛樂に比し、假令より優らざるまでも又た決してより劣らざる上品ある遊戯、無邪氣なる娛樂と爲すは敢て不可なかるべし、殊に其の用語は、漢詩和歌のそれの如く不自由なるものにあらず、和漢雅俗勝手放題にして更らに拘束なきが故に、無學者も能く其の門に入るを得べきと共に、學者讀書人に在ては殊更深く妙味を咀嚼するを得べし、則ち俳壇は精神的娛樂の公園地なり、何人を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

漫錄

も迎えて自在に風流を娛ましむる也。

俳壇の門戸が、爾かく開放さるゝに拘はらず、古來婦人の之れに遊ぶ者甚だ多からざるは如何なる故か、否、婦人の俳句を嗜む者亦た必ずしも尠しとせざる可し、然れども、俳風一たび貞德の門に起つてより、元祿享保に至て其の盛を極め、延て今日に至るまで、時に盛衰消長ありと雖も、流行能く三百年間の久しきに亘りて、普ねく全國に及ぼし、俳句の量と俳人の數とは年と共に加はるのみ、三家村裡にも尙は天狗宗匠あるに比すれば、女流俳家は晨星の寥々たるにも如かざるなり、況んや今の時は女學の隆盛前代未聞にして、美術に、文學に、工藝に、音樂に、名媛才姫輩出して百花妍を競ふの觀あり、俳壇の氣運も亦た甚だ盛んなるに當り、一女流俳家の起て園女千代尼の名を成す者なく、一般の婦人界亦た甚だ冷淡にして、女性と俳諧とは、恰も方圓相容れざるが如く然り、奇と謂ふべし。

女性俳句を嗜まずとするか、俳壇女流を容れずとするか、芭蕉が行脚の掟に曰ふ、女性の俳友を親む可らず、師にも弟子にもいらぬ事なりと、されど是れ固より俳諧の趣味が女性の性格に適せざる謂にあらず、又た固より女子と小人とを同樣視して「養ふべからず」と爲せるにあらず、謂ふ所の男女の別を正さんと欲して、自ら戒め門下を訓へたるに過ぎず、されば其の下に於て、凡て男女の道は別を立つるのみ也、流蕩すれば人敬す可らずと曰へり、彼が梢風尼と親み、智月尼と知り、園女と交りたるが如き、其の證と爲すべし。

蓋し婦人が俳句を嗜むこと和歌を嗜むが如くなる能はざる所以は、(一)俳諧の趣味が多く諧謔に在りて、和歌の趣味の優美なるに如かざる事、(二)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俳諧の用語が多く卑俗にして、和歌の用語の古雅なるに如かざる事、(三)詼諧の聲調が多く緊迫にして、和歌の聲調の流暢なるに如かざる事、等に在るべし、殊に詼謔と卑俗とは、婦人の品位と調和せざること勿論にして、女性と俳壇との疎遠の源因としては尤なるものと爲すを得べし、而も此の如きは俳諧に對する誤解に外ならず、試みに芭蕉が園女に與えたる

　白菊の目に立てゝ見る塵もなし

の句、智月尼が

　我が形も哀れに見ゆる枯野かな

の句を諷誦せよ、彼の詼謔といひ卑俗といふものの影だも止めずして、其の聲調も亦た優にやさしきを知るに足らずや。

　余は固より俳句を推し和歌を擯せんとするにあらず、只だ俳風の餘弊が以上の誤解を招き、久しく婦人界に閑却されしを憾みと爲す而已。

　尙は考ふべき事あり、女性が俳壇と遠ざかれる原因は只だ是れのみなるやの問題なり、否此外にこそ主なる事はあるなれ、第一は、女子の地位が餘りに卑く、概して言へば、文字の素養皆無なりし事なり、第二は、俳風俗惡に陷り、自稱先生天狗俳人が、月並點取に賤しき爭ひを縱まゝにする狀態の、從順專一の婦人には殊に恐ろしくいやらしく見えたる事あり、第三は、俳諧が多く社交の機關となれる故に、由來臺所に幽閉されし婦人の境遇に適せざりし事なり、他にも尙は有るべきか、大凡此の如くにして、女性と俳諧とは甚だしく無沙汰の間柄となれりき。

　果して然らば、今は女子教育の發達に從ひ、婦人の地位は稍々向上し、臺所のお鍋も能く新聞紙の記事を解する時節となりぬ、女子無學の嘆は、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

論說

遠からずして聞くを得ざらん、風雅に爭ひの禁物なるは言ふまでもなし、「點取に晝夜を盡し、勝負を爭ひ、道を見ずして走り廻る者あり、彼等は風雅のうろたへもの」なりとは、芭蕉が元祿の往時に於て喝破せし所、景を詠ひ、情を叙して、自ら慰め自ら娛まんには、俳句も亦た婦人の品性を養ふに、益こそあれ害は無き筈なり、これを以て強て人と交るにも及ばず、若又た社交に應用して聊かなりとも益あらんには、遠慮なく其の益を享くるを妨げず、「女は內を守る者」とばかりは言つて居られぬ時勢なるものを。

然らば以上三個の障害も撤去されたり、女性と俳壇とは接近し來りぬ、斯く謂へばとて、予は漫りに俳諧の福音を說きて女流界に傳道を試みんとする程に熱心なる者にあらずと雖も、俳句が有益無邪氣の娛樂にして、俳壇が平等無差別の公園地

なるよしを紹介し、女流の來て、この公園の春花秋月を娛まんことを望むも、亦た差支なかるべきを信ぜんと欲す。

娛樂としての俳句が、婦人の側より見て何故に益有りて害無きか、曰く、

(一)俳句の趣味は家庭の和樂と調和す
(二)俳句の推敲は文學上の修養を作る
(三)風流心を助長し品性を陶冶す
(四)時に從つて精神を慰籍す
(五)俳句には敎訓を含めるもの多し子女敎育の一助と爲すべし

この位にして止むべし、而して(一)俳句は和歌よりも入易し、(二)俳句は必ずしも苦作を要せず、從て時間を要せず、健康を害せず、是れもこの位にて止むべし、要するに婦人の性格と俳句の趣味とは、毫も扞格する所なし、むかしは嵐雪の妻

烈女、猫を愛すること法に過ぎたり、雪これを誡むれども改めざりければ、一日烈女の在らざるに乘じ、潜かに猫を遠方に遣はす、日暮れて烈女歸り來り、猫の行衛を問ふ、雪僞りて知ずといふ、烈女嘆き悲み

　猫の妻いかなる君の奪ひ行く

とかこちつゝ終に隣女の告によりて其の實を知るに及び、正月早々夫婦喧嘩をはじめたり、門人の甲乙間に居て和解しければ、雪も怒りを解きて

　睦日はじめの夫婦いさかひを人々に
　　笑はれて
　喜ぶを見よやはつねの玉はゝき

いまはしき家庭の風波も、夫妻の俳句によりて春風一路通ずるを見る、面白し、おもしろし、されどこは餘り褒めた事にもあらず、筆のついでに愛嬌を申せしのみ。

『女流と俳句』については、尚ほ研究すべき事多し、されど議論は本篇の主旨にあらざれば今はただ俳句を婦人界に推薦する旨趣の大畧を陳べ置くのみ。

新年の動植物

林壽祐

お正月に飾ッたり供へたりする動物や植物に就き、少しお話してみましやう。

　先づお正月何處の家でも、門松といふのを立てますが、松といふ木は、最も芽出度い木で、いつも常盤の色を添へ、五百年も千年も成長してるまア日本では此木程大きくなるものはありませんで普通松には、黒松と赤松の二種類があります。黒松は男松ともいはれ、葉剛はくて幹は薄黒い、

能く成長して大木となる、特に汐風の吹く所に適しますから、海岸に近い所には澤山茂ッて居ます赤松は女松ともいはれ、葉が細く柔かで、幹は赤褐色である、黒松程大きくならないが、周圍三間位のになる。此二種の松は何んとなく、男女の性質を現はして居りますけれども、黒松は雄木で赤松は雌木といふのではなく、兩方共雌雄の花をもつのであります。松には獅五葉松、姫小松、海松など、種類多くあります。

門松を立てるには、能く竹を添へます。

◎竹は操正しき例として古から貴ばれて居ります一年で成長してしまッて、それからもう伸び育たない。蝦や蛙が魚でも蟲でもないと同じく、竹は木でも草でもない、竹とて別に一部類を爲してるで竹の部類は何に屬してるかといへば、稻、麥、蜀黍、芒、蘆なども共に、禾本科に屬してる。禾本科の植物は、何れも心が無くて、管筒となり、所々に節がある。竹はなか〳〵丈夫で、雪が降り積つても、容易に挫けない。總て木は外へ外へ大きくなるが。竹は、僅かながらも、内の方へ厚さが増して來るのです、竹には孟宗竹、苦竹、淡竹メダケ、ヤノダケ等六十以上も種類があります、一體に暖地を好み、我邦でも奥州の方には竹林がない。で澤山茂ッてゝ、而かも大きいのが出來るは、印度から其近邊の島であるさうです。

お正月、歳神樣の所へ、藁で飾りを拵らへ、松竹の枝や回青橙、讓葉、格注草などを、能く附けます。回青橙は香橙、密柑の類で、實は大きく永く枝について容易に落ちない、冬になると赤黃色、所謂橙色となり、夏になると再び青くなり餘程妙です、味は酸いばかりで毫ともうまくあいけれども皮は藥に用られるのです。

◎讓葉は、梓や罌子桐と同じく大戟科に屬する木で、葉は廣くて厚い。お正月には必ず回青橙と讓葉を飾るが、これは代々福德を讓り傳へるといふ意義でありませう。

◎格注草は、ヤマグサ或はホナガともいひ、成程葉の裏が白い、蕨、薇と同じく羊齒の類であります、何んでも暖かい地に生え、奥州の樣な寒い國にはないとのこと。東京に近い所では、上總房州伊豆に產するのです。格注草は前に述べた松、竹、回青橙、讓葉とは異り、花が咲かない、いはゞ下等の植物であります。

お正月には、また大きな餅を供へ、其上に龍蝦や昆布を飾ります。

◎龍蝦は、鎌倉蝦ともいひ、大きいのは長さ一尺もあり、頭の端から二對の長がい觸鬚を生やし、二ッの眼が突出る、體の中には骨がないが、周圍は堅い甲殼で固め、恰るで鎧を着た樣であります腹は六ッの環節からなッてるから、自由自在に曲げられる、尾は廣くて扇の形をしてる、動き出さうとするには、腹を曲げ、急に尾で水を彈き、其反動でピヨン〳〵と跳ね廻はる、で往々二間も飛越えることがある。肝臟や、胃や、卵の樣なものは皆んな胸の方にあり、腹の方は殆んど白い筋肉ばかりである、其筋肉は味殊にうまいから、人に賞美されています。東京に近い所では、房州や鎌倉邊の海に棲んで居ります。總て蝦は腰が曲ッて丁度老人の樣であるから、海老とも書れてある。龍蝦の如きは、特に大きくて威勢がよいから、あやかる樣にと、芽出度い時に飾るのです。

◎昆布は、大なる海藻で、水中、岩石に喰着いて居て、巾一尺長さ數十尺もあるのがある、色は黃褐色で黑い緣があり、ペラペラと浪に搖られて居

る狀は、實にたいした觀物であるさうです乾して食用に致します、で細く切りきざんだのを切昆布といひ、特に支那人に好まれます、日本では北海道に多く產するので、輸出品の一ツに算へられて居る。昆布の類に大浮藻といふのがある、其大さといッたら、長さが千何百尺といふのがあるさうです。で祝ひの時、昆布を供へるのは、ヨロコンブといふ意義で、萬事喜ぶの出來る樣にとの希望でありませう。

　お正月頃、盆栽として貴ばれるのは、水仙と福壽草であります。

◎水仙は、石蒜科の植物で、地中の莖は慈姑の如く、球になッてます、秋の末、諸の草が枯れ果つる頃、漸く芽を出し、霜にかゝりつゝ能く生長し寒中優しい花を開きます、花瓣は色白くて、都合六枚あり、中に小椀の樣な黄色いものがあります

暖地には、自然野に生えてゝ大いのは、人の身丈位のがあるさうです。東京に近い所では、安房、伊豆、相模等暖かな海岸に繁ッてるのです。

◎福壽草は、百花に先んじて、美しき花を開き、非常に人に愛されて居る、諸國の深山に產し、特に北海道に多い場所によりては、道傍に蒲公英の咲いてるが如く、矢鱈にあるさうです。此草は牡丹、芍藥、黄蓮、白頭翁などと共に、毛茛科に屬し、新年早々咲き初めるから、元日草或は元日菊ともいはれて居ります。お正月に飾ッたり觀たりする動植物の話は、先づ此位なものであらうと存します。

夫れ功の成るは成るの日に成るにあらず蓋し必ず由て起る所あり禍の作こるは作ころの日に作こるにあらず亦必らず由て兆す所あり。

蘇老泉

稻葉の素菟

小畑いく子

卯を菟とはいつの世誰れかいひそめしならはしにか、そが起原はとにかくに今はその慣習のまにまに卯の年むかへつる今日のしるしに、菟につきて思ひよりぬるまゝを記し見む。

いはまくも畏こかれど、八雲立出雲の國に宮柱太しきたてゝ、鎮ります大神を大國主またの御名を大己貴とも葦原色許男とも申したまひき。此神は速須佐之男の命の御子にて、兄弟の神數多おはしましぬるに、いかある故にか、皆此大國主を忌みいとひまして其數に入れ給はぬぞうたてき。

玆に因幡の國に八上比賣となん申す女神ぞおはしける、世にもめづらかに美しく坐ましければ、かくれなくて、いつしか此兄弟八十神達の聞きしり玉ひつゝ、皆同じく戀ひ給ひき。されば今はうちつれて此比賣の許に行きて親しく見奉れば、其内の誰れをと比賣の申し玉ふなるべし、其方にこそ迎へ玉はんと會議ひ玉ひ、よき日を撰みて、我も我れもと各自裝ひをこらして共にいでましき。此時八十神達は身まはりの調度それよこれよとゝり出でゝ皆大國主の神に持たせ給ひき。さるほどに大きやかなる袋とはなりぬるを、此神ものうしともの玉はで、背に負ひて隨ひ行き玉ふ、堪忍心の強きこそいともかしこけれ。

往き〳〵て氣多の前に到り給ひける頃は、身ひとつなる八十神達ははや遠く行き過給ひ、己れのみいたく疲れておくれ給ひけるが、行手の陵の上に裸なる菟ぞ泣き伏しける、何とは知しめされねど、哀れにおぼして、さしよりて問はせ給へば菟涙のうちより申すは、僕は隱岐島の者なるが

漫錄

麗しげなる此國のさまを遠く眺めて、常に渡らまく思ひつれど、せんすべもあら波の此海原をいかにせんと思ひわづらひ、海の鰐魚を欺きて渡り參り侍りぬるに、とてまた泣くを、命いかにして鰐魚を欺きしぞ詳しく語れとの玉ひければ、菟は涙をはらひつゝ語りいづるやう、一日いつもの如く濱邊に出でゝ遙に、此氣多の前を望み居たるに、大なる、鰐魚浮び出でぬ。思ひつきけるまゝに、其鰐魚を呼びとめて、さて語るやう、汝が族いかほどありや、よも我族ほどの數はあらざるべしといへば、彼も亦我群の何とて菟などの及ぶべきぞといひ爭ふ、されば汝が群を此所に集めよかし、彼氣多の崎まではよも立ちつゞくまじ、否とよ續きて猶余りあるべしといふ、われひそかに喜べる色を深くも秘て、さらば呼び集へてんや、我其上を渡りて數へ見んにと、鰐魚立どころに集りて、隱岐島より此氣多の崎まで浮橋をぞ懸けたりける、われうれしさ限りもなく數ふるまねして、飛び越え〳〵事もなく久しき希望かなひて、此地に上る喜しさに、さても彼鰐魚どもの愚さよと思ひければ、ふり返り聲を揚げて、さても〳〵汝等の愚さよ、吾隱岐島にありて、此氣多の崎に來て見ん事久しき望ありしも、渡らんすべなきに困じて、思ひ計り、汝を橋とはなしたりけるを、欺れけるぞと、知らで、かくやす〳〵と渡しけるこそ笑止けれとうち笑ひければ、最端に居たりける鰐魚われをとらへて、かく裸となしたりければひれ臥して泣き居たり、さるほどに、先きに來ませる八十神達見まして、汝とく海水を浴みて、風吹く尾上に居れ、もとの如き肌となりなんとの玉ひければ、うれしと思ひて、そがまに〳〵なしければ、其海水の乾くまに〳〵、皮も剝げぬべく、身

うち痛みて堪へがたくなりければ、かくは泣きまろびけるよと、いとも苦しげに物語りぬ。命いと〻哀におぼして、とく〳〵彼水門に行きてさきの潮水を洗ひおとし、また磯邊に生る蒲黄をとりてうち敷き、其上にまろぶべし、立どころに舊の如き肌とはなりなんと敎へ給へれば、菟は御敎のまに〳〵なすに忽ち痛みを忘る〻まで癒えてけり、菟はふし拜みてぞ泣き悦びける。

さて彼菟いへるやう、命こそは眞の神なれ、先きに往きませる八十神たちに、などてか八上比賣は靡きますべき、袋こそ負ひ玉ひけめ、必ずしも君にぞと申したりけるが、其詞誤たで八上比賣は此大國主の神にぞ御逢ひ給ひけるとかや。今も菟神とて彼國に崇めけるとぞ。是れはこれ稻葉の素菟とて、誰れも知れる神代の話なり、さても鰐魚といへば恐るべき惡魚なるをそを欺く菟こそ、まことにたゞならずゆ〻しかるべきを、此神の情ふかき大御心に感化されて、遂に菟も神とはありけるこそ、かしこけれ。

凡て神代の事はいとも畏し、容易うかゞひ知らるべきならじ、今の世も學者の猶、神話學の研究に務めますとなん聞くさへうれしき極みにこそ。そは兎まれ、角まれ、海もて環らせる此大和島根鰐魚よりも猶恐るべきもの夥多浮び居なん、菟よりも心惡き者いつかはと窺ひもやせん、また渡りてもや來なんかし、恐しとも恐しかるべし、されど又大己貴の寛き厚き情ある御心を心とせる國民の是をむかへなば、さしもの菟も神となりぬるでといかでかまつろはでやは。

はた是を古き話とせず、大なる國の事とせで、其身其家の事よと思ひ、おのれ先づ大己貴の大御心にならひ奉らば、いかなる家をも治むるに難か

らん、いかなる世にも交際のならでやは。

大町桂月君に寄す

水主青眼

裸體的に世の中を觀しなば、人生は最も無意味のものなるべし。父子といひ兄弟といひ、夫妻といふが如きも、詮じ詰むれば、血と肉の關係に過ぎざる也。血と肉の、關係を外にしては父もなく、子もなく、兄弟もなく、夫妻もなきことゝなる也。夫れ血と肉との關係あるもの豈たゞ人類のみならんや。而かも人類のみに向つては、血と肉との外に人倫、道徳など多くの責道具の備はれるはそも何故なるか。

桂月君足下、足下が人世を觀し、人物を論じ、世事を評するや、一の諂諛なく、一の虛飾なく、率直に、淡泊に、思ひのまゝ縱横自在に痛論し、酷評して、毫も憚かるところなきは、輕薄なる今日の世に於て珍らしとも面白しとも言ふ程の價はある也。否な予は足下を以てわが明治の文學界に於ける、名物男といふの甚だ當れるを思ふなり。されど、足下の觀察は諂諛なく、虛飾なき丈け、殆んど裸體的なり。率直にして淡泊なる丈け殆んど血と肉との塊のみに歸着する也。かくては人生は遂に無意味のものたらざるなきを得る乎。無意味の人を以て、無意味の世界を觀察す。乃ちその見るところ、言ふところ、論ずるところの無意味たるに始まりて無意味たるに終るを疑はんや。而して無意味は竟に人生に益を與ゆる所以の道にあらざる也足下が此頃ろ女學世界に記せる家庭時言といふものゝ如きは、則ち其の片影なるなからむや。

足下は曰ふ、子孫蕃殖を外にしては、女子の存

在は無意味なり、男は其の手傳ひを爲すに過ぎず女に比すればその存在更に輕きなりと、是れ實に足下が冒頭に斷りたるが如く、極端の言也、無遠慮の語也。而して足下の『女子は結婚すべきや』との問題の解決は、此の極端ある無遠慮なる言語より割出したる議論に過ぎざるは情なし。

足下は生活の難易如何をもて、結婚に早晩兩期ある惟一の原因となし。夫婦の關係を解して、家をなし社會をなし、國をなす以上は是非もなき致方もなきことなりといへり。此論は或意味に於ては眞理を含めるものといふことを得べきも、こは餘りに穿ち過ぎたる赤裸々的觀察たらざるか。

足下が親と娘との關係を論ずるや曰く、親の身になりて見れば、娘を早くかたづけたかるべしことに、身分もなく、金もなく、娘が別嬪でもなく、藝があるでもなしと來ては、縁付ケを急ぐも尤千萬なることなりと。然りこれ實に下層に於けるすべての親の心なるべし。而て結婚の不幸の多くは、これより起ることもまた足下の言の如し、されど親がその子女の結婚をいそぐは重荷をおろしたいといへる單純なる生活の問題のみに基くものなるか。別に何等か情愛といへるが如き物質的利慾以外の意思はなかるべきか。

親はたゞ子を教育して死ぬる時之に金を殘してやれば十分なりといへるもまた裸體的眞理たるを失はじ。あらゆる生物子の世話になるものはなきに人間には、子の厄介になることをあてにするもの多し、誤れる哉とは、裸體も亦殆んど甚しきものにはあらざるか、生物の有様を以て人類の情を律せんとするは、寧ろあまりに淡泊過ぎたる直論ならざるか。

之を要するに足下の言は、世を憤り、時を痛

漫錄

める矯激の議論としては、確かに妙とも珍らしとも、面白しともいふことを得ん、予も或る場合に於ては、足下の言を首肯する時あるべきを思ふ。然れども、家庭の言としては、人情をも加味して今少しくおとなしく論せらるべき筋のものならずや、血と肉との裸體的觀察は、足下が他日哲學上の大著述を世に公けにせらるゝ時に譲り、今は暫らく鋒鋩を包むが文士たる今の足下の位地より見て、世の中に對する義理の一つなるのみならず、また今の家庭に對し、社會に對し、女性に對する禮義なるべし。現今の女性、家庭、及び社會の狀態は、まだ〳〵裸體的議論を容るゝの餘地なければ也。

人はたゞ肉の塊なるか、或は靈の者なるか、その行動に於ける思想感情は、一に動物的生活の命令の下にあるか、將又た靈的精神ありて、肉慾的生活を制壓するに足るべき力ありや否やは、恐らく千古不決の問題なるべし。昔者獨逸の彫刻家某アポルの古代像を見て赧然面を背ける一貴女に向ひ、予はたゞ神を見るに、貴孃は人を見給ふにあらずやと云へりき。人のみを見て、神を見ざる社會は裸體の畫と像とは甚だ危險なり。宗敎的信仰の猶現世を支配する間は、「ショペンホーエル」の婦人觀は頗る不快の感を人心に與ゆるを免れざる也。足下たるもの應に裸體的言論の今の世に不適當なるを知りて、而して後筆を女子文壇に執らるべきを切望す。

近きころ僕足下の千駄木の盧を訪うて、予が人生觀、家庭觀、及び社會觀の愚見を吐露して、足下の批評を乞はんと思ふなり。此時の議論は固より赤裸々たるも可也。冬至の日方に近し、足下の庭梅、南枝の蕾を破らんも遠きにあらじ。足下

その花を看ん時、色を悦ばんや、將た香を愛せんや。足下豫め之を考定し置き給はゞ、叔を足下の虎皮下に乞はん時談論比喩の好材料なるべし恐惶再拜。



新年梅　　德大寺實則

世の人のこゝろしつけきときを得て
とじのはしめにゝほふうめかな

倭姫命　　久我建通

さくすゞの五十鈴の川のかは上に
しづめまつりしかみぞとふとき

女學校　　佐々木高行

少女子も文のはやしにわけいりて
こゝろたかくもあそぶ御世かな

伊勢海　催馬樂　　竹屋光昭

今もなほきよきなぎさの伊勢の海
むかしおぼゆるふえたけのおと

新年雪　　宮地嚴夫

神代よりふり積りたる富士のねの
ゆきもあらたにみゆるけふかな

松有觀聲　　北鄕久政

文林

あふぎ見る高ねのまつも君が世の
千代をしらぶるこゑきこゆなり

夜話　鎌田正夫

時はかるうつはゝむねに掛ながら
ふくるもしらでかたる夜半かな

郭子儀　小出粲

家の子の多きのみかはくにたみも
みなわがおやとあふぐきみかな

野霞　千葉胤明

おほづゝの煙もそひてますらをが
こまならし野ぞかすみそめたる

社頭杉　遠山英一

なに神のいますやしろか知ねども
まづこそあふげすぎのこずゑを

青山有雪　鍋島榮子

冬かれもしらぬときはの山まつの
こずゑにも今朝つもるしらゆき

子日友　前田朗子

思ふとちよはひを野べに打むれて
こまつひくこそたのしかりけれ

賴山陽　柳原愛子

たらちねの母にとひつゝ大そらを
あふぎしこゝろたかくもあるかな

高架鐵道　南鄕柳子

ひらけゆくはなの都は八千またの
うえにまかねのみちもかよへり

溪梅　佐藤艶子

行水もこほるたにまにさきながら
にほひはたかしうめのはつはな

梅始開　本多芳子

白ゆきのまたきゑ残るやまかげに
さきそめにけりうめのはつはな

彫刻　田中瀧子

きざみたるものとも見えずさ乍に
いけるがごときひとのゑがほは

道臣命　小川直子

おひ茂るしこのたみ草かりつくし
みちあるくにときみそなしける

電話　鈴木小舟

しきしまの道にもかゝる物ならば
いにしへひとにことゝはましを

社頭立春　河村貞子

松風もしつまりはてゝすみのえの
おまへのはまにはるたちにけり

新年梅　ちぬを

それ二柱の大神
矛を取らして浮橋の
上に立たし丶初めより
海はしづかに浪うてり
國よりさきに海ありて
天なる神の知し召す

文林

潮の上にはもろ〳〵の
汚れしものは住まざりき
今八十島の八十隈に
地のわざはひは蔓れど
神の拭ひしわだつみは
清きみそらに連れり

年立ちかへる朝ぼらけ
游の香高き磯に立ち
潮の音をきゝぬれば
胸新しくひらけたり

沖はるかなる横雲の
紅帯びてあざやかに
太古の海に映るとき
誰か吾世の年をはがざる

○兎の歌

清水橋村

うさぎうさぎ
　わかくさの
はなのうてなの
　はるの野に
このよろこびを
　をどれかし
なれがうまれし
　ふるき木の
ねがたにうめよ
　たまわられ

おちてかなしき
ふゆの日は
こぞいまゝのす
めかみひく
こてふをくもに
つかひして
じやうがのきみも
よびきたれ
やさしくしろき
なれがみゝ
つゆけくくろき
ながまなこ
めでたきはるの
すがたなりけり

秋の庭



庭の教

樞密顧問官 正三位子爵 黒田清綱先生撰

一月一日兼題

寄海祝

天　東京下谷區下根岸町三十三番地　椎野鋭子

大きみのみよはとこしへうちわたす
わをうなばらのはてなきかごと

地　東京駒込東片町　北島操子

そこひなきちひろの海もおほぎみの

教の庭

ふかきめぐみにおよぶべしやは

人

甲府市山田町　名取正代子

おほ艦のとしにかすそふきみか代は
なみ路までこそにきはひにけれ

秀逸

東京　戸賀崎久子

遙はると見ゆる海にもはてはあれと
はてなきものはきみかおほみよ

肥後　佐々有隣子

すがのねの長つのうみのはてもなく
いやさかえゆくきみがみよかな

東京　戸賀崎治子

君か世を千代とことほくことの葉の
つゆやつもりてうみとなるらん

京都　源　たけ子

君か代はところせきまでわたのはら
みつきのふねのにきはひにけり

京都　東　宥子

なみ風もさわかぬ四方のうみつらぞ
をさまるみよのすかたなりける

京都　東　照子

よものうみ浪もしつかにをさまれる
きみかみよこそうれしかりけれ

甲之部

東京　横井かつ子

すめらぎの御稜威かしこみみつき船
よりくるかすのおほくもある哉

大阪　桝田益子

與たけのよはをさまりてかむかせの
いせのうみつらたつなみもなし

肥後　坂本壽子

大みよは千代も八千代もつきさらん
みちくるしほのあらむかきりは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年〳〵にみつきのふねのかずそひて　飯脇ます子
はかけにきはふたけしはのうら

乙之部

ほかけにきはふたけしはのうら
みつきふれゆたにかよひてわたの原　長崎　八尾いへ子
わたるもやすききみかみよかな
日の御旗かゝくるふねのとし〳〵に　甲府　上田なほ子
かすこそまされおほわたのはら
としつきに船路ひらけてうなはらの　三河　永井さい子
ひろくなりゆくきみか御代なか
見渡せはやしまのそともをさまりて　熊本　日高かず子
四方のうなつらたつなみもなし
とし〳〵にみつきのふれの數そひて　東京　館脇ます子
ほかけにきはふうらやすのくに
限りなき御代のひかりをわたつ海の　埼玉　前野嘉賀子
四方にたゝへてなみしつかなり
わたの原うちとのくにのみつきふれ　三河　本多きさ子
たゆすゆきかふ御代そめてたき
日のみはたかゝけてわたる大ふれの　東京　山本梓子
ゆたかにみゆるよものうなはら
是もまたのとけきみよのしるしなり　安藝　和住千鶴子
なみもしつかにかすむうなはら

きみか代はよものうみ波しつかにて　東京　北島功子
ちよのこゑそふるうらのまつ風
ふしのれの影をやとせるうなはらに　駿河　佐野みさ子
うこきなきよのさまも見ゆつ
限りなき御代のひかりとなりにけり　東京　椎野秀子
あさひかけさす和歌のうらなみ
日のもとの國のさかひそしられける　東京　古川市子
もゝふれうかふ四方のうなはら
おくなはの千ひろの海のそこふかく　肥後　坂本道子
かきりしられぬきみか御代かな
そよと吹かせたにあらてわたつみの　肥後　坂本たけ子
なみもしつけききみのみよかな
君か代はかぎりしられすわたつみの　東京　三好珍子
はまのまさこのかすにたくひて
四方の海よせくるなみもしつかにて　東京　積山鏡子
をさまる御代のさまも見ゆけり
敷しまのやまとしまれによるなみの　東京　北島功子
なみ〳〵ならぬきみか御代かな

丙之部

わたのはら汐のやほちのしつかなる　肥後　佐々小夢子
みよをことほく今日にもあるかな
なみたゝぬ海のうへにもかりこもの　東京　篠田圓子
みたれなき世はしるくそありける

歌の園

海のはらなみしづかにておほきみの
千代をことほくけふのゝとけさ　山梨　堀内かすみ子

としたてとなみはたゝさる海にこそ
をさまる御代のすがたをは見れ　東京　戸賀崎梅子

四方の海のはてしなきまでさかゆよと
きみがよはひをいはふ今日かな　東京　福原貞子

長閑くもおほうなはらになみのはな
立ちかへる年をいはひてやさく　伊豫　竹村里子

すみ渡るおほうなはらのみつかゝみ
くもりなき世をうつすなるらむ　東京　清水はるみ子

ゆたかなる御代のすがたも見ゆる哉
なみしづかなる四方のうなはら　東京　松村あさ子

吹く風もいとゝのとかにわたつみの
なみしづかなるきみが御代かな　東京　椎野清子

のとかなる青うなはらになみのはな
御代のとしをやほきてさくらむ　長崎　林くに子

萬千たびよせてはかへるわたつみの
なみにたくへるきみが御代かな　東京　戸塚てつ子

四方の海なみもしづかにをさまりて
ゆたけき御代をいはふけふかな　東京　川村松子

あらたまの年たちかへるきみが代の
千ひろのうみのかげのゝとけき　東京　川瀬とせ子

朝日かげにほへるまつにたつなきて
ちよのなみたつおほうみのはら　埼玉　横田音子

海のはらなみちはるけきとつくにの
ひともあふがむ御代のひかりを　埼玉　横田秋子

をさまれる御代のしるしに海はらの
なみはしづかに見えわたるなり　長野　小泉みつじ子

限りなきみよのさかえそしられける
ふれみちつゝく四方のうなはら　相州　岩橋花子

をさまれる御代のすがたもしられ見
なみしづかなる四方のうなはら　横須賀　上田ゆき子

そこひなき千ひろの海にたつなみの
かぎりしられぬきみが御代かな　栃木　青木たま子

とつ國とちかひもなりてことしより
いやさかゆく日のもとのうみ　東京　諸井とき子

はつ春のしつけさ見えて四方のうみ
なみしづかなるきみが御代かな　横須賀　中山ふみ子

新としをことほくこゑにかよふなり
もゝふれつとふうらなみのおと　東京　中野昌子

みつの浦にみつる千ふれもきみが代の
つきせぬとみをはこぶなりけり　東京　片山ふみ子

行てまたことしにかへるなみの音は
こゝろからにやしつけかるらん　吾妻　ちか子

日に月にひらけゆく世のためしとて
四方のうなはらなみしづかなり　東京　諸井くら子

よろつ代もかはらさるらむ時しらぬ
なみのはなさくおほわたのはら　東京　片山あや子

海はらや四方のうらなみしづかにて
ふれのゆきゝもにぎはひにけり　東京　矢野保子

あら玉のとしのはじめをいはふらむ
あらいそなみもしつけかりけり　東京　平尾あさ子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すはの湖こほりわたりてなみの上も　肥後　志方圓子
　みちあるみよにあふそうれしき

うごきなきいそのいはほに打よする　肥後　德永雪枝子
　なみもしつけききみかみよかな

四方の海に立かへるなみともろ共に　東京　牧　綾子
　かきりしられぬきみか御みかな

かきりなき青うなはらのはてまても　和泉　福原薫子
　きみかめくみはあふれぬるかな

年なみのうつりはゆけとわたつみの　三河　服部正子
　なみ〳〵ならぬ御代はかはらす

としごとにふねのけふりも立そひて　三河　服部萬子
　うみ路にきはふおほ八しまくに

うちわたすよもの海はらなみたゝて　駿河　佐野きやう子
　うごかぬみよのはてやなからん

うなばらにあさひの影のてりそひて　肥後　田代艶子
　なみさへたゝぬ御代そゆたけき

はてしなきあをうなはらにあら波の　肥後　田代綾子
　たゝでしつけき御代にもある哉

濱まつのみどりのいろをうかべつゝ　青森　柿崎秀子
　うなはらとほくはるゝ御代かな

四方の海みいつはとほくみちにけり　埼玉　前野ふさ子
　とつくにひともあほく日のもと

みわたせはかきりも果もなかりけり　筑後　武田龜子
　をさまるくにのよものうなはら

海のおもかせをさまりてうらやすく　筑後　銕山増代子
　なみしつかなるきみかみよかな

こゆるきの磯へにすまふあまひとも　東京　椎野薫子
　ゆたけきはるをうたふ御代かな

つれに見る物なりながらあらたまの　東京　内田とく子
　としたつなみのおもしろきかな

見わたせはよせくる濱のおもしろや　京都　坪内りき子
　きみか八千代のはるかへりつゝ

みつきふねひとひかしにゆきかよふ　東京　數島うた子
　しほ路はなみもさわかさりけり

大やしまはつひのひかりかゝやきて　東京　近藤はな子
　こかれたゝふる四方のうなはら

伊勢の海しつけきなみのにほへるは　肥後　坂井[illegible]子
　をさまるみよのしるしなるらん

濱たゝぬうみによそへてみくにひと　名古屋　瀬木せき子
　きみか代いはふこゝろゆたかなり

わたつみの神もちはひて四方のうみ　廣島　小谷治子
　なみしつかなるおほ八しまくに

見わたせは四方の海はらしつかにて　京都　坪内りき子
　きみかよはひや千ひろなるらむ

おのつからよもをめくれる海はらは　東京　山本廣子
　すめらみくにのまもりなりけり

かきりなきみ代こそ海にたくへてめ　東京　椎野ぬき子
　立かへるなみのかすもしられす

日のひかり八島のはてにさしそひて　東京　林　環子
　おほわたの原はなみかせもなし

はてしなき御代のさかゆや海はらに　三河　川合ぬひ子
　さをかちほさすふねもよりきて

いくちたひいそうつ濱のかすことに　東京　牛山[illegible]子
　ゆたけき御代をほきまつるらん

とつくにの船もつとひてをさまれる
　　御代なしいはふよものうなばら　　大阪　橋本しか子

華族女學校教授 **井上頼圀先生撰**

元日書感

天　　大阪市東區平野町三丁目　桝田益子

雞鳴是を告げて、ほの〴〵と明けはあれ、さし昇る初日の光り、うら〳〵かに、み空に舞ふ田鶴は、千代と謡ひ、朝日に輝く日の御旗は、豊けき初風に靡き、門毎に立ならぶ松は、常盤の色をたゝへて、呉竹の世をことほぎ、ほゝゑむ梅の初花は、年ほぎ人を迎ふるに似たり。實に、身も心もあらたまりぬる心地するは、としの始のあしたなりけり。

いはまくもかしこき、大御門のゆゝしき御儀式共のまばゆさは、拜賀にとて百の司人、外つ國の公使を始め、まうで昇り玉ふ、今朝の賑ひは、いふも更なり。府縣には御代の萬歳を祝し、百千の學びの舍は、君が代謡ふ聲勇しく、屠蘇に酔ひしれて、行かふ人の千鳥あしなるは、一文字も知らぬが、十文字を踏むといふ日記思ひ出でられてあん、玉のうてなより、天さかる鄙の薪こる山人の柴の戸、海人が磯屋もほど〳〵に祝ひ、はた、身の幸ひを悦び、尊き御いづをあふぎて、目出度今日をや迎ふらん。大路行く車の音も、森しき物から、勇しく覺ゆるは心からにや。大將の君の、いかめしきよそひして胸のあたり、きら〳〵しう數々の勳章の、朝日に匂ふ様は百千のつは者も、打靡くべく、みいづの程もしるかりけり。つく羽根の心を入るゝうなゐ、花たゝかはす小女、いづれも今朝の嬉しさは、ほにあらはなり。一年の計は旦にありとか、いで今朝のめでたき年の始の、つきせぬ嬉しくも楽しきけふの日を、徒らにやはと、硯に汲みし若水に、筆さしぬらして心に浮ぶまに〳〵、かくは記しぬ。文の思はん、やさしさも、打おかれて。

ほど〳〵にうれしき物はあらたまの
　　とし立つ今朝のこゝろなるらん

評、優麗

地　　肥後國熊本市東寺原町　田代艶子

豊榮のぼる、初日影、うら〳〵とさしそめて、世

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は明らけく、治まる御代の、三十あまり六とせとなりぬ。昨日にかはる今朝ののどけさ、萬の物のみかは、人の心まで、一夜のほどに改りぬるも、あやしく、老へたる人の老がへり、霞まぬ空ののどかに覺ゆるも、年の始の心なりけり。殊に、若水としいへば、かはらぬ水も清かに、くみかはす屠蘇には、よろこびの色ぞ見ゆめる、旭にかゞやく日の御旗は、大和心の赤きを示し、引はへししめ繩は、榮ゆく御代のためしと見るべく、千代〳〵とよぶ軒の雀は、よろこびを、のぶるにやあるらむ。小かめの梅も、今日の嬉しさをつゝみあへで二つ三つ笑みそめたる、とり〴〵、めでたし。あるは幼き學生の、衣のをりめ正しく、よろこびのべありく、又なくあはれなり。禮服うや〳〵しきをのこの、酒にゑひつゝ、足もあやうげに、さまよひありく、おぼつかなし。羽子つく少女、紙鳶のぼすをの子の、いかに、罪なく、いとしきよ。さあれ、やがては國のいしづゑとなり、一家の柱となる國の寶ぞと思へば、たのもしうこそ。あな、今日よ、嬉しき日、たのしき時とて、いかで、かろ〴〵しく、見すごさるべきか、一日の計はあしたにあり、一年の計は年の始にありとか、すぎにしことは、とはずもあらなむ、心も共にあらたまのけふのよき日を始めとし、いざや、大和の女郎花、から撫子におとりなく、諸共に心の駒にむちうちて、只呉竹の一すぢに、いそしみはげみ、あはれ心は門松の操正しく、はた青柳のやさしうて、家庭は鏡餅のまどかに、はた、福壽草の福々しう、あらんことを、數ならぬ身も、いのるになむ、

評、艶麗

人

東京赤坂區青山北町三丁目六十八番地　山本梓子

一とせのはかりことは、年の始にありとかいへば、中々たゞにはすごされまじき、今日のひと日ぞかし。いでやいさゝか思ふよしをものせむ。さても世にありとある人の、萬のうきを忘れ、たのしみよろこぶ、今日をおきて又いつかあらむ。高かきもいやしきも、ひとつ心にいはひたのしむ、けふの心のすかすかしさを、此一と世をおくる心の、いしづゑとなさば、家にありてはうからやから打むつび、波なく風なくすごしぬべし。多くの人に、うちまぢりても、中垣のへだてなく、行かよひぬべし。初日の光まばゆきまどに、常よりも、長閑

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けき鳥の音をきゝ、はがためのもちひのかゞみとりどりに、日比ははうとき人も、したしげにきよりつゝ、祝ひのゝしるを、見きくにも、いかでこのひとゝせの、かくわらばやと、かへすがへすも、おぼゆるになむ。

評、簡潔

（以下原稿到着順）

長崎　八尾いへ子

呉竹の一よの程に、目出度大御代の年の始は迎へられぬ。末だ醒まぬ空ながら、豊さかのぼる朝日の光りうら〳〵と輝き、軒端につどふむら雀の千代よぶ聲もいと長閑に聞ゆるぞうれしき、先づくみ初し若水には、去年のちりも浮べず、門なみ立てる日の御はたは、そよふく風に飄りて御國の光りを輝かし、色かへぬ松と竹とは、聖壽の萬歳を見せ、家々に引く注連には、何れも今年の幸かけてまつらんとたのもし、わきて我家には、今年八十路を迎へ給ひし祖母の君の、いとすこやかなるをよろこびつゝ、うからやから打むれて、設けのとぞ、はがための、もちたうべて、かたみに祝言いひかはすも、御代の賜なりと、今朝は殊更に東の方ぞ伏拜まるゝ、かゝなふれば、今の大御代となりてより、三十まり六年となり、萬の道、かつ〳〵に開け、人のさとりのそこひもしらず、おそろしき迄進み行きて、外國人にも、東洋の文明國とたゝへらるゝ此榮ゆく御代に、生れあひける身のさち、また類あらじ。されば元より、家も身も、大君にまたせる臣なれば、何業にも、仕へ奉らむと、大丈夫なられば、火筒手にして、海陸の御軍人の列には、ゐ入らず、いで今年よりは、一入心掟てゝ、手業いそしみ、手末の貢もたいまつらん、かれては、うらわかき輩たちの心のしなりともならん、歌、文、ものして、互に東洋女子の進化の歩調を高め、外國におくれはとらじと。いやつとめにつとめて、限りなき、大君の御惠に報いまつり、御うつくしみにこたへ奉らんと、朝日子の、たゞさす方にむかひ、心もゑみさかゐつゝ年の始めにかくなん。

東京　近藤はな子

初鷄の聲勇ましく、年あらたまりて、鄙も都もおのがしゝ同じ心にゆたかなる君が代の年の始をことほぎまつろうれしさよ。敷島のたいらけき初日の光、おがみつゝ若水汲む心からして、すがすがしう、昨日に、かはろほゝゑみの色こそげに匂はんばかりなれ。富士の高根にたなびく初霞うらゝかに、いと目出度く門なみたてる門松の松の小枝にそよそよと春の風見ゐて、みどりはつゆに色ふかみ、雪にふし風にたゆみの若竹の、そのふしぶしこそいはずもあれ、眼にふるとしなるもの新らしううれしからぬはなく、まして、人の心のそれ〴〵春めきて、憂き葛の葉の裏見へれば、めでたしともめでたし。

隣の家、向ひの門のゆづり葉もれて、笑ひさゞめく聲のにぎにぎしさ。波よする磯につどひろ千鳥のそれともきこへてものめづらしく、春をも待たで庭の梅の花三ッ二ッ四ッさそひ出せし鶯の、いとも愛たき聲にさへづり祝ふ、云はん方なし。去年の霜月ごろ心してしたてける、絹衣とりいでゝ装へするうれしさ、限ふ心言はで叶ひぬる心ちそすなる。けにたらちれのみ惠のほどかしこくも尊とし。

見るもの、聞くもの、おしなべてあたらしきけふのすさびに、歌もがなと、あらひし硯に若水灑ぎて、あたらしき筆とりつ。机に向へばむら〳〵おこる思いでの草々、濱の眞砂の數にも似たりけ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り。そこはかとなう古日記くりかへして、稚き折のことども、おぼろにゑがき出すぞことになつかし。さりながら思ひいつしか道ふかく辿りて、なか〳〵にかなしき節ぞうかばるゝ。男の子ら、乙女子ら、眞心に初春の今日をうれしと祝へど、腰ゆがみ、頭しらげたる老の心ばいかならん。元日や冥土の旅の一里塚、の十七文字を思ひうかべては、松の色、初日の光もかなしみの種とこそなりぬべし、などおしはかりては、やがてこの身も老いんものを、とかこたるゝなり。

あはれ門松の滴たる翠にうるほひて、時じくぞ、心美くしうありなん、と年の春毎ちさき心に契りしも、うたてや、あだに年くれて、皆はずかしき事のみなるぞ、げにたのみなき心なりける。いで今日よりは、松のみどり、呉竹の直ぐなる心を身にしめて、清く流るゝ里川の、せゝらぐ聲ともろともに、うき世の原を折れ〳〵て、雨の朝、風の夕、落葉々々にたゝかれつ、岩根岩角にむせびつゝ、流れ流れて行かんかな、やがては廣き末しらぬ月の光も長くてる、青海原となりなんに。

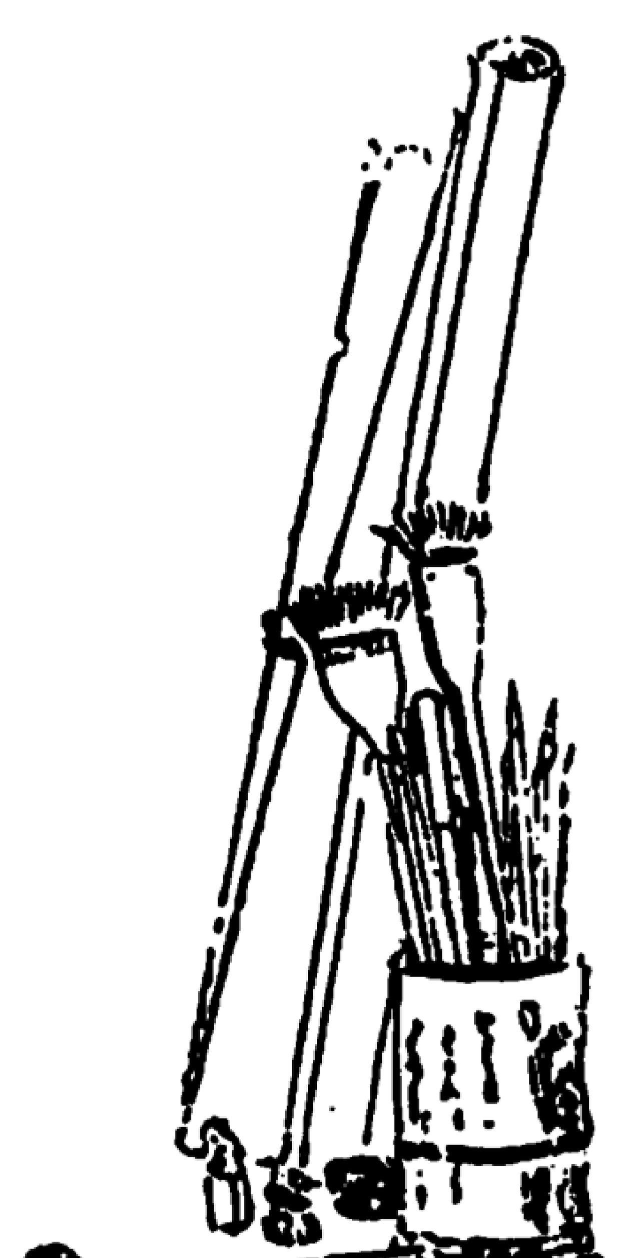
熊本　日高かず子

む月たつあしたばかりめでたく樂しきはあらじ。うら〳〵と明はなれゆく空の景色より、目なれし山、庭の面、なべてすが〳〵しう新しからぬぞなき。かしましかりしは昨日にて、村雀の千代呼ぶ聲もめづらしく、軒の御旗の光そひぬるは初日の影になむ。ふり行かげも若かへる若水に身を清めつゝ、とり〳〵打向ふもちひのかゝみの圓なる心もて、恨なき世をことほぎ、家を祝ひの御酒汲みかはすこそまたなくたのしけれ。米のよはひ重ね給ひし祖母君の許に、新しき衣着粧ひて、うま子ども己が年をよび折數ふるもめで度打笑まれ、かくしこそ經めと、いけらし古人の言の葉、いとゞくりかへされてなむ。床に活けたる早咲の梅に待たるゝ鶯の初音も、若菜摘む春邊も遠からず、さて花に月にとあこがれんには、年の瀬の深きにしづみや果てなん。あなと心つけば、ゑひもさめて、げに一年の計は、今日定めおかばやとこそおもへりしか。

安藝　和住千鶴

曉告る鳥の一聲に、こぞの夢を破られ、起き出でぬれば、ひんがしの空だにあけやらず、いかにせばやと思ふなりしも、ふと心に浮びいでしことありき、そは、一年の計は元日にありと云ふことなり。されば立ちあがりて、若水むすびあげつゝ、硯のもの調ぶるまにあけてけり。

とよとしのしるしにや、はつ日影うら〳〵とさしのぼりぬ。いざ筆とりて、はつ書せんとて、ふつくゑに向ひしが、とみにかゝん事のいでこねば、まづ新年御題のみうたなどものしぬ。けふはしも、ふみもよみそめ筆もとりそめ、とり〳〵にうれしからぬはなし。かくたのしきわざのなしうるは、みな大君のいと深き惠みにあらずや。かくおほけなきみめぐみに報いまつらむには、時計の針のごと、ひれもす、よもすがら、たゆますはけみて、をみなのみちをつとむるにこそ。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



雜報

○暹羅皇太子殿下

同殿下には舊臘十六日米國より御來遊、兼てわが皇室に於て殿下の御旅館と定められたる芝離宮に入らせられ廿三日には東京大學各敎室御參觀同日午後には博物館、動物園、淺草公園等を御遊覽遊ばされたり

○女學校補習科設置計畫　大阪堂嶋淸水谷兩高等女學校は最上級四學年の上に尙一學年位の補習科を設くるの必要を感じ來學年より之を實行せんとて目下計畫協議をなし居れるがその方法は敎員敎授器具等も現在の編制設備のまゝにて且既定豫算の範圍内にて先づ實行を試みんとする由

○府敎育會女子講習會　東京府敎育會にては本年一月より第四回女子學術講習會を開始するが其の學科は兒童心理（松本文學士）料理法（赤堀峯吉）等なりと

○故鶴久子の建碑と百花園　故鶴久子刀自は有名なる女流の歌仙にして曩に皇后宮職御用掛を奉職され刀自の門家には貴夫人方多く歌道に於ては最も博識なる事は人の知る所なりしも不幸刀自には一昨年病を以て遠逝せるより澁澤男爵夫人主として刀自のために建碑の事を企圖し正三位井上正直氏初め三井拾子、三井樂子、大倉時子、富谷元子、田中住子、玉塚豊子、吉田瀧子、吉田貞子、北脇壽尾子等の各夫人此擧を贊成し高さ一丈巾五尺程の赤間石の如き銅色を帶びたる堅石へ紀年の彫刻を以て石の表面中央に久子刀自の辭世

空蟬の世のうきことはきこえヽぬ
いはほの中に秋風のふく

と彫付けたり該碑は落成して舊臘十一日向島の百花園なる該園池の向へ建碑し雅趣なる建碑式を擧げたりといふ

◎母之會第四回談話會　母の會は新潟市内重立夫人諸氏の組織に係る一ケ月二回の會合にして一回は談話一回は西洋料理の研究を爲す由なるが其第四回談話會は去月十三日學校町二宮氏方に開かれ席上各夫人の有益なる談話ありたり尙同會は始め二十人を滿員と定めしが續々入會希望者あるに依り更に廿五人を滿員と改めしと云ふ

◎忠婢の旌表　愛知縣丹羽郡豊秋村増田しやう



子が多年主家に忠勤せし篤行を嘉賞し大給賞勳局總裁より今回左の通り勅定の綠綬褒章を賜はりたり

愛知縣丹羽郡豊秋村　増田しやう[illegible]

資性温厚明治五年同縣葉栗郡黒田町士族澤井元長に仕へ忠勤怠らず嘗て主家商業を營みて折閱し爾來災厄相踵ぎ尾主病歿し遺族八口殆んど支ふ可らざるに方り日夜耕職に努めて家計を助け一意誠實屢々寡婦の失操を諫め却て其逐ふ所となり附近の茅舍に孤棲して私かに主家の老幼を扶持し寡婦出走從招かれて主家に復歸し篤病者を看護し幼者を保育し且つ自己の貯財を捐して生計を補ひ傍ら女子の學資に充て教育を督勵し殊に現戸主をして相應の職を奉じ家政を挽回するに至らしむ洵に寄特とす依て明治十四年十二月七日勅定の綠授褒章賜ひ其善行を表彰す

◎貞女　北海道樺戸に近き新十津川村字下德富原直堯の長男直淸といへるは去る三十二年中近衛師團の兵役に服せし處同人妻阿光(二十)は其の時旣に一女兒を擧げ居たるが舅直堯夫婦は年若き女が夫の不在

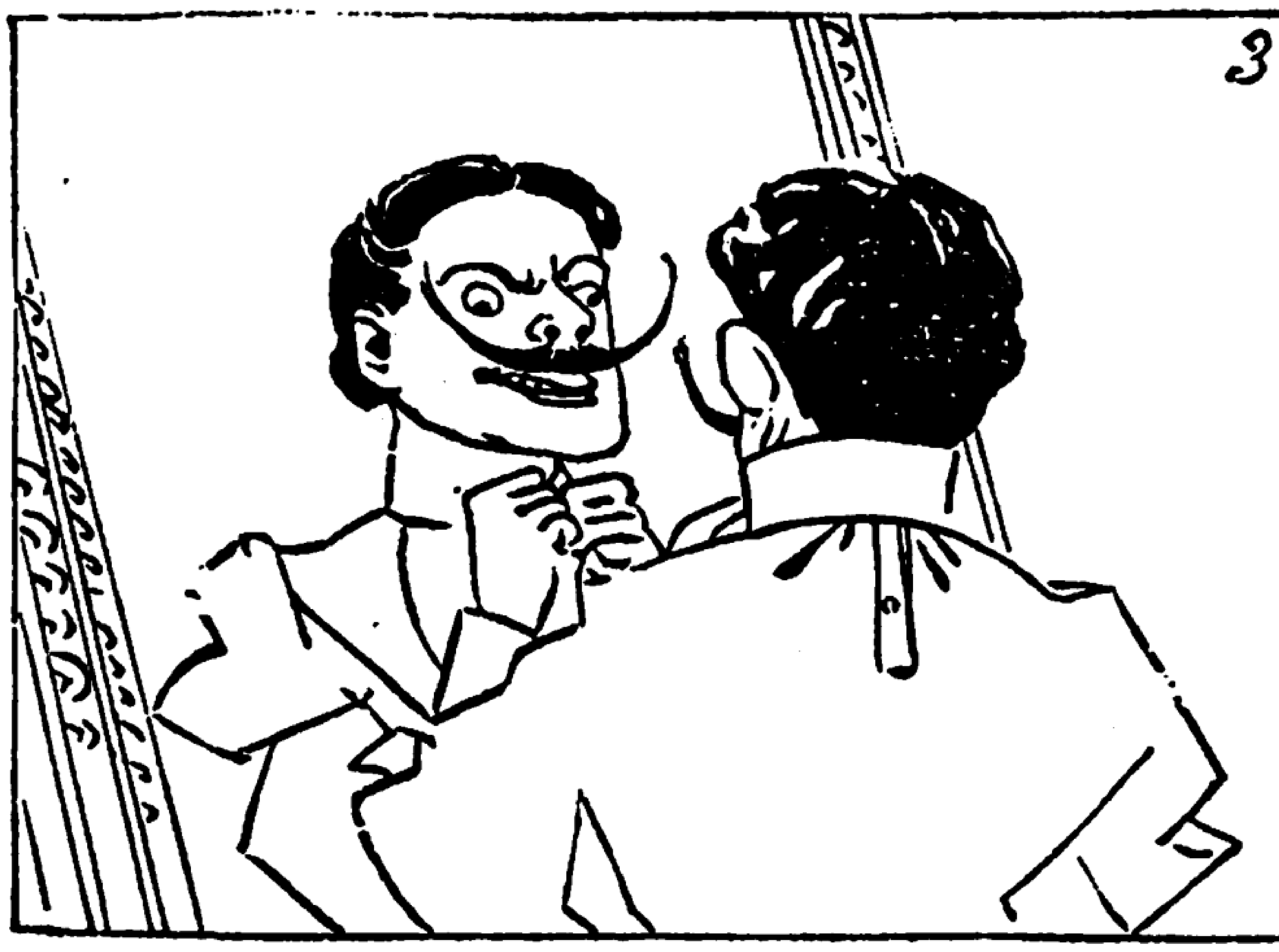
中獨り家に在りて舅姑の前に勤むるは氣詰りの事なるべければ倅の除隊までは實家へ歸り居るも差支なしと云ふに阿光は夫が國家の爲め軍務に服するに其の勤務の辛き事私が家に在りて家事を勤むるの比にあらず故に夫の留守中は夫に代りて家業を勵み專心御兩親に仕へるの決心なりとて夫より春の蒔付より秋の收穫は云ふに及ばず冬季は植木の運搬より里道修繕の砂利運搬迄嚴寒吹雪も厭はず幼兒を背負ひ馬橇を驅り男子と同樣の働きを爲すに舅姑も大に悅び直清が入營せしより既に二ヶ年を經過したれば幼兒の成育したる事を倅に見せたしとて先比阿光を上京せしめ母子在京する事數十日夫直清は休日毎に妻を案内し諸方を見物



させて歸國せしめければ阿光は其後一層舅姑に孝養を盡し居たるに時至りて去る十一月三十日直清は精勤の名譽を負ひ除隊歸鄕し數十名の知己は歡迎して祝宴を開き近鄕近村の人々は此の富原一家の和合と阿光の孝貞とを賞め稱へぬものもなしと近來の美談といふべし

○美しき家庭　今樣の學問技藝は事事しふ身に積めども子女の敎養思ひの外におろそかに、女權高うして夫を凌ぐの家庭中々に亂れて糸の如きが多かる世にて丶麻布三の橋際に年比住み渡れる遞信省官吏千葉縣士族中村誠の妻千代女(三十四)の如きは類ひ少なき烈婦と云ふべし、家もとより餘れる資產あるにあらず夫の俸給また薄くして一族糊口の料

の幾分にも足るべくもあらず分けて職務上大方の日夜外出勝なる留守を守りて秋霜烈日の操三十年、終始一日の如く身は遲ればせに習ひ得たる產婆の業によりて兎にも角にも一家の經理を營み殊に感ずべきは七人の子女を教育する事實に盡さざるなく寢食起居の一々にも注意周到に普通學終れる後は各自の天稟の性質に準じて夫々專門の學に就かしめ敎導をさ〳〵怠らざりければ長男滿壽之助は今や北海道札幌郵便局に奉職して上官の用ゐ極めて重く花やかに身を起すに至り次男貞雄は優等に中學を卒業し益々進んで英佛の學を究め次々の子等皆之に習ひ日夜研習に我を忘れ分けて長女琴女(三十)が衣よ簪と世の娘子が氣も浮騒ぐ砌り



の年頃をなりにもふりにも顧みず母を助けて裁縫の手内職細き針目のいとま〳〵弟を勵まし立て丶他念なきやさしさ他の見る目もいぢらしさを此母にして此子等あり本亂れて末治まらざる古への人の言葉も思はれて餘りに床しき千代女が多年の心盡しも思ひやらる丶あり

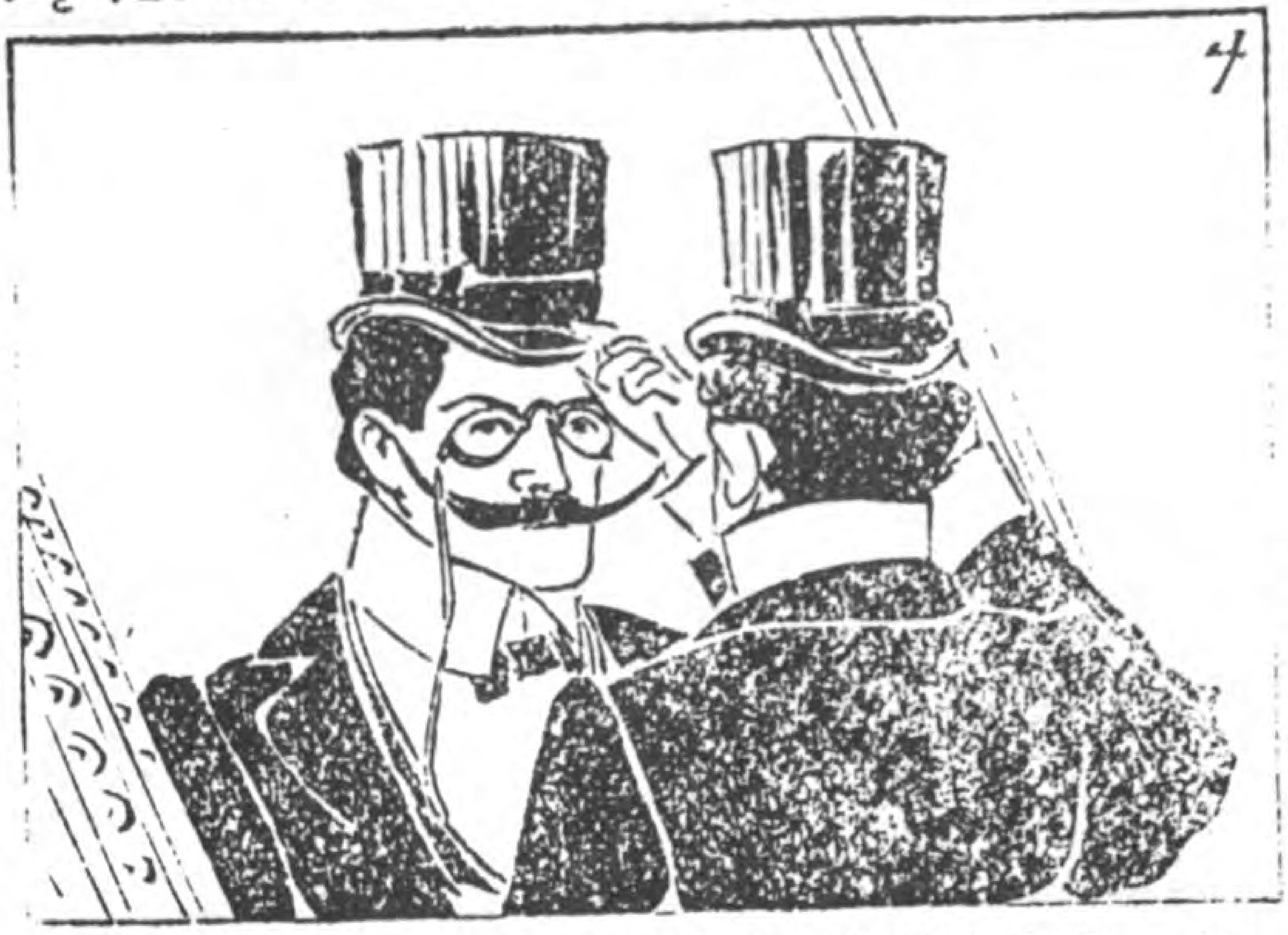
○眞に世界的なる婦人　有名なる唱歌女パッチー夫人は法律上の權利を確定するため此程英國に歸化したるが夫人は西班牙のマドリッドに生れたる人にて其父は伊太利のシ丶リーの生れ母は同國羅馬の產なり後米人なる繼父に養はる夫人が最初に結婚したるは佛國人にして次で伊太利人に嫁し今は瑞典の貴族セダルストロム男の妻なるが英のウエールスに居住

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

することゝなり終に籍を英國に轉したるなりと云ふ眞に世界的の夫人なりと云ふ

○五回世界を一週せし婦人　米國市俄古市のセレスチー、ミラー孃といふ婦人は、是迄世界を一週すること既に五回に及んで居るが、不幸にしていまだ西伯利亞を見た事が無いといふので、今回第六回目の世界一週の途に上つたが、孃はいつも獨り旅で、今迄一度も汽車汽船に乗り後れた事なく、一度も大なる出來事に逢はなかつたけれ共前後五回の旅行中に三百回結婚の申込を受け、悉くこれを拒絶したのが先づ出來事といへば出來事であると語つて居る。

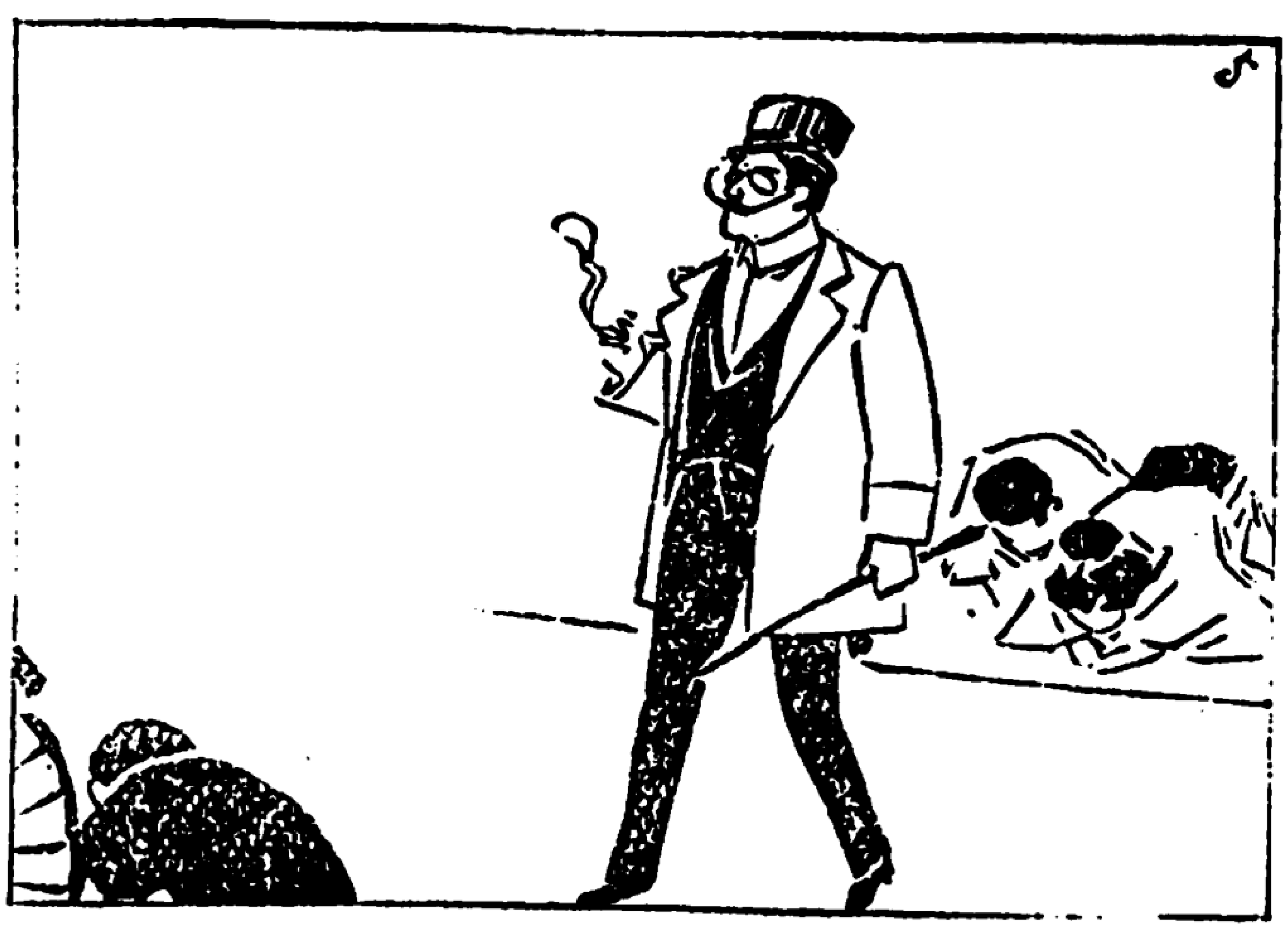
○米國絹業の奬勵　米國にては毎年九千萬圓餘の絹を輸入し尙年々輸入額增加せんとする傾向あり右に就き同國の製絹業は從來屢試みて屢失敗に終りたるに拘はらず同國農務省にては盛んに絹業を奬勵せんとし已に奬勵費として二十萬圓を支出するに決したる由なり而して同國に於て今日まで同業の成功を見る能はざるは絹產地なる佛伊、支那及び日本等より勞働賃銀の高きためなりと



○多くの勳章を有する婦人　英國のコルンワリス、ウエスト夫人即ちランドルフ、チヤーチル卿の未亡人は英國第一の美人として有名なる人にて又英國の婦人中最も多くの勳章を有する人として有名なる由なり英國に於て婦人に授けらるゝ勳章は四種ありて夫人は其中三種を

有すと云ふ又佛國のレジオンドノール勳章は婦人にも授けらるゝものなるが此勳章を與へられたる婦人は二名あるのみ一名は動物畫家として有名なるロザ、ボンナイル嬢にして他の一名は有名なる探検家チユーラフオイ夫人なり而して此勳章を有する婦人に對し同國の兵士は男子と同等に軍隊敵の敬禮を爲す規定なりと云ふ

○戀の爲に三十年間の籠居　英國リースター附近のエイルストーンに住する籃製造人トマス、プレストンと云ふは今より凡そ三十年前に或る婦人を戀慕したるが其戀を遂ぐる能はざるより失望して世を厭ふの念を生ずるに至り爾來家の中に閉籠りて一回も外出せず何人も之を訪ふものなき程なりしが折々は窓



を開きて顏を出すを見受けたるものありたり然るに去月來窓をも開きたることなしと傳ふるものありて此事警吏に報せらるゝや警吏は直ちに其家の戶を開きて中に入りたるにプレストンは下層の室に死し居たり醫士の診斷に據れば久しき以前より心臟病に罹り居たるなりと云ふ

○二萬人より結婚の申込　阿非利加探検家として有名なるポール、シエイユーは目下露國に在り皇帝に謁見して旅行中の記事十五卷を獻じたるが氏の談話に據れば氏は西阿非利加滯在中に二萬二千人の婦人より結婚の申込を受けたることある由にて或る時の如きは一日中に七百六十三人の婦人より申込まれたることあり孰れも黒奴の王の媒介

に依りて申出でたるものなりしが氏は黒王に向ひ一人の婦人と結婚せば其餘の七百六十二人は嫉妬を起すべしと語りたるに黒王は然り、故に悉皆を妻とすべしと忠告したりと云ふ

○世界一の美人　此程紐育の商業會議所へ獨逸皇帝の代表者として派遣せられたるプレッス公の夫人は世界一なりとの世評ある人なり公は砲兵大尉なるが曾て倫敦の獨逸大使館附書記官たりしことあり其頃英皇太子即ち今の英皇帝と親しき交りを結ぶに至り其關係より當時美人の聞え高きコルンワリスウエスト夫人の知己となり終に其娘と結婚せるなり公夫人の妹も美人にして英國第一の富豪ウエストミニスター公と結婚せりプレ



ッス公の夫人は結婚のとき十七歳なりしが間もなくして一子をあげ英皇帝は其名親となりたりと云ふ

○ビートーフエンの裸體像　獨逸ライプシッヒの市民は有名なる音樂家故ビートーフエンの肖像を求めて目下同市の中央に設置中なるが此肖像は裸體にして世界を支配するジユピターに像り氏の坐する椅子には婦人の顏を彫刻し其裏面にはイデンの園にアダムとイヴと逍遙せる樣を表はし椅子の傍には大なる岩ありて其岩の上は鷲の棲し居るものなるが何となく湯あがりの姿に似たる所ありて風俗を壞亂する者なりとの批難激しく或は其設置を中止せしめんと謀り同地にて騒しき問題となり居ると云ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○佛國の佛人裁判所　佛國にては婦人の爲に婦人の判官より成る裁判所を設けんと目下計畫中なる由なるが裁判所にては如何程學識ある人にても多くは不案內ある婦人に關する一切の事件を裁判するにありて例へば仕立物に關する訴訟の如きは其事件の一なりと云ふ

○一種の不老法　テクセッス雜誌は曰く老ず壯健にして柔かに關節を保つ秘法は絕えず青年の時の活動を續け且つ人生に限りありとの考を抱くことなく以て筋肉を強固ならしめざるにあり若しクーパー及びグラッドストンの如き人が八十歲に達するまでも活動することなく四十歲頃にて老年の考を起したらんには其事業の幾分を爲し得たるか疑はしと

●●●

○昭忠碑(口繪參照)　仙臺なる青葉城天主臺趾に建設せる同碑は第二師團管內軍人軍屬の內亂外征の際前後陣歿したるもの丶忠魂毅魄を慰めん爲め同地文武兩官の設立にかゝる昭忠會に於て建設したる者にして碑の高さ六十六尺あり中央に銅牌を嵌し碑頭に青銅の金鵄安置せり昨年十一月二十日の招魂祭に於て竣工式を擧げ青葉城頭一偉觀を添ゆるに至れり今左に設計委員杉技師が工事の經歷に關する報告書を掲げ尙はその詳細は追て掲記するところあるべし

昭忠碑建設工事の經始は實に明治三十一年十二月即ち昭忠會創立の際にあり明治三十四年六月を以て起工し本年本月本日を以て竣功す碑全体の意匠は男爵四竃二郞之を案じ其圖案は東京美術學校助教授河邊正夫之に當り碑頭の金鵄は同校助教授沼田勇次郞原型を製し同校助教授櫻岡三四郞鑄金に任す碑体の構造は宮城縣技師杉野茂吉同技手山添喜三郞大体を監し囑託鈴木金三工事を董す金鵄の裝置は櫻岡三四郞助手二名及び宮城縣技術手山崎唯次と共に之を督す碑の高さ六十六尺其五十尺は石座に係り中央に銅牌を嵌して碑銘を題し碑頭に靑銅の金鵄を安す其兩翼二丈二尺に亘り碑体の材料は花崗石二千七百七十八才煉瓦十七萬四千七百四十三枚鐵材一千百五十五貫等より成り金鵄の材料は銅二千二百二十二貫鉛二百三十貫より成ろ工を役すること五千七十一人經費總計金二萬二千二百余圓內金一萬二千二百圓は石造碑体に屬し金九千圓は鑄銅金鵄及金屬製部に屬し金一千

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜報

余圓は監督費其他雜費に屬せり其工法は之を外にして壯觀を全ふせんことを期し之を内にしては耐久の實を失はざらんことを期せり其保存の點に至ては固より効驗を他年に待たざるを得ずと雖とも規畫者其人を得當工者も亦た任に適したるを以て今日此壯觀を呈するを得たり玆に落成の典を擧行せらるゝに際し事歷を述ぶ

落葉籠

●歌文當撰者即ち誌友諸孃の御肖像は未だ御かゝげの御都合にはなりませんか私は一日千秋の思で御まち申て居ますけれども今に拜見致す事ができませんのは實に殘念に存ます(東海一婦人)

●つる子樣に申し上げます、舊派の和歌は何年となく多くの人の苦心の手によりてなつたものですから優美ですが只今では完全してるとは思はれません。新派は近頃起たのですからごつ〳〵した所もあり意味のとほらぬ所もありましやうが始めからうまくはゆきませぬ故さらひだと仰しやらずに兩方の長所をとつて共に斯道の榮をはかろうではありませんか(東京學子)

●私は新派の和歌を學で居りますが師の君の仰せられるには前號につる子樣の仰しやつたやうな事を御いましめになつて一度讀でわけのわからぬやうな歌はよくないとの事で新舊ともに長短所があると存じます、これは新派ですが何と可愛ではありませんか

十二歳の少女

せみの聲聞ゆる頃となりにけり
　うばの在所はすゝしかるらむ

十三歳の少女

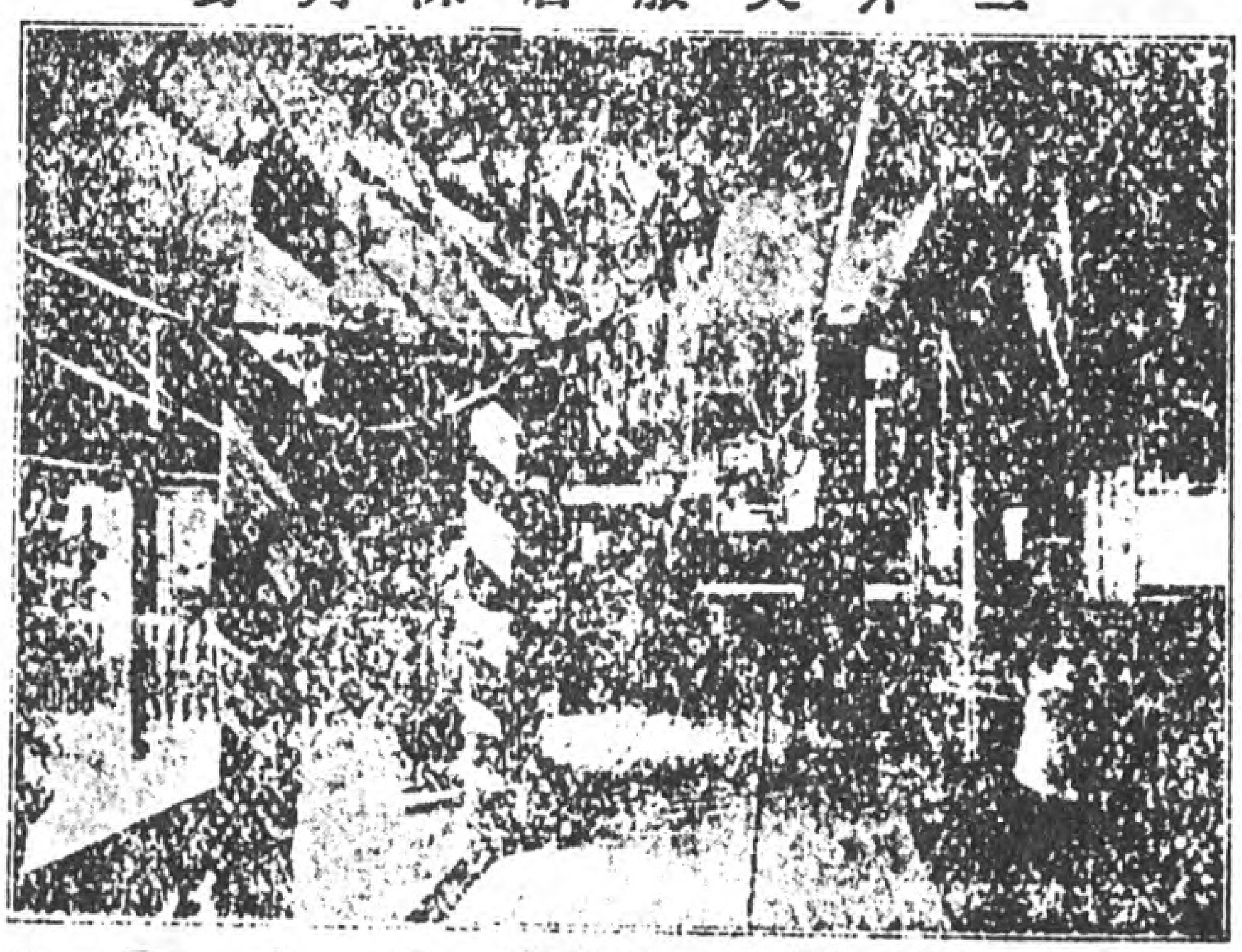
楓葉に茶席のあたりうづもれて
　雁なきわたる夕ばへの空

●私は假名が稽古したひと思ひますがどなたの字で何と云ふ本がよろしう御座いましやうか御承知のお方は御手數ながら此欄へ御通知を御願ひ申

ます（長崎市大井手町十四番戸林くに）

●諸孃　妾は是迄、二人の友と葉書通信を致して誠によろしい結果を得ました。こは凡通信を葉書に限り、凡の出來事の抒情、叙事、批評、報知、吟詠等を送り升のです。妾は月々、武藏野と、碓氷との戀しい便を齎らせられます。通信を讀む度に、一面識もない友の面影想ひやられてゆかしさなかく〳〵です。それに、この二人の友は、今私と通信をなしえない事になりました。あはれ、如何でムいませう、友失へるむくつけの田舍娘に、優しき御手握らせ給ふ情深き方はゐまさずや（長州萩章子）

●去日の新刊寄贈欄に出て居ましたこゝろのはな發行の大日本歌學會の在所は何處でせうか亦會費は幾何ですか御存じの方は御敎をねがひます（海東女子）



三井呉服店陳列場

●同會は東京市神田區美土代町二の一にあり（係）

●私は過日和歌の御送りを願ひ致して置きました處皆樣から澤山御高詠を御惠み下され、身の師と深く御禮申上ます、就ては御返し文をいたしますはづにござりますけれど何分淺學の身の上ゆゑ何卒おゆるし給ひて、ふかく御厚誼をいのり申すになん（伊勢村春子）

●近頃女學生が自由自在の振舞をするといふ事を世間で申ますが、私が東京の姉からきゝましたのにはあいまい茶屋の女が女學生の姿にて市中を横行するといふ事でありますがそれが事實ならば誠に憎むべき者であつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜報

で眞の女學生のみを黒らさしてわいまい茶屋の女なるものをよろしく懲らしめて頂きたい（一女）

〇和歌寄稿者に告ぐ

今回の月並兼題寄海祝の天地人宮選者へは特に選者黒田清綱先生の揮毫にかゝる短册を贈呈することゝなせり尚今後も時々贈呈することあるべきにより盛に寄稿あらんことを望む

新刊寄贈

兒童研究	第五卷第十一號	教育研究所
大日本婦人教育雜誌	第百五十號	大日本婦人教育會
大八洲雜誌	第百九十七號	大八洲館
女子之友	第百二十九號	東洋社
文藝	第七號	駿々堂
裏錦	第百廿二號	尚絅社
をんな	第二卷第十二號	大日本女學會
新聲	第八編第六號	新聲社
佛教	第十八卷第十一號	佛教社
婦女新聞	第百三十六號	婦女新聞社
婦人世界	第十九號	淑華婦人會
むさしの	第十一號	東洋文學會
体育	第百九號	日本體育會
偕行社記事	第三百三號	偕行社
中央公論	第十七年第十二號	反省社
慶應義塾學報	第五十八號	慶應義塾
婦人	第三號	婦人協會
工談雜誌	第百五十五號	工談社
國學院雜誌	第一卷第十二號	國學院
會報	第一號	法令審議會
中學文藝	第七號	秀英舍
教育	第卅四號	茗溪會
珊瑚の海	第一號	南海社
愛國	第八十七號	愛國社
京都教育會雜誌	第百廿八號	京都府教育會
法律上ノ結婚		新聲社
婦女小訓		内外出版協會
福井工業新報	第二十五號	福井工業新報社
服裝新報	第二號	服裝新報社
小年界	第一卷第十二號	金港堂
少女界	第一卷第十號	仝上

定價

一册	金拾錢
六册三ヶ月分	前金五拾七錢
十二册半年分	前金壹圓拾錢
廿四册一ヶ年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字一行	金參拾錢
半頁	金八圓
一頁	金拾貳圓

（色刷は特に御相談に應ず）

明治三十五年十二月卅日印刷
明治三十六年一月一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 渡邊業一

印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木眞雄

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話特新橋八十八番）

恭賀新年

明治卅六年一月一日

株式會社 國光社

社員一同

恭賀新年

明治卅六年一月一日

株式會社 國光社女鑑編輯局

一同

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御記載下度候

見よ大擴張後の日出國新聞を!!!
讀むべし大刷新後の日出國新聞を!!!

大祭翌日の外
年中無休刊

日出國新聞（やまとしんぶん）

定價一ヶ月　金貳拾四錢

△小說　福地櫻痴居士の筆に成り海内無双△論說　面目を一洗して議論讜博、筆力精透△新刊批評　深討精査、巨犀の淵を照らすが如し△文藝　山田美妙其他諸大家交々筆を執り奇思妙想湧くが如く毎に本紙の一特色たり△訪問と觀察　汎く社會の各階に渉り其人に接し其境に在るの趣あらしむ△記事　其特色は探訪なるに在り着實なるに在り

發行所　東京市京橋區三十間堀　やまと新聞社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●再版發賣告

●樞密院副議長　東久世通禧伯題字
●華族女學校學監下田歌子女史序文

東京帝國大學
醫科大學卒業　秋山七朗先生著

再版 女子教育 家庭教養法

全一册

◎製本菊版　大本
◎四號活字鮮明刷
◎正價金五拾錢

女子教育は今日の一大問題にして、家庭に學校に其需甚た少しとせす、然かも專攻學家の手に成り生理に照し衛生に基き學理の上より家庭に於ける教養の方法を詳說したるものや即ち少し、殊に單た妊娠の前に起し分娩、保育より教育、性行に渉り家庭を通して必要なる教養の方法を詳說したるものに至て本書に於て始めて之を見る是れ本書に題して女子教育家庭教養法と稱ふ所以にして、試に其目次の一班を擧げんか第一章に妊娠を說き妊娠の徵候、精神の衛養、身體の攝養、乳湯の準備を詳說し、第二章に分娩に入り産前産後に付て産室、出産用具、出産、産褥中の用意を說き、第三章の生兒の保育には母乳、乳母、獸乳より入浴及胎毒、臍帶及衣服、啼泣睡眠及外出、乳齒、離乳、種痘、保姆、疾病、健康、醫師藥用、服製、玩具及遊戯、第四章の教育には體育智育德育に付き身體の發達保護、衣服飲食、智力の發達、視官、聽官、觸官、嗅官、味官、筋肉官、記臆想像、注意、斷定、推理、性情、體慾、色慾、慾望、情愛、情操、推考意思、撰擇、教訓、習慣を分說し第五章には放縱、傲慢、沈鬱、過敏、怯懦、剛渉、輕躁、懶惰、嫌忌、好奇等の各性行に付き矯弊の方法を詳說し、凡そ女子教育に於て最も必要至重女子の知らさる可からさる家庭の教養法は擧て漏すなく、生理的に心理的に衛生的に學理の定則より詳說細述したるものなり、是豈に生花の書を讀み點茶の書を讀むと其必要同日の論ならむや、荷も母たり女子たる者の座右に必ず缺く可からざる大好書也、賢母たらんとするの淑女諸ふ必ず一本を購讀する所あれ

東京市麴町區飯田町四丁目三十番地
發行所（電話番町四八二番）自治館

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

國益新聞

壹枚壹錢 壹ヶ月二十錢

年中無休

▲女も男も讀むで飽かざるは國益新聞なり

▲面白き中に教訓あり愉快なる中に利益あるは國益新聞なり

▲樂しき家庭を作り正しき國民たらんと欲する人は我が國益新聞に依るの外なし

婦人及び家庭に關する評論殊に多し

東京京橋區竹川町十九番地

國益新聞社

（電話新橋一五一番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●女子學術講習會廣告

本會に於て普く一般女子に必要なる新智識を得せしむる目的を以て明治三十六年一月より左の要項に依り第四回女子學術講習會を開く志望の者は住所、族稱、氏名、生年月、を記したる願書を本會事務所に差出すべし

要項

一學科及講師

兒童心理　東京高等師範學校教授文學士　松本孝次郎君

女教員、保姆、母親、其他一般女子に於て兒童を育つるに是非共缺くべからざる心得を學問上よりわかり易く授く

料理法　日本女子大學校講師　赤堀峯吉君
全　菊子君

日本料理及び簡易なる西洋料理を實地につきてわかり易く授く

一科外講演　華族女學校學監　下田歌子君
醫學博士　三嶋通良君

一講習料　金壹圓五拾錢（結了迄の分）

一會場　神田區一ツ橋通町東京高等師範學校附屬小學校講堂

一期限　明治三十六年一月十八日（日曜日）より毎日曜日午前第九時より三時間づゝ凡三ヶ月にて結了

一證明狀　出席の度數を案して授與す

一申込期限　明治三十六年一月十二日限り

入會願書式　（用紙半紙）

入會願

現住所、族稱、職業
氏名

貴會女子學術講習會へ入會致度此段相願候也
明治三十六年　月　日
右　氏名

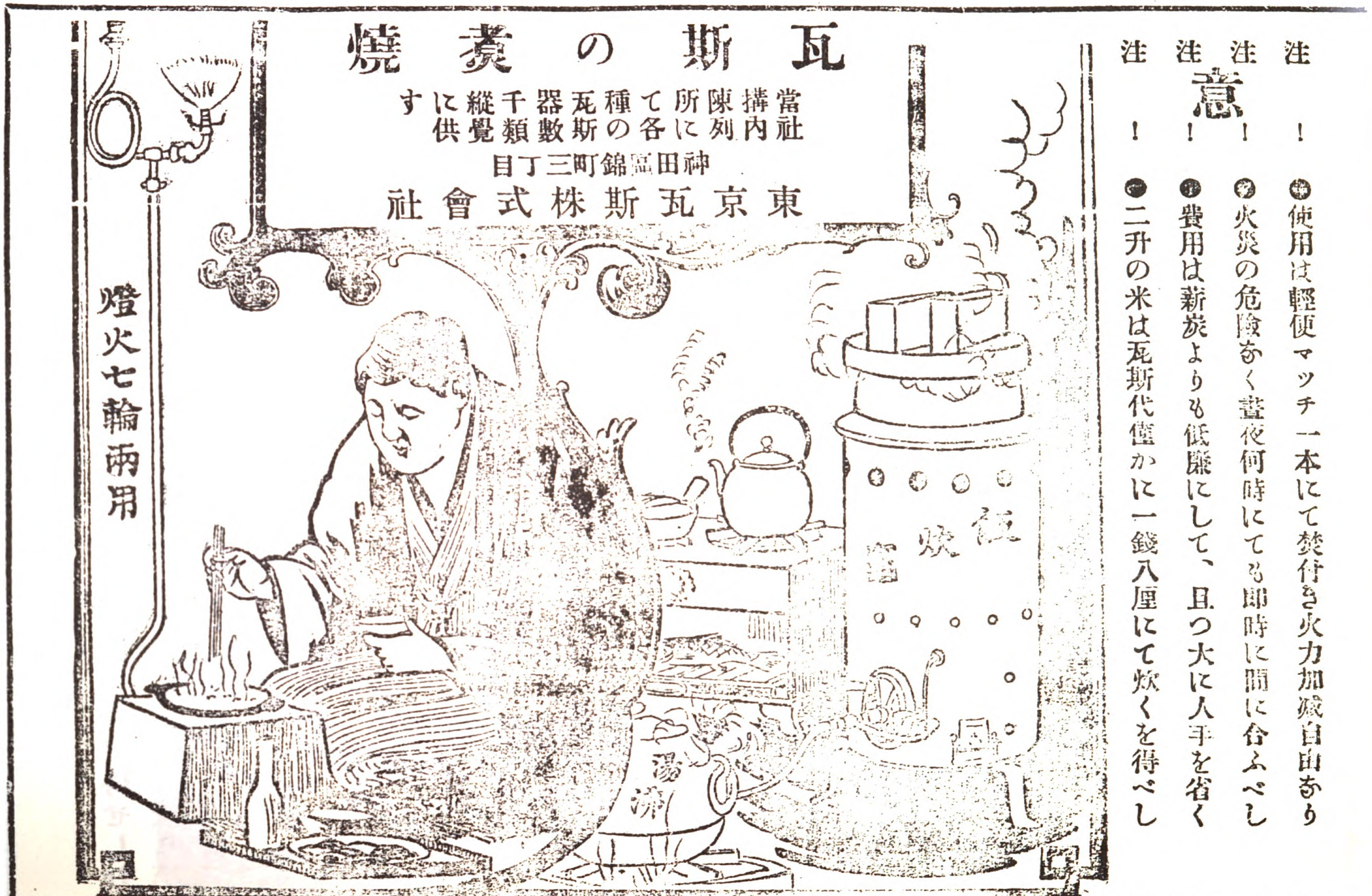
東京府教育會御中

明治三十五年十二月

神田一ツ橋通町二十一番地
東京府教育會

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり

（附錄）腐敗酒直し法、醤油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法等以上の釀造家及び諸賣營業者の大有益案内…………右今同披露の爲拾萬部限り

無代進呈

す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實

大有益

の秘訣なり是ツ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す（注意）本舘の隆盛を羨み近時當舘廣告に擬せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者現はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ…………（當舘は去廿壹年の創立也）

發明元祖　東京市神田五軒町拾九番地

日本授産館

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリスの貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體

純白色に變化

し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に驗烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元　東京市神田五軒町拾九番地

日新舘藥房

月やく　忽ち下る確證新藥

本劑（調經丸）は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止なるも必ず忽ち

快通流下

する特効あり本劑參劑分を用れば二三ケ月に滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに下し且つ

惡血毒血

を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の僞藥現はる用藥者は深く注意ありて「専賣元日新舘藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

わきが（腋臭症）根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても

誓て根治

し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

以上貳藥　專賣元　東京市神田五軒町拾九番地

日新舘藥房

（電話本局二三五四六番）

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●實業家の良友なり

●虛業家の仇敵なり

日刊 實業新聞

●日本唯一の實用新聞なり

●本紙の記事は群新聞と異れり

本紙定價一枚一錢一ケ月廿錢市外郵税一ケ月十三錢

東京京橋銀座四の五

實業新聞社

電話新橋三千五百四十八番

廣告料一行一回三十五錢特別一行一回五十錢



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

巴御前

塚原澁柿

（一）義仲と中原家

飛驒高原を北に壓し、赤石山脉を南に控へて、其の中間、一道の山群の北東よりして西南に走るあり之を木曾山系といふ。山巍く、地寒く、水冷じく、樹冥し。即ち是れ霜　嚴　麋鹿眠の區、或は見る夜深　山鬼至の境。

由來北陰之地、多く美姫を出だす。出羽の小町に於ける、加賀の佛に於ける、近江の妓王に於ける、越前の小觀音に於ける、出雲は阿國を出だし、鹽原は高尾を出だす。然れども是れ皆な窈窕婀娜、所謂る細腰羅綺にだも堪へざるものにして、未だかの美にして勇、女にして丈夫なるものあらず。其の之を出だせるは、特り信越の二國乎。越後は鳥坂に板額（板額を醜婦とするは古人たま〳〵東鑑の文を讀み謬れるなり）を出だし、信濃は木曾に巴山吹の二人を產せり。蓋し是れ山の靈と水の精と好くこの偉物を生せし乎。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

巴の事を敍するに先ちて、予は且づ義仲の事を記せんとす。義仲は爲義の孫、義賢の子なり。義賢、帶刀先生となり、養はれて上野の多胡の人秩父重澄の子となる。事を以て兄(義朝)の子義平と相惡み相摸の大倉に戰つて敗れ死す。時に義仲纔に二才。義平、其の後患をなさむと慮り、畠山重能に命じて刄さしむ。重能忍びず、之を齋藤實盛に囑す。實盛また之を木曾の人中原兼遠に托す。盛衰記に曰く、「實盛請取りて(重能より・・義仲を)七箇日置きて案じけるは、東國と云ふは皆源氏の家人なり、なまじゐに養ひ置きて、討たせたらむも憑む甲斐なし、討たせじと爲むも、身の煩ひたるべし、兎も角も叶ひ難しと思ひて、木曾は山深き所なり、中三權頭(兼遠)は世に在る者なり、隱し養ひて人と成りたらば主とも恃めかし、とて母に懷かせて信濃の國に送り遣はす。齋藤別當情あり。」と、煢呱々たる義仲は恁くして木曾に送られし也。

世に在る　即ち富裕なる兼遠は、所謂る信濃の「椋鳥」に似ず、なか〳〵の投機師なりき。彼以爲らく此人(義仲)は正しく八幡殿には四代の御孫なり、世の中は淵は瀨となる喩あり、今こそ孤兒にておはすとも、知らず世の末には日本國の武家の主ともなりやし給はむ、如何樣にも養ひ立てゝ、北陸道の大將軍になし奉つて、我は世に榮えむ。と微妙じうも野心を起しき。咲、此の野心、彼の蛭が小島を東にせる北條の四郎爺と奚ぞ肖たるの太甚しきや。然して彼は榮え、此は滅ぶ。天乎。將た人乎其は措きて、彼は義仲、すなはち當時の駒王を、木曾の山下といふ所に置きて廿餘年を養へり。

此の間に巴は產れたり、彼女は此の兼遠が長女なり。彼女に兩兄あり、兼光（樋口）兼平（今井）とい、共に驍勇絕倫なり。巴、此の父を父とし、此の兄を兄とし、此の山野を跋涉馳驅す、加之も生れ得て萬夫不當の勇、一人當千の機、彼の「倔强の荒馬乘りの惡所を落し、弓矢打物取つては如何なる鬼にも神にも遇うといふ。」とは決して平家物語の作者が溢美の過稱にあらず、實に良種の秀苗を生じて、加之恰當の肥培を與へしもの乎。況んや「其の色白う、髮長う、容顏まことに美麗なり。」と云ふに至りては、是れ天の此女に二物を假せるもの、後來の薄命も、嗟また竟に誰をか恨みむや。然して義仲も亦た將門の將種、彼の「八幡殿四代の孫」といふに耻ずして、弓矢を取つて人に勝れ、心剛に、馬に善う騎りて、保元平治に源氏悉く亡びぬと聞えしかば、七八才なる幼心にも安からず、いかで平家を追失うて、世を取らばやと思ふ心あり、馬を馳せ弓を射るにも、是れは平家を攻むべき手習ぞと いゝかいゝか
もてわつかへり。と古記に云へるは、彼が心事を善く描寫せるものにして。寧馨兒が食牛の氣、當に斯く有りしなるべき也。

然して彼が欝勃の氣は竟に其の口を衝いて、主公たり養父たる兼遠に左の言を云ひ出でしめぬ。曰く我は孤兒なりけるを、和殿が養育によりてかく成人せり、斯る便り無き身に思ひ立つべき事ならねども、八幡殿の後胤として、一門の宿敵を餘所に見るに忍びんや、平家を誅して世に立たばやと存ず。如何なるべきや。と打密語けり、岐蘇の夜嵐寒くして、孤燈熒々、身骨共に砭りせらるゝ如きの夜、

褐色の袍を着、黑漆の太刀を佩き、薄髭生ひたる紅顏隆準、威貌堂々たる偉丈夫が口頭より此言を聞ける彼中三爺が心頭の踴躍は、什麼如何ばかりなりしならん。彼はたしかに驚喜して其の子、寧ろ家人として見し未來の大將軍が手を執りて、偏に八幡大菩薩の靈告と天地祖宗に拜謝せしならむ。何者、彼れ爺が此の廿四年間、這の危險にして我儘なる食客を扶持したりしも、單個の之有らむが爲なりし也。此を外にして他の要無き也。今や馴養せし獵犬の兒は、自ら獵に出立たむとて跳躍せり。見越の買占は中りしなり。廉きに勝へる晩秋より飼へる籠の鶯は、早春の氣に感じて聲を發せり。地所は價が騰でしなり。況んや彼が二人の兒、其の久しく池中の物に非らずと見たる兼光、兼平も、之に因りて風雲の會に遇ふべきをや。蓋ふに此時、巴は其父が驚喜の中、其が侍執の妾にして彼の新主公に献られしものならむ。而して風寒く、雪深き岐蘇の山家も、獨り宮腰(今の宮の越驛)なる彼等が館のみは、春風駘蕩、百花將に笑はむとするの氣象を含めるならむ。

此より後義仲は、屢京師に微行したりき。史には、彼「種々の謀を思ひ廻らして」と云ふなれば其の後來戰塲たるべき北陸東山の諸要害、京畿の山河、幷に所謂鐵漿黑に薄眉をつくれる平家の公達、六波羅樣に烏帽子ためつけたる諸侍が強弱剛臆、全般の物の樣をも視察の爲なりしなるべけれども、或は彼、其宿敵の棟梁といふ淸盛を一目見て、竊に博浪の一椎を彼が法師頭に加へむとしたるには非ざる莫き乎。彼が勇にして慮短かく、然も年少氣銳の當日の情態を以てすれば、後來の旭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日將軍たらんより、當年の蒼海公を以て自ら甘むせしやも亦知るべからず。然して成敗の迹より論ずれば、暴臣の賊義仲として其首を同宗の手に梟されむよりは、復仇の孝子木曾冠者として、寃家の刀に其躬を斃すの寧ろ遙に勝れゐるもの有るが如きを奈何せむ。

然れども時は利ならずして、彼が刄は仇家の腹を刺すまでには到らざりき。彼は猶其の幾年を岐蘇の山險しく、樹暗き處に匿れり。彼が此の境遇は、名匠の龍を畫くに似たり、鱗介爪牙皆既に具備りて獨り其の點睛を缺く。而して其の睛子は今測らずして點ぜられたり。何ぞや。以仁王の令旨これ也

（未完）



漁夫の妻

遲塚麗水

（一）

世は冬なれど雪は袷にのみ知る伊豆の初島、椿の花に裹まれて靜かに眠る四十二軒の一箇村、醒めしは初木の社の常夜燈、青岸寺の鐘、磯の波、松の風、

鶏啼かば、曉ひらさきに、漁夫どもが海の幸われと祝す額に紅き毎朝の日影もけふ初日の出の名に呼ばる愛たき春の來む大晦日の夜は深み、葉長は肩より高うして盞大の花咲き亂れて水仙の小道を推し分け、星朦ろなる磯の邊を覺束なくも歩み來りし女子あり、長き黒髪、裂きたる麻もて其の端を毬とかゝり　振かけたるが優しき肩に畝を打つて流れたり、身には腥さき布子の筒袖、魚の鱗の光る腰簑、緊乎と合せし衣紋の、椀二個を懐きしとはばかりの乳房の邊胸を窄めて、きゝりと括りしは、夜目にも著き緋鹿の子模樣。

脛の半ばを白く寄せたる波に洗はせ、ひらりと小舟に移ると見えしが、手快くも早紐を捌きて櫓を執

り展べ、一聲ぎいと磯の岩に浸み入るような音を引いて、天仰見しが眉を寄せ

『天城颪に風が變つた、』

漆の海は三里の彼方に、伊豆山權現、古々井の森、熱海の灣、魚見崎、錦が浦、網代の港、伊東の亭子岩、唯眞黑に星霽れたる天と潮昏き海との間に横はりぬ、眞鶴が崎より小田原、酒匂、大磯、小磯の濱かけては、流石に冬の海なれば海氣は森然と立ち籠めて、呵氣吹きかけし鏡に物の映れるごとく朧ろにそれかと見ゆるのみなり。常には眞西に拜まるゝ富士の神山は看れども見えず、月沈みて幾そ時ぞ、紺碧の空西へ〳〵と褪せ行けば、劃然と黑く高き天城山の背に當りて、海の涯の那邊の底にまだ世に知られざる寶具の靈光を吐くかとばかり、眞珠の色に冴えたる微明りの中霽高く立ち升れり、空往く風の疾しと見えて、豕兒雲一個、低く垂れたる牽牛織女の間を掠めて奔りぬ。

『もう十二時には間もあるまい、夜が闌けたとて參詣は明日にしたなら、畏いほど靈驗な伊豆山權現の冥罰は什麽やうであらう、妾の生命を縮めても夫の眼が見えますやうにと御願掛けたに昨日からは障子に射す日影、洋燈の火、翳す掌の影、膝邊の物が淡々と見えて來たとて嬉しさうな夫の顏、連れ添ふてから三年になる中に、あんな嬉しな顏をなさつたは昨日が始めと思へば凄いほどの御靈驗、この上は水垢離して又た三七日は權現堂に籠つたなら、翳は拭いたやうに癒らうに、夜に紛れての參詣も宛然氷を履む心地、初島の者が來たと見たなら打ッ敲いて澗然とやり兼まい伊豆山の衆、何にも

知らずに眠る夫の寢息を窺ひ、そッと脫け出して初夜と二夜の參詣は、夢の中に戾つて來て知らさずに濟したが、三日の夜は到頭覺られ、密夫でもあるやうに責め詰られて裏み切れず、一七日の祈願を掛けたことを話すと、陰つた眼を瞬ひらいて、癒る眼ならば島の淸水で洗ふても見えても來やう、其方の夜の脫參を、萬一伊豆山の奴輩に見られて、鐵五郞の女房お仙と知られたなら、荒繩で引ッ括られやう、簀に卷れても浸けられやう、夫を思ふ眞心は忝ないが、萬一の事があつたならと强ての戒言、假令夫の言葉には背いても、權現樣に掛けた祈願を反故としたら、血も吐かう、眼も潰れやう、滿願までは什麼あつてもと昨夜までは無事に參詣を濟したが、嬉しや夫の眼も見えて來たし、それに今夜は首尾よく滿願、今夜を無事に濟したらモウ千人力』

心勇めば早緖も撓ます、櫓拍子さへも面白く、ノたり〳〵たり波を掃うて星の光にほのめきたり、見渡せば星影靑く涵したる伊豆の海、中に孑然浮びたる初島小さく螺鈿の漆盆に載せられたる石とばかり、

『あ、此處だ、此邊りだ、初島と伊豆山の不和の元の、大鯨の流れ寄つたは』

(二)

瞭して視れば波に涵せる星影も滲むばかり、晝ならば五色の雲を湧せし脂暈の、島と陸との三里の海

に浮べるなり、

『月の中の六日のしら〳〵明、一夜の中に島が湧いたかと喫驚したのは流れ寄つた大鯨、いの一番に發見けた、白髪が自慢の彼の銀平さん、村中へ觸れ廻つて、島を繞つて十六艘の舳を揃へ、得物を持つて漕ぎつけて、浮いた千兩箱に綱を投げかけ、島へ引かうとしたところへ寄せて來たのは伊豆山の漁夫衆、此處は此方の有ちの海、奪られてはなるものか、否、遣らぬといふ諍論、

丁度鯨の寄つたところは、島へは一里半、伊豆山へも一里半、小田原の早川口から眞直に線を引いた其の境域、少しは島に近い處であつたゆゑ、初島の者が拾うのに伊豆山の衆、羨ましいけれや指を銜はつてなり見物して居れば好い筈、これも小勢と初島の者を侮蔑つて、理無體に與らぬと言ひ張る、理のあるところを大負に負けて遣つて、背を割つて山分けに、千兩は五百兩づゝ、お互ひに好い年の瀨を越さうよと折つて出れば、頭を掉つて辰己上り、利かぬ氣の銀平さん、もう堪忍がしきれぬと諸肌をぐいと推し脫ぎ、背一杯の磐若の面、兩眼と口は朱、藍暈取つた凄いのを露出にして櫂を揮つて眞先の伊豆山方の早緒を横に薙ぎ切つて、若衆一人を海の中へ筋斗打たしたが喧嘩の初まり、

櫂やら艪やら得物の打ち合ひ、銛の投ケ槍、船板の楯、伊豆山方では喧嘩は覺悟、船底に藏して置いた鮪庖丁、刄渡し三尺睫毛も鮮明り映つるやうに研ぎ澄した凄いのを、振り閃めかして亂暴、千兩の魚を捨てゝ生命の授受、鯨の脂で一町四方は灰を撒いたやうに眞白になつた上、腥さい鮮脂を流した

やうな修羅場、

島に殘つたは婦女小兒、脚腰の立たぬ老人ばかり、沖の喧嘩を氣遣はしく、椿の濱に集まつて掌には汗、鐵五郎は若衆頭、此の喧嘩を脊負て立たねばならぬ筈を、煩らつて居るばッかりで島の大事を沖にして、見えぬ眼の眥裂いて、地鞴踏んで氣を苛ち、双の拳に胸を敲いて脣青く顫はす無念さ、島の衆は勝つかやい、伊豆山の奴は亡せをつたか、彼の聲は初島方の凱歌かと妾の肩を驚攫に推し拉いての忙しい言葉、

初島が勝たと言ひたけれど、島を擢つて船が十六若衆は六十人、伊豆山方は熱海の漁夫も加勢に入つて五十艘にも餘る船、人數も味方の倍の多勢に無勢で勝たれう筈なく、鯨は到頭敵方に奪らはれ、初島方は散々の負け方、白髮の銀平が脊の般若、藍暈が紅暈と變つて流血淋漓、其の外の若衆は、貝紋纈の鯉口、伊達染の向ふ鉢卷、段々の三尺帶、絲菅の腰簑、どれもこれも慘々しい紅いものだらけ、椿の濱に引揚げて來た島の若衆、銀平の爺は男泣きに鐵五郎と手を握つて何にもいはず、顏と顏とは三寸ばかり、氷を嚙むやうな切齒、手を振り放して、身體を沖へ捻ぢ向けて、打ては鳴るよな腕を擦つて、見えぬと見ゆる四の眼を瞋らして睥めつけて、拾つて行けと唯つた一言、波の外には森となつて、六十人の若衆に熱い涙を手の甲で撲なぐり、環立いた婦人小兒は潛々と顏へ袂、

其の晩の寂しさといつたら、島の一村四十二軒は宛で火の消えたやう、早咲の椿の花が、霜に頽れて

ばさり〳〵と、室根路傍に落つる音を聞いて悄然座つて居ると、深い穴に引かれて行くやう、氣が滅入て何ともいへぬ心地、丁度其の夜は日金颪、眞西から吹く寒風に三里の海を度つて來る三味甚句に伊豆山の漁夫達が鯨を拾うた祝の酒宴、椿の濱へ出て見れば伊豆山の方は萬燈、三段幾個の星と見えたは海濱の相洋樓、一文字に引渡したは伊豆屋に相模屋、干網の末擴がりに垂げたのは、相洋樓の旗桿から懸けたのであらう、晝ならば桿頭に日の丸、裾廣りに紅やら青やら碧やらの旗いろ〳〵が翩々と見えるであらう、

簷、旗桿に懸けた萬燈、漆を流したやうな潮へ、針を吹いたやうに燦々、波頭に掬はれては、一寸二寸と斷々に伸びては縮まり、縮んでは伸びる美くしさ、

え、何が美しかろ、今に見なされ春が來れば東風が吹く、櫻鯛、戎鯛、鯖、星鰈、鷄魚、鰹、蝦、飯蛸、西旋舌は初島の名物、捕つた魚は五挺櫓の推送船で眞直に國府津の濱、汽車で東京の日本橋へ載せて行き、手の切れさうな紙幣に代えて、六月中の五日の初木祭には、男は鶴龜模樣の祝衣に牡丹の花笠、女は燕子花重ねの晴の衣裳、新造に神輿を載せて、大拂、海老網拂、椿の濱を渡す賑はひ、早う見せつけてやりたいもの』

喧嘩の樣を眼の前に思ひ浮べて、夢心になりしお仙、ふと心づきてふりさけ見れば、冥の伊豆山の邊に一燈、銀綫細う潮に引きしは權現堂の絶壁に露根の龍燈の松、其の枝に釣り下げたる、如法の除夜

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を照す燈籠。

『彼れは龍燈の松の籠燈、浮々と櫓を推したので舟は熱海の方へ流れた、彼の燈が見えればモウ里、切望満願の今夜を無事に、伊豆山大權現のお冥護で』と、強く推して輕く引けば、船首は正しく龍燈の松の方に嚮ひたり。

霽し星空、怪しう變れり、天城嵐に雲慌だしう、淡墨の滲み行くごと瀰これば、舟を繞りて波は人と立ち騒ぎぬ、疾風來つると見しお仙は、女ながらも一生懸命、踏板撓わに屹と構へて櫓柄を握れば、面に痛き礫雨。

風黒く度るところ潮は吼えたり、龍燈の松の除夜の燈籠、流るゝ星かと搖めきしか、忽ち見えず。

（三）

雄々しくも暴風雨の内を乘り切つて、伊豆山村の濱に來りぬ、波頭に載せられしお仙が舟は、弦を離れし箭とばかり濱の眞沙に搖り上げられたり、夜目にも白く雪を湧せて引く波に脛拂はれて倒れしお仙は、復た寄せ來りし波の頭を躍り越えて、綱に緊乎と舟を繫ぎ、海より山に續きたる千三百の冥の磴級、夫を念ふ一心から、怖さも辛さも寒さも打ち忘れて、風雨の中に探れながら辿りつきたる神の瑞垣、拍手低く祈請を籠めて、さて淨手の湧玉水、眼を洗ふ神水とて小甖に汲んで、腰に結ひつけ、

覺束なくも濱に下れば、磴の端の立石點頭くと見えしは人なり、立ち竦みしを緊乎と捉へて、

『やい〳〵、汪奴は那邊の誰奴だ、』

さては松脂引いて待ちしか、捉らはれては一大事と袖振り拂ひ、遁げんとすれば、背は磴道、前は海眞砂は深く圜節埋めぬ。

『言はねえかい、那邊の誰奴だ、』

『はい、妾は熱海の者で御座います、』

『ふ、阿魔だな、』、袂捉へし拳は寛みぬ、

『胡亂な者では御座いません、切望放して下さいまし、』

『熱海の者が此の風雨に舟で來るかい篦棒め、』

『少し心願が御座いまして、』

『ふむ、心願だ、聽かうかい、其の心願の筋を、』

『他聞を憚かる心願で御座います、』

『言ふな〳〵、此頃夜な〳〵初島の方から怪しい小舟が此の濱へ來るとの噂、今日で三晩といふものは彼の漁小屋で見張つて居たが、寒さ凌ぎの火燗酒、ついとろ〳〵とあつて仕舞つて、二晩は取り逃した口惜しさに、今夜こそはと眼を皿にして、見張つて居ると案の定沖の方から寄せて來た怪しい

舟に怪しい人影、那邊へ行くかと跟いて往つたが此の冥だ舟さへあれば大丈夫と、先刻から俟つて居たンだ、やい、阿魔、大い奴だ、初島の誰奴に頼まれて、伊豆山村の動靜を探りに來やがつたのだ、」

「心願の筋があつて、權現樣へ一七日の參詣を致しますもので御座います、」

「まだ吐かすか、太い阿魔だ、やい阿魔、貴樣は初島の阿魔だらう、斯うあつたら言つて仕舞へ、」

「誰にも頼まれて來ましたものでないことだけは、權現樣の此の石磴を斯う敲いて明亮と申します、」

「貴樣一人の了簡で、動靜を探りに來たと言ふのか、」

「權現樣に願掛けに、」

「復た吐かすか、太い阿魔だ、敲いても言はして呉れうか、吼えるなよ、」

波どつと打ち寄せて、潮烟橫に吹く、這ふ波頭砂を頽して、蹈みし地搖ぐと見れば脛半尺は沒れたり。

荒くれ男有無をいはせすお仙を捉へて、引き來りしは濱邊の漁小屋、婆娑と蓆戶蹴れば、流木の焚火との烟り風に薙ぎられて地を這ひぬ、焚火の中に投げ込まれたる一升德利、酒は沸りて口に溢れし蟹眼魚眼、焚火の前に荒蓆敷いて一人の髭男、立てたる毛脛も翳す掌も、舟漕ぐ顏も赫きが眼を灼爍、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『やい酒の番人、熬りつくぞ、』
『この風雨ぢやァ來はしめえが、初島から怪しい奴は、
『寢惚るない、お酌を一人生擒つて來たンだぞ、』
『串戲いふない、』
『おい、阿魔、寛々と此處で聽かうよ、』
丁と突かれて跟めき入ッて眞砂に双膝、片手を膝に身を捻ぢ向け、仰面いて柳眉をきりつと昂たりし其の半面に火は燦やいて照り添ひたり、
『吉、太した代物だな、』
『權現様の磴段から攫つて來たのよ、』
『こんな美くしい面をして居て、矢張初島の間諜か』
『爾うよ、吉、』
『竹法螺吹いて村の奴等に知らせようか、なあ哥々、』
『俟つて居ろい、』
吉は酒陶を火の中より引き出せしが、慌たゞしく耳朶摘みぬ、權次は駝六張の煙管を啣へ、すぱりすぱり煙草喫して火皿に吸殼を跳らせつ、

「斯うなつちやあ仕方がねえ、初島から何しに來た、やい阿魔、此方を向け、」
初島は椿の花の名所、油の名物、其の油を塗りし髮の澤々しう、黒きが雨に潤れたらば光るばかり肩に落て一とうねり、さらりと背に走らし、屹と見上げし其の顔、二重瞼の眥長き眼、愛らしい唇色白の下豊は艶なる女房風、白磁に盛りし水の、一點の臙脂溶し行くがごとく、瞼の邊に動きし血汐は見る〳〵面に漲りたり。
「初島の者ぞと申しましたら、お前樣方は此の妾を何となされます、」

（四）

「初島の者ぞと吐かしたな、」
女ながらも侮りがたき面魂に、二人の漁夫は眼を白ませて睥め合ひたり、」
「はい、妾はお前さんの言ふ通り、初島の者に相違御座いません、」
「善く吐した、初島は誰れが宿六だ、宿六の名を吐かせ、」
膝頭に肘を立て、焚火に翳す掌紅う、憎き面して樃太が言へば、吉は啣へし刀豆煙管のうの字様に曲りしを、捥ぎ取るやうに砂地へからり、美しさに見惚れたり。
「良人の名を言へと仰しやるの、」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『爾うよ、』
『おい夫れとは憚かりながら、お前様方の前では少し明されませぬ、』
『生意氣な、人前で話せねえところを見ると、閼伽取り杓を引攫んで犬のやうに、年が年中船底を這ひ廻る閼伽取男だな貴様の亭主は、』
眼異しく光りたるお仙、唇少し震はして、
『憚りながら、島は小さいが初島には、そんな卑賤な人は居りません、』
『放言いたな、亭主の名が言へねえか、』
『寢酒の後に寢臥つて、お前さん達見たやうな人に、脚腰揉ませて居ますよ、』
『うぬ、放言したな、』
撲たれんかと肩欹たてしが、二個の拳は頭上三尺、右左より斜に飛んで十字に絡めと流石に打たで手を解きぬ、
『初島の女子が此の伊豆山へ來ましては惡いので御座いますか、』
『仇敵だ哩、』
『何が仇敵で御座います、』
『中の六日の彼の喧嘩忘れたか、』

『流れ寄つた鯨からの喧嘩で御座〳〵すか、流れ寄つたは初島の漁場、發見けたのは初島の者、多勢を頼んで理無盡に、鯨を奪つて往かれたは、伊豆山方の無理、初島の者こそ伊豆山を仇敵と思ふ筈なのを、反對に伊豆山から、初島を仇敵とは誰れが聞いても解りません、』

『初島の方から此の伊豆山を仇敵と思へば、阿魔を間諜なんどに使つて、動靜を全然探つてから、不意に襲つて來やうといふ策畧なんだ、はゝはゝゝ、其の手は陷ねえぞ、板子一枚撤ね除けれア、鮪庖刀、手鈎、竹鎌、何時襲つて來たつて好いやうに、全然用意がしてゐるよ、やい、吐せ、初島の誰に頼まれて、此の風雨の夜に忍んで來た、』

『初島の人に、旋毛の曲つた者は居りませぬ、青竹を割つたやうな洒落として氣象の男揃ひ、鮪庖刀だの、手釣だの、竹槍だのを仰山さうにおほゝゝほゝゝゝ武士の魂は刀、獵夫の刀は櫂だと申します、赤樫の研櫂が刀ならば正宗とでも申しませうか、』

『復た放言いたな、吉、竹法螺だ、』

蔀戶撤ねて外へ出れば、闇に吠る風雨凄まじ、吹く竹法螺は牛の啼く音に似通ひて、高き低きがちぎれ〳〵に村南村北家毎の夢を喚び覺せり、遠近に戶の鴫居走る響、簌々と眞砂蹈んで來る足音、蔀戶撤ねし小屋の門には、人の顏累りたり。

『村の若衆、通して呉んねえ、網代の勘兵衛、老人の冷水に突ン出たんだ、』

赤面の眉白き一箇老爺、背には鯛の丸、裾には寳船染めし袍褞を被りしが、簇る人の後より聲かけたり、

『網代の親方、』

『地藏の親分、』

耳と口、ざわ立ちて人は頽れぬ。

悠々として入り來しが、背を展して腰の邊に拳を置き、大晦日に此の風雨だ、縁喜でもねえ、寂靜と家に蟄居ンで居れば好いに——と、言つたところで俺は網代の船頭、今日此の村の婿の許で酒を饗ばれて、風雨で者つた客分だ、什麼したンだな此の女、』

『網代の親分、此の阿魔ア初島の間諜者で御座えやす、』肩摩合せし吉と權太は蓆を退べつて諸膝も双の拳も眞砂に埋めぬ。

『間諜、ふむ、何の間諜かい、』

『初島の奴等は鯨を奪られたのを根に持つて、襲つて來る了簡で、頃間から夜に紛れて、村の動靜

を探らせるンで、へい、親分、三晩費つて、此の阿魔をやッとこさ捉まへやした、』

『ふむ、彼の鯨の一件からか、彼れア悪い、那邊までも伊豆山が悪い、昔から坊主になつて、青頭を揃へて初島へ詫びなけれアならねえのだ、此の地藏の勘兵衛は、曲つたことが大嫌ひ、伊豆山には人が居ねえな、小さい島だが初島には男が居らア、卑怯な事は爲ない筈、これお女中、お前さんは什麽して此の風雨に、初島から唯つた一人で此の伊豆山へ來たのかい、』

背を嚮けしが居直りて、顔に掩りし鬢髪を、小指に掬ふて梳き上げ、涙眼きらりと仰面いて、『網代の親分、お久濶う御座います、』

腰を屈めて掌を膝に倚せ、顔突出して凝乎と視しが、忙がはしく點頭く勘兵衛、

『はう、久濶しい、鐵五郎哥兄の姐御だな、』

權太も吉も、焚火に映りしだけの顔見る〳〵中に色變えたり、鐵五郎といへば、初島を肩に擔けて立つ任俠の船頭、其の女房にてありしなり。

『やい、伊豆山の野郎共、細螺を眼窩に箝めて居るのか、初島では狭い、伊豆切ての男と言はれる鐵五郎哥兄、其の姐御を見損なつたか、』

息を引いてたゞ〳〵と、有るほどの人、何時しか火影屆かぬ蔭に消えて寂然、

『姐御、什麽してこんな風雨の晩に、』

『少し心願がありまして、此の伊豆山大權現へ一七日の夜參りをいたします、』
『其の心願は、』
『良人が先頃から眼の煩ひ、湯でも藥でも、昏くなるばかりで少しも驗が見えません、此の上は神樣のお力に縋るばかりと、』
『うむ、嬉しい了簡だ、して什麼だな、哥々の眼は、』
『昨日からは微白と、見えますさうで御座います、』
『難有てえ、名物男を瞽にしてなるものか、して姐御、この風雨では歸られめえ、』
『良人が胸を痛めて居ませう、』
『夫じやア歸るか、地藏の勘兵衛一緒に島まで往て遣ろかい、』
『風雨でも追手で御座います、』
『女の腕ぢやア危險だ、何といふても俺が行く、』
肌推脱げば、澁紙揉んで展したるやうな皺背に、刺繡の朱こそ老ひたれ藍こそ褪せたれ、一條光つて走りたる刀瘢、手に唾して櫓柄を握めば前に波あき剛の者、手拭扱いて繩と綯ひて、環を投げかけてきりゝと鉢巻、片裾褰つて身を斜に毛脛を露はし、
『さア姐御、疾く來た、』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

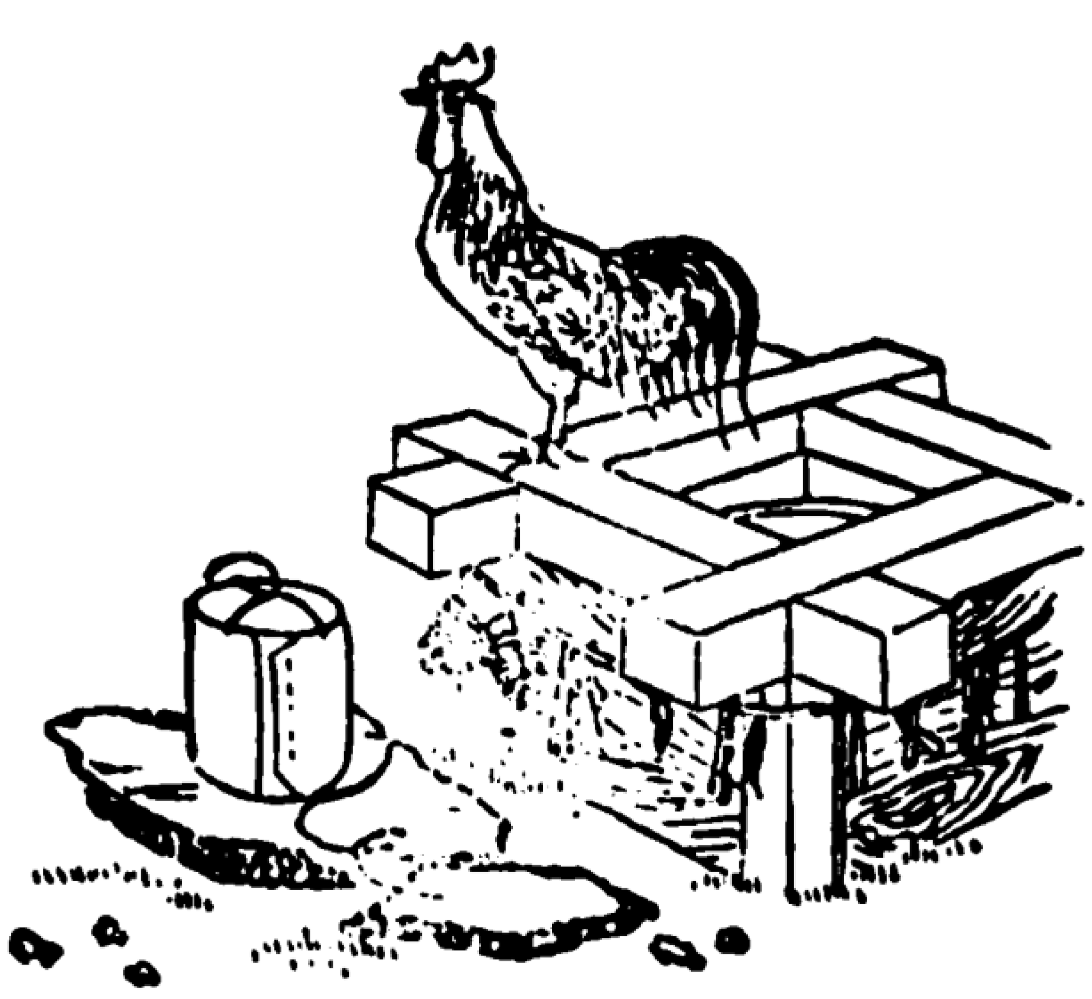
舁き上げて舟に載せ、船脚深く眞砂に入りし艀を肩に揺り卸して、引く波に突き放し、閃然と乘つて櫂の撞木を諸手に握み、えいやと推せば舟は揺々、漫天の潮吹雪を擘いて眞一文字に魚龍躍れる漆の海へ、

曉霽れて海のひんがし、麗に昇る初日の出、初木社頭に先づ歡びの聲揚りぬ。

「難有でえ、明亮見えた」

「愛でてえぞ、」

「嬉しう御座んす、」



戰國時代の婦人

文學士　小林庄次郎

今余は我が邦戰國時代の末永祿五六年の頃、小田原北條氏康の女が武藏世田谷領主吉良氏朝に嫁せし際、北條一族中の耆宿幻庵長綱が其新婦なる姪孫を戒めし覺書を評論し、當時の敎育主義を察すると共に、大名の家庭に於ける女子の生活狀態、其婚嫁の模樣等をも明らかにせんと欲す。

小田原北條氏の天下は人の普く知れる如く、伊勢新九郎長氏後の早雲庵が二代の血戰と智略とにより て創建せし所にして、其領土坂東八州に跨がる、居然として東海の一大雄國なりき。永祿の頃は早雲より四世氏政の世に當り、其父氏康も尙在世し、後見として一國の政柄を握れり、吉良氏朝は足利公方の一族として、其勢力微々、到底北條氏の下風に立たざるを得ざりしと雖ども、貴種たるの故を以て自から世人の尊敬する所となり、古河公方に昵近し、北條氏も亦陽には專ら丁嚀の待遇をなせり、其所領武州世田谷及び相州蒔田にありて、掌大の地に過ぎざりしが、其關左の名門たるが故に、北條氏は早く此の家と婚嫁を通じ、氏朝の養母即ち賴康の室は小田原氏綱の女なりき、今又北條氏康は其女を以て已が妹の養嗣たる氏朝に配しぬ、此れ當時豪族の勢力扶殖の方法たりし結婚政畧を用ゐし跡なり、幾多の憐むべき子女は开が父兄の名利の犧牲に供せられし事實は頗る記述に値するものあり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と雖も、自ら、別問題なれば之を詳述せず、唯當時の上流女子の境遇を知らんとする上に於ては第一に記憶すべき事實なりとす。

北條幻庵は長綱と稱し、早雲の季子なり、故實有職に詳らかに、年齒も長けたれば、當時に於ては北條氏一族中の長者たりしなり、さて、覺書に曰く

おぼえ

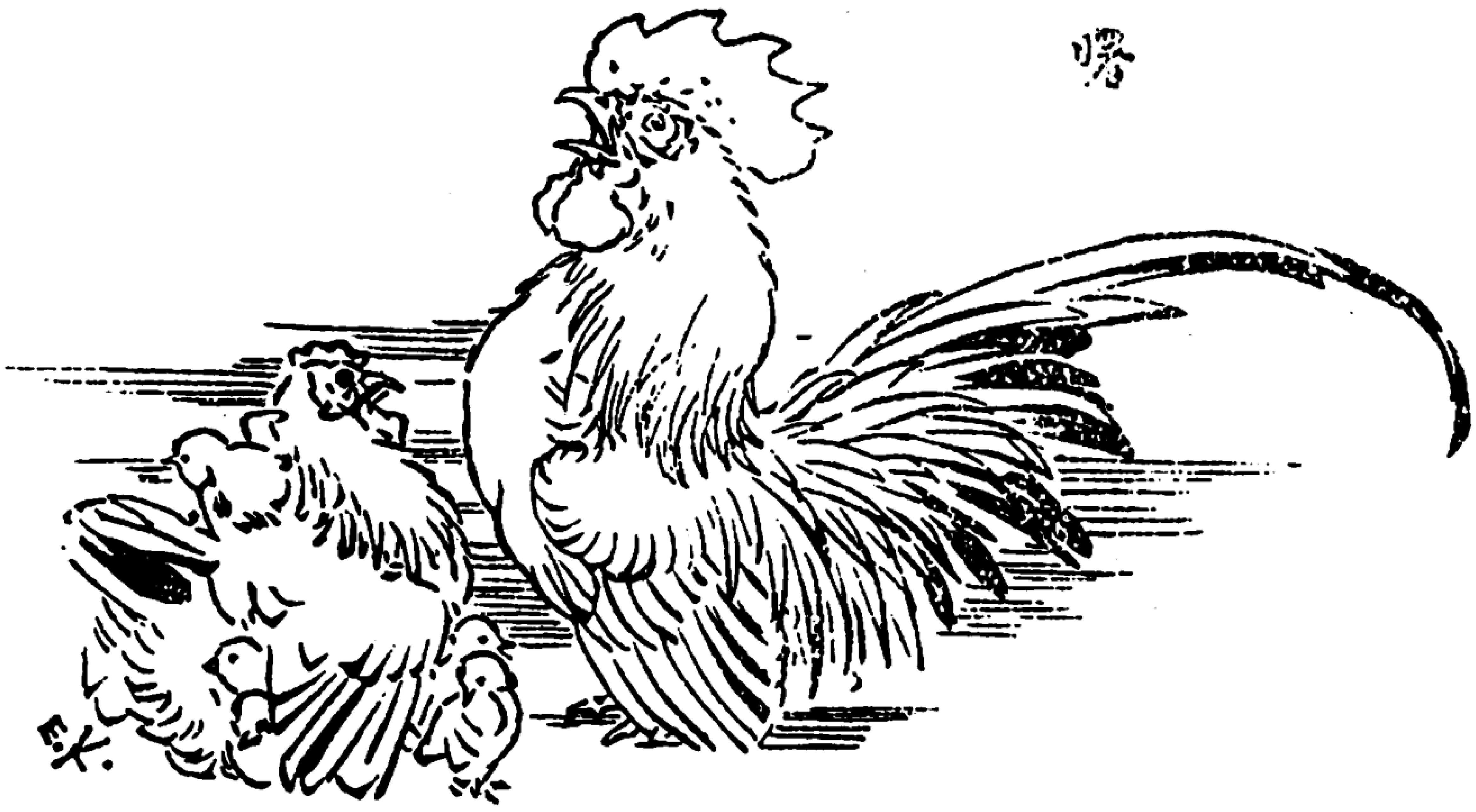
きら殿、御屋かたと申されべし、こなた御やかたをばおだはら御屋かたと申てよく候、又は小田原殿とも樣とも申され候べし、

本條は先づ北條氏の女一旦吉良氏に嫁するの後は最早北條氏中の人に非ずして、吉良家の夫人なれば其父の家と新嫁の夫の家との地位を商量して、其稱呼を一定するの必要あるが爲め、新婦として之に對する心得を説きしなり、「きら殿」は吉良殿にて夫氏朝を指す、名門なれば固より「御屋かた」を以て呼ぶべしとなり、「やかた」とは當時諸國大小名の門閥勢力ありしものに對する他よりの敬稱なり、「こなた御やかた」以下は吉良家夫人として、實家なる小田原北條氏に對する稱呼を定めしなり、

御もじうちにては上さまと申候はん事、もちろんこなたかたへの文の上がき、せうがう候はでかなはね事にて候なに殿といふ御名つけ候てもつとものよし、げんわん申候つると、大かた殿へ申給ふべく候これは正月の文より入候べく候、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「御もじ」とは幻庵が夫人を呼ぶ二人稱の代名詞にして、そもじなど同義なり、「上さま」とは當時の武家にて夫人を專ら呼びし事なり「かみさま」と讀むなり、現今にて中流以下の家の女房を「おかみさん」と云ふは此の轉訛なり吉良氏微々たりと雖も、尙門閥なれば世上に對する夫人の威嚴を保ち人をして「上さま」と呼ばしむること勿論なりと云ふべし、「こなたかた云々」は小田原の方などへ遣はす書狀の上がきに、夫人の名前なくては叶はぬ事なれば此れにはまさか自ら「上樣と署する譯に行かず、又吉良家の夫人として其家の地位上北條氏に遣はす狀に本名を記すべき程卑下すべきにあらね



ば、其殿と云ふ夫人の名を撰び定めらるべし、と云ふ憚かり玉ふに及ばずと云ふ此の夫人は世人時田殿と云へり、故に自らの手紙の表書に「まいた」と署せしにもあらんか「大かた殿」は新夫人の姑氏朝の母を呼ぶ稱にて、實は夫人には叔母姪の間柄なり、幻庵にも姪孫女に當れば「げんあん申候つる云々」など、親しげに云へるなり、さて此の稱號は（結婚は年末なれば）來春早々より必要なり早く定め置くべしと注意しあり。

大かた殿をば御たいはうと申されべく候、たゞしこなたかたへの御文には、大かたどのとやはらげ御かき候てよく候心は一つにて候、

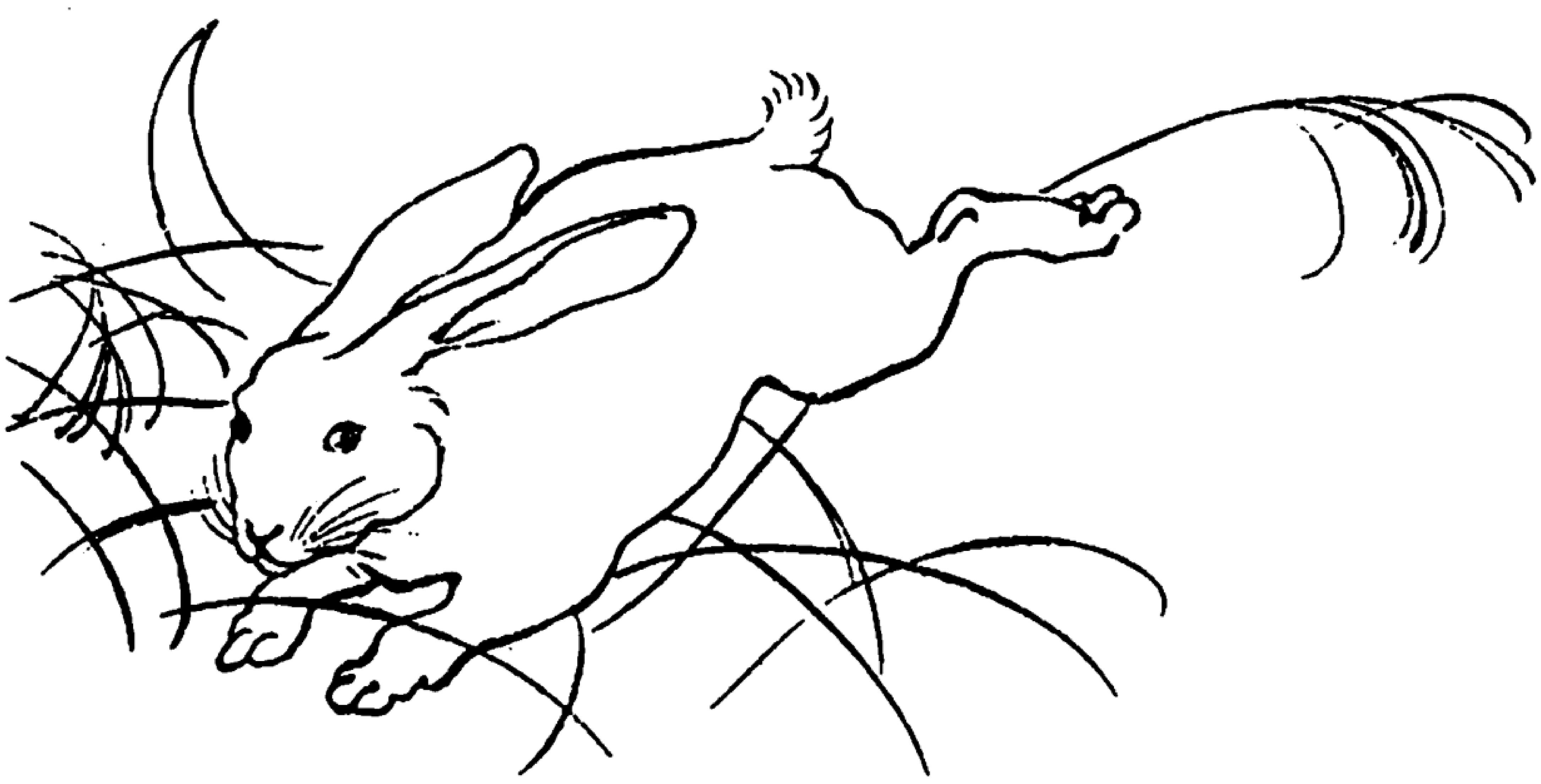
本條は新夫人の姑即ち吉良家後室に對する夫人の稱呼を定めしなり、通常世子に對しては「御たいはう」と嚴かに稱し、(固より三人稱なり)只小田原等身内へは「大かたどの(大方殿)」と和らかに唱へて可なりとなり「ひくわんしゆ」とは被官衆にて家臣を云ふ、當時始末の稱號だに忽かせにせざる、武家家庭の嚴格なるを察するに足るべし。

きら殿の御前へまゐり候はん物上らふとりつぎ給ふべく候又後々の事は、あまりきやくし人もかへりこはるく候べく候、

本條は夫人の夫氏朝に對する態度を敎へしなり、「きら殿」とは氏朝にて氏朝に差上る物は禮儀として夫人直接にするは無作法なり、故に上臈とて吉良家中に奉公する老女をして取次がしむべし、但し何時々々迄も此く「きやくしん」(隔心)ありげなる仕打は夫妻の情誼として面白からざれば、程々にすべしとなり、武家の家庭の窮屈なりし趣は今も演劇に屢々演せらるれど、此る風儀は戰國時代より漸々發達し來りしを知るべし、秩序を重んずるは時代の精神なり。

しふげんのときのもやう、あなたのしたてしたる人の申やうにせられ候べく候大くさはなにと申などゝたづね申候ともおぼへ候はぬと返たふ候べく候、

本條は婚姻の儀式を擧ぐるにつきての心得を書けり「しうげん」は祝言にて、今と同じく三々九度の盃事を指す、其儀式など夫々家風あるものなれば、專ら吉良家の方にてなす儀に任かせ、夫人として我意を加ふべからず、假令先方より大草（大草とは小田原の家臣にて、故實有職料理等に詳らかある家なれば、北條氏より夫人の婚儀につき吉良氏に伴はしめたるものあるなるべし）は如何なる意見を有てるかなどゝ聞く事ありとも、只知らずと答へて差出がましく振舞ふべからずとなり、此れ今人の所謂女子の淑徳に外あらず現代の婦女子達へも推奨すべき淑徳なるものは、男子の家に尙ばる、武士道と同しく戰國時代より發達せる時代精神社會心象と稱すべきものにして、決して或る論者の說く如く支那文敎の弊を受けたるに非ず、或る程度迄は何時々々迄も守るべき女子の美德なること男子に於ける武士道の如し。



さだめてつねの三こんにて候べく候だゞしくばなどまいり候はゞ、ほんほんのしき三こんにて候べく候さやうに候はゞ、くばによくたづねられ候て、しだいちがはぬやうに候べく候つねの三こんにて候はゞ、べつぎなく候ほどに、やうがましく、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

申されまじく候、

本條は又專ら婚儀に關す。「つねの三こん」「はん〳〵のしき三こん」とは饗膳に關する儀式にて詳述の必要もなく、又諸流異同あり、今大體を云へば「式三献」とは一人前に膳三ッ宛据ゆるものにして、本膳に盃三ッ据ゆるなり一ッ盃にて、三度宛酒を入させ、三ッの盃にて三々九度あり、式三献にては盃の取かはせもなく、又膳も据りたる儘にて食せず、此後七五三膳部出るなり「常の三献」は此の略式なり「くば」とは、小田原の家臣にて料理に精しき人なり、吉良家にても多分略式にて濟まさるゝ事あらんが、久保などの故實家來らば本式となるやも知れず、然らば熟く久保に尋ね問ふて儀式の次第を違へて耻かしき思をするやうの事なき樣すべく、略式なれば別に面倒なる事もなければ事事しく問質すに及ばざるべしとなり。

さんこんの三さか月しうげんのときは、三ッにて御まゐり候物にて候、せつくついたちには、候はねどもくるしからず候、いわれは、御なりの時は上に候かわらけ一ッにて三とまゐり候

本條も亦盃事に關す、婚儀の時は三つの盃にて酒を飲むものなり、節句朔日の儀式の時は必ずしも然らず、其證據には將軍家臣の亭へ御成の時にても一の土器にてまゐる故まして通常の式には差支なかるべしとなり。當時の儀式典禮を重んずるの風を見るべく、繁文縟禮は德川幕府政治の結果と論ずるは誤なるを曉るべし。

引わたしのとき、くはへの事、くはへはいで候へどもくはへ候はぬ物也、そのことくに御さた候べく候しき三こんのときはもちろんにて候、

本條も婚儀に繋れり、引わたしとは、引渡の膳にて、酒改終りたる時出すものにして、初献の時の膳を云ふ、「くはへ」とは加酌にて、提子の事を「くはへ」と云ふなり、假令提子は持ち出るとも、酒を注ぎ加ふる眞似して眞に加ふるものには非ずとの事なり。以上婚儀につき殊に注意すべき要目を説けり、

みうち衆御れい申され候

はんやうだいの事、

せたがや殿の御いへにつきたるおとなしゆをば、一つれに、そのしゆばかり御あひしらひ候べく候



三のま御つぎのざしきの事

へんにて、ひきわたしにて、上らふしやうばんしかるべく候御つぎと申ても、しやうじひとへの處などは、ありかるべく候、

本條以下新夫人の吉良氏の家臣等の待遇につき述べたり、當時に於ける一武家の主婦として是非御心得べき要件なり、「みうち殿衆」とは吉良家臣の謂にて、新婚につき夫々祝儀を申上ぐべければ、其容禮の心得なかるべからず、先づせたがや殿（世田谷殿）即ち吉良氏譜第の老臣は老臣許一列に接待す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

べく、座敷も宿老の事なればあまり下りたるにては不可なり三の間邊即ち夫人の部屋の次の座敷位にて饗應すべし、夫も障子一重許距てたるにては餘り間近なれば、少し離れたる所にて、簡單なる引渡の膳部にて上﨟相伴せしめて酒肴を振舞ふべしとなり。

はりごし殿の御いへよりつきてまいりたるおとなしゆをば、一どに御あひしらい候べく候、あひしらいはおなじ御事にて候、

本條の堀越殿とは吉良家の當主氏朝はもと駿河今川氏の一族堀越貞基の次子にて養子となりて、吉良氏を嗣ぎしものなれば氏朝に駿河より從ひ來れる家臣なり、本條は此家臣の接待法を設けり、萬事吉良家譜第の老臣と同樣なるが此の附家老連中は夫丈にて一度に饗應すべしとなり。

おとなしゆに御さか月給候はん時、しやく申候はん人なく候上らふぜんをおしやり給ふて、おくへ御たち、御さか月にちやうしそへて御いてまゐらせ候、これにてよく候べく候、

又老臣接待に關す「おとなしゆ」即ち老臣とは云へ、家僕なれば、之を待遇するに相當の禮儀を失はざると共に、又一方に於て主人たる威容を保たざるべからず、故に老臣に盃を與ふる時も、夫人は勿論上﨟も常に接待するに及ばず、只膳部を押し遣りて奥へ入り、杯酒を備へ置けば、夫にて充分なりと云ふ、酒肴を振舞ふと云ふも只主として銚子の酒を呑ましむるのみ、流石に古昔素朴の風儀を見るべし、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きんじゆの衆御れい申候はんやうだい、おとなしゆとすこし引かへ候てよく候これもざしき
はおなじざしきにて候べく候御さかづきばかり給候べく候さか月のきやうにくみ付候
物候

本條は吉良家近臣の接待法なり、其法は老臣に對するとは少し違へて輕くもてなして可なり、但座敷
は老臣と同じかるべし、又盃許賜て
別に膳部を出すにも及ばずとなり、
老臣と近臣の等差を知るべし、くき
やうとは、公卿又は供饗と記し、盃
の臺にて、形は三方の如くにして、
通常其の穴なきものを云ふ即ち盃
は供饗に組み付けて出せとなり、



おとなしゆきんじゆ衆御返禮の
わりやうは、一兩日すぎ候て
御ひきようい、ちうもんそへ、
高はしかうさへもんを御たのみ
候て、つかはされ候べく候、

本條は老臣近臣の祝儀を申上た
るにつき、其返禮として、婚儀
濟みし後一兩日中に「御ひき即ち引出物を用意し、其引出物の目錄と共に高橋高左衛門とて小田原よ
り夫人に附隨する者を賴みて、夫々遣はさるべしとなり。

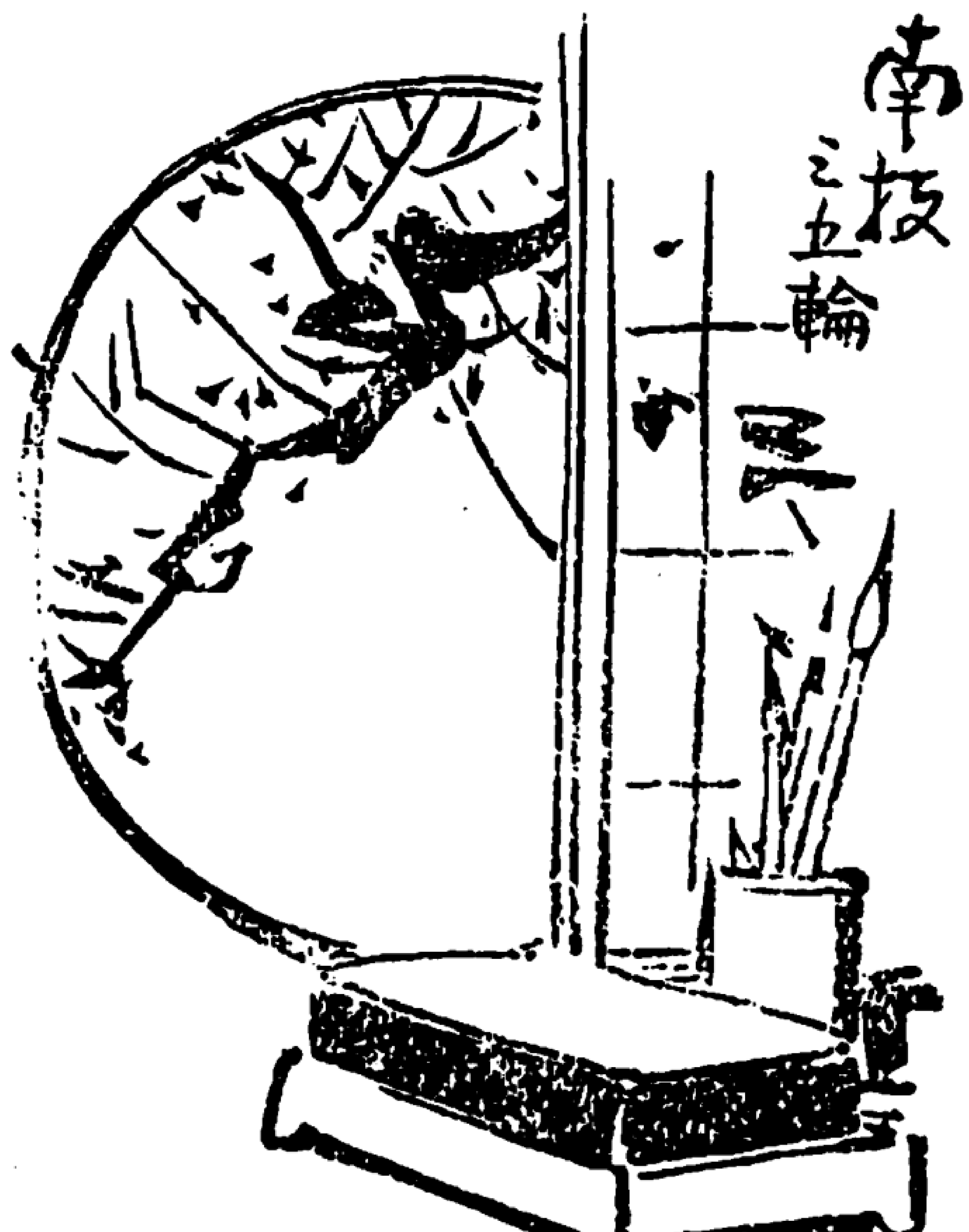
高はしかうざへもんに、こそで御やり候はんは、三日の御しうげんのうこ過候時ぶん、御とを
りへめし候て、つかはされ候はんか、これは大かたどのへよくたづね申され、御いけんのやう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に候べく候、もしじよの人々おもふ所も候、もしむようと御いけん候はゞ、みづしむくのすけをつかひとして、やどへ御おりく候べく候、さ候とも、ひろぶたに入候まじく候、つゞらなどふせいに入候て、とりいだし、ひたりのてにすへ、右のてにてうへをおさへ、まゐらせ候べく候一さい下ての人に御つかひ候こそで、ひろぶたにはすへ候はぬ物にて候たとへて申候、くばうさまより、三くわんれいはじめめん／＼にくだされ候も、ひろぶたさた候はず候、御一ぞくの御かた、きら殿石ばし殿、しぶ川殿などへ、御ふくまゐらせられ、候事も候つる時もひろぶたはいで候はぬよし、いせのびつちう物がたり候そうになどはきんじゆ候へば見および候つるとて候、くげ衆御けらいへも同事とて候、みのとき殿にてさるがくにいだされ候こそでを、れん中よりひろぶたにすへていで候時、はうこうのきやう衆はらい候つると、そうに物がたり申候、ついでのさいかく御心へ候べく候、

高橋向左衞門は夫人に隨ひ來り、婚儀に關し特に周旋せしものなれば、其勞を慰めん爲め小袖を遣はさるべきにて、其は三日の祝言のうち（余未だ詳らかにせず、蓋し祝言後の簡單なる饗應ならん）過ぎし時分とをり（夫人の居間への通路廊下と云はんが如し）（高橋を召し出でゝ、之を遣はさるべきかと思へど、此の邊は舅と姑なる大方殿の意見を聞きそれに從ふべし、他の家臣の面々の思わくもあるべければ、大方殿若し止むる樣にとの御意見ならば、表立ちて小袖を與ふる事は止め、水未杢之助を

使として高橋の宿許へ贈り遣はすべしとて此れより、小袖は廣蓋に容るゝものに非ずと云ふ事、葛籠へ入て與るべき事凡て己れより下樣の者へ遣はすには廣蓋に入るゝ事など述べて京都足利將軍の三管領(細川、斯波、畠山)又將軍一族の人々即ち吉良殿、三河東條の吉良家)、石橋殿、澁川殿等へ小袖を賜ふ時も廣蓋には載せず、これは伊勢備中守(小田原在住)の話にて、宗二(北條氏の族人か)も將軍に近侍し居たれば見及べりとの事なり、公卿の其家臣に對するも同樣にて、嘗て美濃の大名土岐家にて猿樂(今の能狂言師)に小袖を下されし時、簾中より廣蓋に据へて出し、土岐氏に奉公せる京の人々土岐家には故實を知らぬとて笑ひし由云々とて



當代武家の夫人として心得べき時宜の振舞を述べたり、今人は一概に故實有職を無用視すれども、こは時代の違へる爲めにて今の交際場裏に舞踏音樂などの智識技術必要なる如く、古代武家の奥向にては、此る心得を要せしなり、

おだはら二御屋かたより、御れいぎ候べく候、御つかひ、おとなしゆ御わひしらひのごとく、引わたしにて候べく候、きんじゆの衆にて候とも、屋かたの御つかひにて候ばゞ、御わひしらいはおなじかるべく候、屋かたは今くわんれいにて候、その御つかひは、御はんそう候はでかなはぬ事候、

本條は夫人の實家小田原の使臣接遇の法を述べたり、「二御屋かた」とは氏康氏政父子にて、夫人の父と兄より、此れよりも使行きて祝儀を述ぶべければ、其使は吉良家譜第の老臣と同じ樣に鄭重に接待すべく、假令小田原の使なるもの、北條氏の老臣にあらずして近臣なりとも、小田原御館よりの使者なれば、其接遇は其老臣なると同じくすべし、北條家は今關東の管領なれば、其使者には優遇すべしとなり、關東管領とは政權を掌握し、上に古河公方足利義氏を戴きて其管領たること、古へ上杉氏の鎌倉公方に於ける如き故此く云ひしなるべく、管領の名をも兼ね有せしか否やは疑問なり、北條氏は出身卑しく、云はゞ成り上りの假大名なれば、名門たる吉良家などより見れば輕けれども、現今有力の家なれば禮遇に意を用るべしと云ふ邊夫人の境遇にては注意すべき點なり。

一ぞくのしゆげん三どの、しん三郎ごとき、いづれもれい申候はんつかゐ、御屋かたの御つかいとはすこしかわり候べく候、大かたどのへ御だんごう候て、わひしらゐ給ふべく候、

「源三どの」は夫人の兄にて氏政の弟由井源三後に陸奥守氏輝と稱せし武州八王寺榎本の城主たりし人なり、「新三郎」は幻庵の子綱重後に氏重と稱せし人にて永祿十二年駿河蒲原城にて打死せり、此等の人々の祝儀の使者は小田原の使者とは事變はれば、接待稍輕くして可なり、此邊の事姑なる大方殿と能く談合すべしとなり。

水主むくのすけ、柴づしよ、すへ〲までもまいりかよふべく候か、御ねんごろに候べく候、大屋

なかたなども、ひくわん一ぶんのものにて候、御めかけ候て、御ようをもおほせつけ候べく候、

水主杢之助、柴圖書、大屋、中田等皆使者をして祝儀を述べしむべきが、此等は皆吉良家の家臣同様の者なれば、懇に接待されて、自然所用ある時は召使はるべしとなり、當時武家の夫人たるものは此の家臣の操縦をも心得べし、決して今の貴夫人の優遊これ事とするとは差へり、

清水、笠原御れいにまいり候はゝ、おとな衆御わひしらいのことくにて候べく候、

清水笠原は小田原の重臣なれば、其の祝儀述べに行きし時は、吉良家の老臣同様に鄭重にもてあすべしとなり、



御むかひにまいりたるおとなしゆへは、つぎの日みづしむくのすけつかひとして、よべは御しんらうと、上らふより仰とゝけよく候べく候たゞしいかゞ候はん哉らん、かうざへもんに御だんがう候べく候、御れい申され後にもつかひ御やり候はんか、かうざへもんいけんに御まかせ候べく候

本條は婚嫁の際吉良家より夫人迎取に來りし老臣に對する禮儀を述べしにて、次の日水主杢之助を遣

はし、夫人附の上﨟の口上として昨夜は御苦勞に存ずかると挨拶せしむる、否か、此の邊よく〳〵高橋高左衛門と相談し、其意見に任すべしとなり、

しん三郎かたへ御れいきは春よく候べく候大かた殿へたつねあわせ申され候べく候

本條の新三郎は前の網重にて、幻庵の子なり、此の方の答禮は年内も餘日なき事故來春にてよろしからん、よく大方殿と相談すべしとなり、

わき人しゆ御れいにまいり候べく候、御あひしらい、此ほど大かた殿になされつけたるやうにあるべく候、

以上　大りやく此ふん

又吉良家出入の商人、小田原城下の商人等夫々祝儀に行くべし、此の輩に對するあいしらいは吉良家にて姑ある大方殿年來仕付たる家風あるべければ、其に隨ふべしとなり、此れ當時武家の家風習慣なるもの、重んずべきものなりしを示す、以上は心得べき事の大略かと云へり、

正月　ぐわんさんよりかゝみ、子の日、七日、十五日いわひ、大かたどの此とし月なされつけたるごとくにて候べく候、そのぶん、げんあん申候つるよし、御ことわりよく候べく候、

三月三日、五月五日、七月七日、八さく、九月九日、いづれもおなじ、

本條以下は年中行事を說けり、正月元三の鏡餅以下年中の行事は吉良家にて從來大方殿行ひ來り

し風儀あるべければ其れに隨ふべく、北條の娘を迎へたればとて、今更彼是改むるに及ばずと幻庵云へりと傳へられよとあり、「みな月」とは六月嘉定の祝儀を云ふ、

いのこのもちゐの事、きんねんおだはらにしか〳〵と御いはゐ候はぬまゝ、やうだい人わすれ候、されどもきゝおよび申候ぶんは、御まへゝ參り候四はうの上につみたるもちを、一ッづゝ御はさみ、ちやくざのめん〳〵衆は、三くわんれい、山名、一色以下のかた〴〵へ被進候、其後たれにても御ともしゆ御ぜんをもちて、御とをりへいでられ候て、しこうの御ともしゆ、きんじゆのしゆへ、いたさるゝよし。



承候、國々にある大めいは、代官をのぼせ、はいりやう候、大裏の御やうだいをも、西殿へ尋申候、當關白さいせんにはいりやう候て、しだいに大なでんまではいりやう候、これは女房しゆのいださるゝとみへ候よし御物がたり、しからは御いわゐ候はん時は、上らふへはじきにはさみて參らせられ候べく候、中らうへは、上らふはさみ候ていだされしかるべく候、おもてはおもてにての御いわゐにて候べく候まゝ申事なく候、このいわゐは、天りやくの御かどの御とき、康保年ちう、むらさきしきぶしいだしたるとふるき物にはみへ候、大りの御まつりとかつ〳〵のうちにて候、ぶ氣に御いわゐも、たか

うぢいらゐはくげに御なり候まゝ、御いわゐにて候べく候、ついでのなまさいかく申候、
本條は専ら玄猪の祝儀の事を述べたり、近年玄の子餅は小田原北條家にて嚴重に祝はねば、故實など人々忘れしも、幻庵聞き及びし所にては、京都將軍御臺所の御祝にては、御前の四方(三方と形同じく、四方に穴あるものなり)の上に積みし餅を一ツ宛御臺所箸にて挾み三管領、山名、一色以下へ與へ、其後御伴衆とて地位ある武家の一人通へ(通とは今の廊下様の所なるべし)出でゝ、餅を伺候せる御伴衆近習の衆等へ出し與へ、又地方在國の大名は代官を京都に上せ、御臺所の亥子餅を頂戴するなり、三條西家へ尋ねしに、宮中にては、現任の關白を第一として、次第に大納言迄皇后より拜賜する由なり、此の例に從へば、吉良家にても上﨟へは夫人より直接に餅を挾み遣はし、中﨟には上﨟挾み出されて然るべし、玄猪につき吉良家表向の儀式は又別の事なれば云はず、此の祝儀は天暦の帝即ち村上帝の時康保年中紫式部初めたる事にて、内裏即ち朝廷の御政治伺態なる時なり、(此の考説は誤れり、起原は尙古き事あり)武家にて祝儀の初は足利尊氏公卿に列したれば此れより初まりしならむと幻庵の臆說を述べたり。
ざとうしゆ參り候はゞ、御さか月給、御ひき給候べく候、あなたかたに候はんずるざとうしゆ參候はゞ、御ねん比は候べく候、なれ〳〵しくは御おき候まじく候、ついでに御心へ候へ、ざとうとても、おとこのめのくらきにて候、女中かたへ、あんないなしに立入物にてはなく候、てんかその

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぶんにて候、やすき事、やうじゆゐん殿の御とき、うちつおくわ一と申候けんぎやう候つる、へいけ御きゝ候とて、はれ〴〵おばへ候て、からかみのまへ一どめし候つる、その時もやうじゆゐんどのは、おくのまに御ざ候、きんねんざとうと申せば、いづれもおくかたへ參候、心へがたく候へども、御國ぶりにて候まゝ、一人して申されず候、たゞしみん一など參候はゞ、御心やすく御よび候てもくるしからず候、おさおくより御しり候又としよりぬるが、ふつゝかぬ物にて候、御ねんごろよく候べく候、さへ、これ又おなじきときの物にて候、この



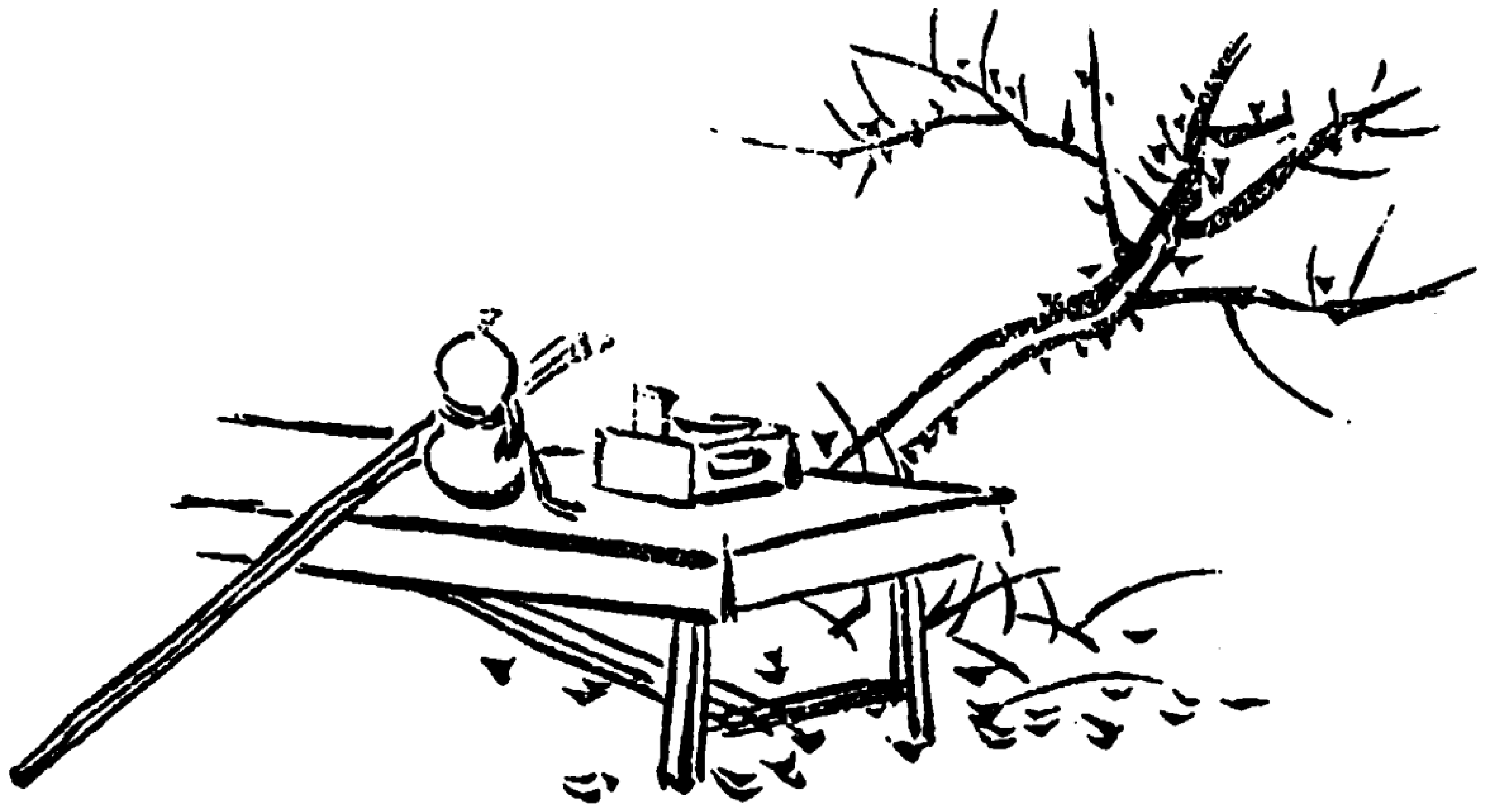
外はなれ〴〵とはめし候まじく候さて候とも、ざとうしゆなど、三こんなどのうちには、御しやうばんにはめし候まじく候、御つぎにて給候か、又御またせ候て、のちに御さかな給候て、くこん給候べく候、うこの時は、御しやうばんくるしからず候、てんじんどうせんの事候、かやうの事は、へいせいもかたきをめされつけにて、御をき候べく候、きんねんこゝもとさだめがたに候て、さは〳〵とも候はず候、するがなどは、さやうの事きはめてしきはうはうに候べく候、御かくご候べく候、

十二月十六日　そう哲（花押）

本條は專ら平家を語り琵琶を彈じなどして、武家の奥向に出入する檢校即ち座頭等に對する心得を云へり、若し座頭衆祝儀に來らば、盃を給ゐ、引出物をも與へらるべし、吉良家出入の座頭來らば、懇に取扱ふべきも、狎々しくはすべからず、（「御おき」は掟と同樣の語にて、仕置の事なるべし）序に申すは、座頭とても只盲目なる許にて男子には相違なければ、女中の奥向へ案内無しに自由に立ち入るべき物にはあらず、此れ天下一般然るべき事にて小田原にて故氏綱（幻庵の兄）の夫人養珠院殿の時に當り、氏綱くわ一なる檢校即ち座頭を抱へ置きけるが、平家物語を語らすとて、幻庵物心付きて後唯一度奥の襖の前へ一度召されて事あり、その時にても夫人なる養珠院は奥の間にありて座頭輩と座を接する樣の事なかりき。近年世間の習とて、座頭と云へば孰れも當然と心得て、奥向へ立ち入るは不都合なり、但明一など云ふ座頭參り候はゞ心安く御呼び候ても苦しからず、夫人幼時より知れる者にて又年老ても不束をせぬ者なれば、御懇になさるべし、又さ一など云ふも明一同樣の者なれば差支なけれど此外の者は狎々しくはすべからず、又伺候すとも、彼の輩に三獻の式の相伴はさすべからず、次々の間にて杯を賜ふか、又待たしめて後に肴を與へて九獻を賜ふもよし、うこの時には相伴も苦しからず、正式の食事ならぬ點心（菓子などを云ふことあり）の時なども前同樣苦しからず、かゝる事は平生固く掟さるべく、近年小田原等にても儀式嚴重ならねど吉良家の當主氏朝の故鄕なる駿河

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の今川家にては此事は嚴重なりとあり、本條は此の頃武家の奥向女子生活の狀態を明らかにするものにて、盲人に平家など語らしめ悲壯激越なる琵琶の一曲は开が唯一の娯樂とも云ふべきものなりしを知る、又時には家中の女共の檢校輩とみだらなる關係を作るもありし樣なり。以上覺書の全文を條々載錄して、畧之を解釋せしが今大體より概括して其注意すべき點を摘めば、當時武家女子敎育には婦人の淑德を尙びて、常に嫁せし家の舊來の慣行を破らざる樣、我意を通さゞる樣と注意せし事著しく、又世間の儀式習慣に背かず、故實典故を明らかにするは



主婦たるもの丶最も心得べき事にて、此の中に自ら夫に仕へ舅姑に奉じ家臣隷僕婢操縱の法の備はれり、又現今尚推奬さる丶淑德てふ女子の美德は其治源する所此の時代にあるを示すなり、又當時婦人の生活狀態につきては武家に於て、奥表の區別嚴重に、奥は奥にて夫丈の儀式典禮を有せり、云はゞ當時の婦人は窮屈にて平家等に僅かの慰籍を得たるのみ、此の生活狀態は後德川時代に入りて益固定されたるが如く覺ゆ、即ち封建制に伴ふ社會風俗、時代精神として尙能く研究の値ありと云ふべし。

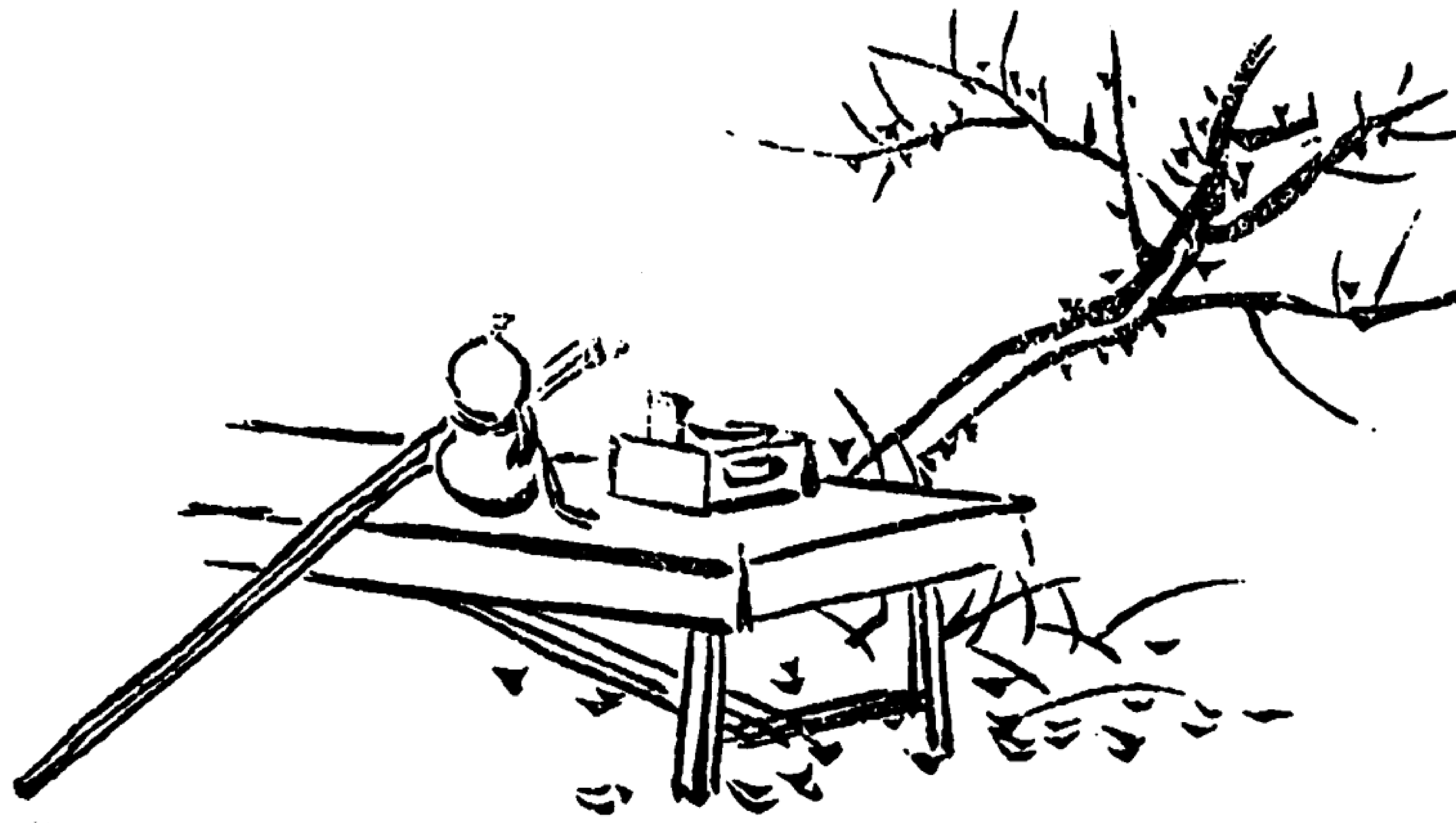
（をはり）

十二月十六日　そう哲(花押)

本條は専ら平家を語り琵琶を彈じなどして、武家の奥向に出入する檢校即ち座頭等に對する心得を云へり、若し座頭衆祝儀に來らば、盃を給ゐ、引出物をも與へらるべし、吉良家出入の座頭來らば、懇に取扱ふべきも、狎々しくはすべからず、(「御おき」は掟と同樣の語にて、仕置の事なるべし)序に申すは、座頭とても只盲目なる許にて男子には相違なければ、女中の奥向へ案内無しに自由に立ち入るべき物にはあらず、此れ天下一般然るべき事にて小田原にて故氏綱(幻庵の兄)の夫人養珠院殿の時に當り、氏綱くわ一なる檢校即ち座頭を抱へ置きけるが、平家物語を語らすとて、幻庵物心付きて後唯一度奥の襖の前へ一度召されて事あり、その時にても夫人なる養珠院は奥の間にありて座頭輩と座を接する樣の事なかりき。近年世間の習とて、座頭と云へば孰れも當然と心得て、奥向へ立ち入るは不都合なり、但明一など云ふ座頭參り候はゞ心安く御呼び候ても苦しからず、夫人幼時より知れる者にて又年老ても不束をせぬ者なれば、御懇になさるべし、又さ一など云ふも明一同樣の者なれば差支なけれど此外の者は狎々しくはすべからず、又伺候すとも、彼の輩に三獻の式の相伴はさすべからず、次々の間にて杯を賜ふか、又待たしめて後に肴を與へて九獻を賜ふもよし、うこの時には相伴も苦しからず、正式の食事ならぬ點心(菓子などを云ふことあり)の時なども前同樣苦しからず、かゝる事は平生固く掟さるべく、近年小田原等にても儀式嚴重ならねど吉良家の當主氏朝の故鄉なる駿河

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の今川家にては此事は嚴重なりとあり、本條は此の頃武家の奥向女子生活の狀態を明らかにするものにて、盲人に平家など語らしめ悲壯激越なる琵琶の一曲は其が唯一の娯樂とも云ふべきものなりしを知る、又時には家中の女共の檢校輩とみだらなる關係を作るもありし樣なり。以上覺書の全文を條々載錄して、畧之を解釋せしが今大體より概括して其注意すべき點を摘めば、當時武家女子教育には婦人の淑德を尙びて、常に嫁せし家の舊來の慣行を破らざる樣、我意を通さゞる樣と注意せし事著しく、又世間の儀式習慣に背かず、故實典故を明らかにするは神として尙能く研究の値ありと云ふべし。



主婦たるもの、最も心得べき事にて、此の中に自ら夫に仕へ舅姑に奉じ家臣隷僕婢操縱の法の備はれり、又現今尙推奬さるゝ淑德てふ女子の美德は其淵源する所此の時代にあるを示すなり、又當時婦人の生活狀態につきては武家に於て、奥表の區別嚴重に、奥は奥にて夫丈の儀式典禮を有せり、云はゞ當時の婦人は窮屈にて平家等に僅かの慰籍を得たるのみ、此の生活狀態は後德川時代に入りて益固定されたるが如く覺ゆ、即ち封建制に伴ふ社會風俗、時代精

（をはり）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑をめづる歌

清水橘村

姉

若紫の緯薄き
霞の袖に畫きたる
淺みどりなる嫩の
下もえそめし春の風

眠れる夢をさませばか
かたき蕾のむすばれし
冬の憂愁は雪消して
汀の梅のさきにけり
すがたをうつす池水の

眞珠ちるかと思ひみて
一葉の舟を浮ぶれば
棹の雫もかんばしき

姉

高きかをりに花を愛で
醉ひては棹を心せよ
ふかくも澄める池みづの
鏡に見えむ君がかげ

やさしからずや鶯の
春告げわたる春の聲
きしのほとりの梅が枝に
御代の光のあらはるゝ

たのしからずや夕べには



女鑑をめづる歌

梅の林の月をみて
朝はしづけき小波の
御池にあそぶかもめ鳥

妹

梅をめぐりて梅をいで
池をめぐりて池にいで
春の光にさそはれて
遊ぶは蝶か君とわれ

たけなす髮のみだれなば
けづるに池のます鏡
袂のちりにそみもせば
うつすに岸の梅が香や

いといと清きこの心

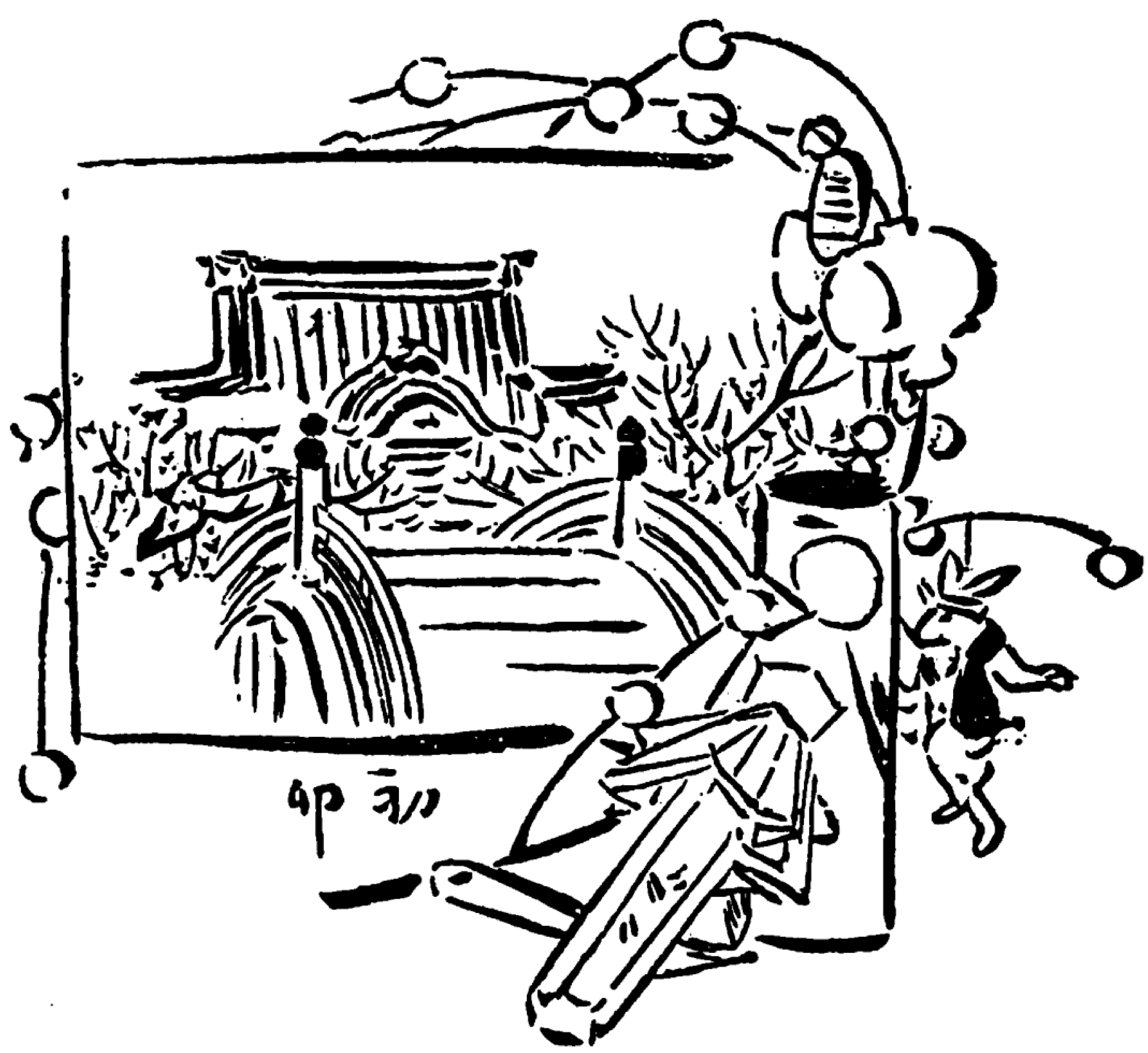
いといと高きこのおもひ
若き命(いのち)のあるものを
いづれか胸にやどさまし

姉

あゝ梅の花
梅の花
清き少女(をとめ)をおのづから
いましめ玉ふ垂乳根(たらちね)の
いけの鏡のなどもかく
光めでたくありけるものか

妹

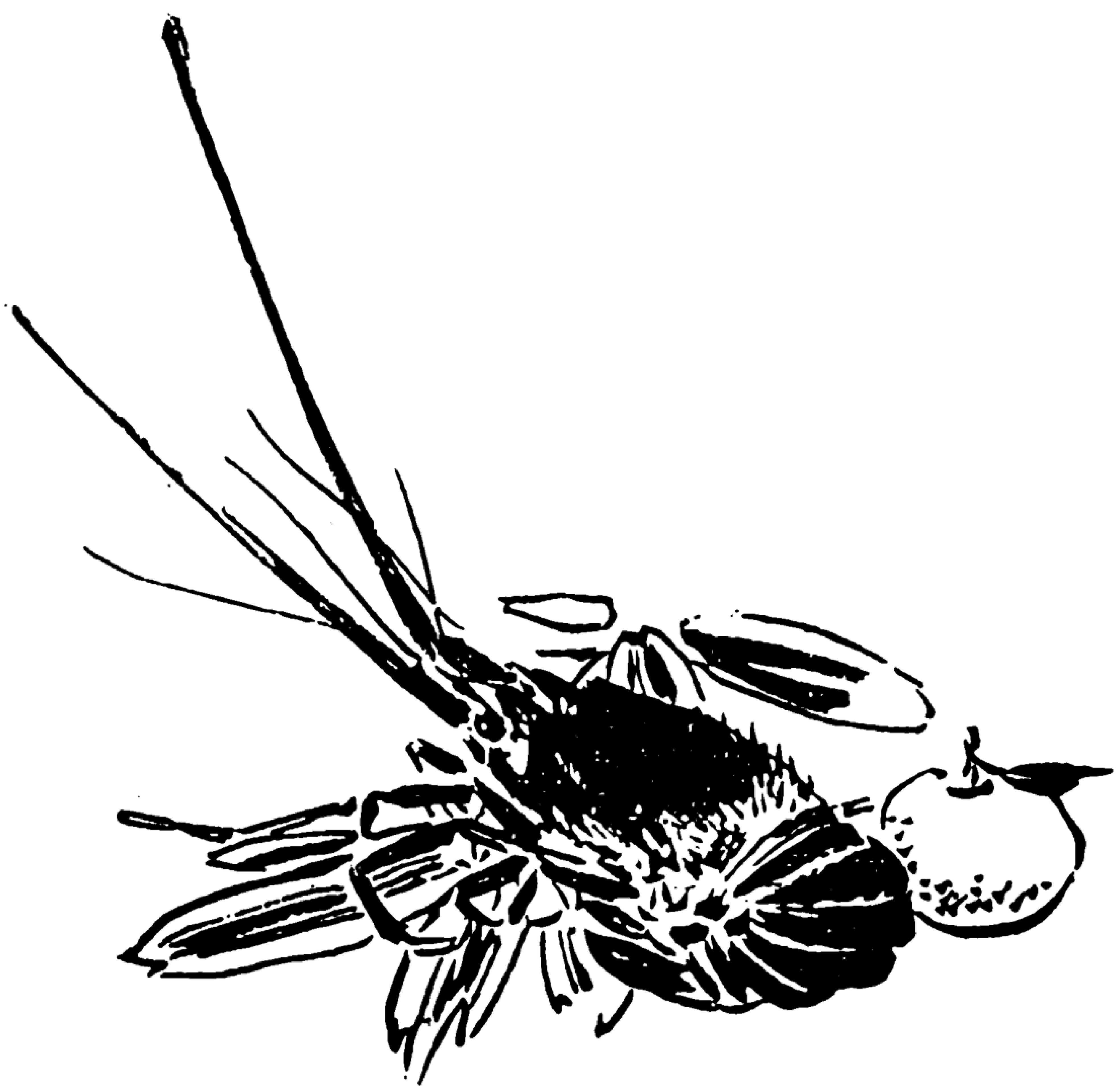
あゝ池みづや
池みづや
一人の姉をおのづから
いましめ玉ふ垂乳女(たらちめ)の



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑をめづる歌

汀の梅のなぞもかく
かをりめでたくありけるものか



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

評釋

新年の俳句

幸田露伴

○元朝や神代の事も思はるゝ　守武

釋にはおよばずして意おのずから明らかに解せらるべし。すべての物も新に淸らかにして、人の心も若やぎ美しうなるやうなるは元朝の風情なり。それと指したる事ある句にはあらねど元日の朝のありさまとおもむきとをよく云ひ得たる句といふべし。

○元日や家に讓りの太刀佩かん　去來

家代々の太刀を日頃は腰にすべくもあらぬ際の身の、たゞ其儘大切に藏の中などに納め置きたるが、今日は年の始めなれば、聊か男ぶりもつくり、身のまはりも凜々しく端然となし、今年も幸福多かれと祝ふにつけて、あの御先祖樣から代々御讓りの太刀を佩かうよ、と云ひ做したる句なり。面白く元日の人の心を云ひ現はしたる句なりといふべし。

○元日や晴れて雀のものかたり　嵐雪

これも元日の氣象を巧みに云ひ得たる句なり。其意は釋するまでも無し。

○初空へ差出す獅子の頭哉　一茶

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

元日の空の美しう明けわたりたるところへ早くも太鼓の音のてん〳〵と勇ましうたゝき立てゝ獅子舞の頭を振りたてゝ來たるさまを詠めるなり。をかしくて佳き句なり。

○年玉に梅折る小野の翁かな　　言水

新年の祝ひの贈りものに萬般事足る都の人へ何をかもつてせんと案ずる迄も無く翁は野梅を折りたりと作りなせるなり。

○大空を狹しと匂ふ初日哉　　鶯笠

あか〳〵とさし上る初日の光り花やかに大空に充ち滿ちたるさまを詠じたるなり。

○御降に猶寢よげなる二日哉　　闌更

御降りは年の初の雨をいふ俗語なり。句の意はおのづから明らかなるべし。雨しと〳〵と降りて、年のはじめの都べて物騷がしからず萬般しつとりと穩やかなるさま好く現れたり。

○食へもせぬもの引きに出る子の日哉　　也有

子の日に松を引く事を、何の食へもせぬものを引きに出づる事かな、と態と打戯れて云へるまであり。

○七くさや鼠が戀も別れけり　　几董

曉より七くさの菜を打囃すため鼠の戀も別れとなりたりと想ひなして興じたるなり。をかしと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いふべし。

○羽子突くや數ふ心の跡もなし　　素廸

羽子突きて遊ぶには一イ二ッ三イと數へてあそぶ習ひながら、本より心長閑なる年のはじめの遊びの事なれば、數へはすれど、それまでの事にて、別に心の留まるかたも無くて經る其の無邪氣なるところを云へり。

○濡椽や薺こぼるゝ土ながら

濡椽とは端近き椽にして戸の外にあるものをいふ。薺は七種の草の一なり。摘みし薺の土つきたるまゝ濡椽の上に譯も無くこぼれたるさまを詠じたるなり。やさしき句なりといふべし。

○遣羽子や月の中より落つるまで　　蓼太

遣羽子に興じたる人の夕暮までも猶遊びやまで月の中より羽子の落つるやうになるまでも戯れ居るよしをよめるなり。天いと高く羽子を遣りたる風情にも亘りて、兼ねて言へるは勿論なりと知るべし。

○ほの〳〵と烏黒むや窓の春　　野坡

曉天の空やう〳〵に明るくなりて物の色も見えそむる頃初烏の過ぐるが窓より見えたるをよめるなるべし。おもしろき句なり。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○わが惠方おほし松島嚴島　蘭更

惠方とは吉星居たまふ方をさしていふ。されば年々に其方こそ變れ惠方はいくつもある事無く、一つに定まれるものなり。さりながら我は風流の道に遊びて松島嚴島などいふ景色好きところにのみ魂魄をあくがれさせ居りて、今年はそれ〴〵の地に遊ばんと思ひ居るといふところよりしとは興じたるなり。

○世の中を知れ羽子板の裏表　白雄

表は美しく飾りありて裏はこれといふ飾りも無し。されど羽子板の働きは飾り無きところにありて、五色の彩り美しきところにはあらず。これを見ても世の表裏虛實を辨へ知れよと、感より觀に入りたる句なり。



明治卅六年 女鑑の庭 歌文月並兼題廣告

選者

◉歌 樞密顧問官正三位子爵 黑田清綱先生

◉文 華族女學校教授 井上賴圀先生

月	日	歌	文
一月	一日	寄海祝	元日書感
	廿日	富嶽	松の內日記
二月	一日	野若菜	初めて鶯を聽く
	十五日	晨鷄	若菜を送る
三月	一日	柳間鶯	春日古都を過ぐ
	十五日	春雨	音樂會の記

投稿〆切期限は總て發兌期日の十二日前、則一日分は前月の十八日、十五日分は其月三日とす

但し一月二十日の分は同月十二日を締切期限とす

投稿心得

〇兼題歌文は、女子は、何人にても隨意投稿することを得。

〇投稿用紙は半紙(歌は半截文は全紙二つ折)の事。

〇歌は題毎に用紙を別にし、一題には、一人一首若しくは二首を限りとす。上句の中に、二音の漢字を一字入れ、其の他は、悉く、平假名若しくは、一音の漢字にて認むべし。

〇文は、毎行字數を一定し、且、句讀點を施すべし。漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離して、分明に認め、題目の下に明記すべし。

〇右歌文とも、住所姓名は、

〇投稿宛名は、國光社女鑑編輯局とすべし。

〇總て書式に、違ひたるもの、及び、期日に後るゝものは採らず。

〇投稿題文中、天地人を撰び、天には壹圓、地には五十錢、人には三拾錢以下の書籍を贈呈す

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

文學士 小林雨塔著

新刊 勾當内侍

（四大三切袖珍各十三錢郵税二錢）

名媛を以て名將に配す。是れ千歳の佳會也。而かも忽ち生別となり、忽ち死訣となる。豈復千古の恨事に在らずや。宮禁秋涼夜闌なる時、美姫半簾を捲き、月に對して玉箏を彈ざれば、名將千草の露を踏み、馬を佇めて戀に泣く、何等の風流ぞ。而して一たび天の憎みを受けて、鳳輦の災なるに及んでや、即ち亂離の厄に遭ひて、長く恨を北國の青山に留む。又何事の悲慘ぞ、時人或は傳へ曰ふ嵯峨野の奥、往生院の邊、まだ裏若き尼法師の、右手に花籠を携へ左手に珠數爪繰りて、口に稱名をふ唱ろにあふものありきと、是れ勾當内侍が義貞の後世を吊ふ也。抑も義貞の半面を知らんと欲せば、勾當内侍を知らざるべからず、勾當内侍を知るは義貞を知る所以なれば也古忠臣の魂、古名媛の怨籠りて此の小冊子の中に在り、雪夜寒燈に對して之を讀む、誰か又一滴の涙なきを得んや。

新刊 袈裟御前

文學士 濱田廉著

定價 金拾參錢
郵税 金貳錢

新刊 顔世御前

文學士 長田偶得著

定價 金拾參錢
郵税 金貳錢

東京築地二丁目
株式會社
國光社發兌
電話特新橋八八電話新橋二六九三

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

幸田露伴序　村上濁浪譯述

鐵血宰相語錄

再版

壹部定價金參拾錢
郵税四錢

歐洲の政治家某嘗て云はく「伯都夜會の席に於ける比斯麥公の談論は、其の片言雙詞と雖も、日耳曼議會に於ける多數政治家の言論に比して、遙に優りたる勢力を有す」と。思へ公が銀燭の下、麥酒の盃を擧げ、客に對して說き出だせる一場の談柄が、忽ち一大問題となりて、當時の歐洲政治社會を震盪せしめたるを、本書は即ち公の秘書官、時の新聞記者等が、常に公の左右にありて、耳聞目睹して、世に傳へたる書籍雜誌の中より、粹を抜き、華を摭りて文學的逸事體に編製したるもの、或は「ヂスレリー」と握手し、或は「ゴルチヤコフ」と歡晤し、或は「ナポレオン」を揶揄し、忽ちにして熱火の修羅場となり、忽ちにして樽俎の和局を現し、忽にして閑靜なる家庭となる、其間躍如として公の風丰面目を描き出して餘あり。

公逝いて既に數年。世は凡庸政治家の競爭場となり了れりと雖も帝國主義の發達は益々著しく、世人皆な大偉人の出現を望みて已まざる也。此時に當りて十九世期第一流大偉人の談柄逸事出つ、豈又讀書界の一大快事ならざらんや

東京京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

和軒梅澤精一著

清少納言と紫式部

四六判
紙數三百頁
定價三十五錢
郵税六錢

本書は著者が精研細閲の餘に成りし者なり清女の傳記に於いて歌仙元輔が交際の範圍に因つて清女が宮仕の動機を論じ中關白派と御堂關白派との勢力の消長よりして椒房の光景を叙し美的皇后を描き李義山を論じ枕草子の文章をば內外二方面より觀察し最後に歌人としての清女に及び又後者にありても父が交際範圍夫の逝去等より紫女が宮仕源語製作の動機に及び往生要集によりて時代精神を陳べ天臺宗と源語との關係に及び紫女が人生觀女性觀を叙し又小說としての源語を評し兼ねて古今東西の源語論を批判し最後にダンテが神劇と紫女が源語とを比較せり製本高雅、考證正確文學的哲學的眼光を以て當代の宗教と文學とを品隲せる者也所論嶄新文章宏麗王朝文學の代表的製作と人物とに關する幾多の疑團は本書に於いて殆んど遺憾なく解決せられたるに近し大方の士女幸に一本を座右に備へて研鑽娯樂の資料とせよ

發行所　東京々橋區築地二丁目廿一番地　株式會社　國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候は様

千古寃魂 石田三成 及其時代之形勢

水主天姥著

一部定價金卅錢
郵税四錢

勝てば即ち官軍。負くれば即ち賊のみ。理非往々にして轉倒し、曲直或は顚逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆せざるべけんや。三成六條河畔の露と消ゑしより三百有餘年に及ぶもその寃枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明快痛切の筆を操て當年の形勢を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論比評するや。恰も法官の刑を斷するが如く、毫も假借宥恕を須ゐず、一褒一貶、一顰一蹙の間、文舞ひ句踊て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり、汽車關ヶ原を過ぎて、鬱葱たる松尾南宮の諸山を望みし者、此書を繙いて當年の事蹟を思はゞ、眥裂け、腸斷たざれば已まざるべし、蓋し近來の快著なり。

●再版出來●

●再版出來●

發行所

東京築地二丁目

株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

細川十洲先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第二十版賣切第三十版製本中

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹册定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所　東京京橋區[illegible]町二丁目廿一番地　電話新橋二六九三番　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

在法科大學　矢田七太郎著

幕末之偉人　江川坦庵

全壹册

新刊

和製美本
寫眞銅版數葉
壹部定價
金參拾錢
郵税四錢

著者は曾て「帝國文學」に「岳南の奇才」と歌はれ狩水生。主人公は幕末の碩儒安積艮齋をして「文武兼備勇畧超倫」と驚嘆せしめし徳川武士。舞臺は近世史中最も興味饒き安政嘉永の幕府時代清灑の文、警拔の識、韮山代官の傳記として讀むも可一部の幕末として見るも可、新文明の發達史として見るも亦た可なり、道義頽敗して士氣を沸へる今日世人若し武士道の理想的人物を知らんと欲せば——學生若し日本固有の模範的武士に泰西的紳士の品格を加味したる崇拜者を求めんと欲せば——婦人若し徳川武士の理想的家庭を知らんと欲せば——此の書は決してパンを求むるものに小石を與ふるものにあらざる也

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　株式會社　國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

明治二十三年二月創刊　本紙毎號八頁隔週附錄あり

國民新聞

定價	一枚二錢　一ヶ月三十五錢
	三ヶ月前金壹圓
	六ヶ月前金壹圓九十五錢
	一ヶ年前金三圓八十五錢
廣告料	一行一回三十五錢
	特別第一面四十五錢
郵税	一枚五厘　一ヶ月十三錢
	外國五十錢

●國民新聞は日本國民の思想と生活とを代表する機關にして、日本國民の一日も離る可らざる朋友也●東京たより●日曜講壇、共に國民新聞の特色也主筆の手になるもの、東京たよりは世界の新聞を一目に見、日曜講壇は、處世の敎訓を示す●政治は不偏不黨●外交は其の眞相を傳ふ●財政と經濟日本政府の棚卸しと經濟社會の燈明臺とは、本紙の自任する所也●物價は詳細にして漏さず●敎育は本紙の本領にして敎育界の大勢力也●小説黑潮は天下に評判高き蘆花生の筆にして一年に渉る大作也●隔週附錄政治、經濟、文學、社會の精粹要報毎月二回大版八頁●其他　家庭欄、詩歌俳句碁將棋より美術、能狂言相撲演劇等娯樂の分子一も漏らす所なし

發行所　東京市京橋區日吉町四番地
電話新橋七〇(編輯用)新橋二八五〇(事務用)
國民新聞社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

巖谷小波君序
山岸荷葉君著

大村令義君畫
鳥居清忠君畫
鏑木清方君畫

古今無類之美本

小說



全一册
定價參拾五錢
（郵稅六錢）

梅の難波に香も高き、噂を茲に象れるにはあらねど、花の都に色深く、五人揃ひて生粋の神田育ち、清き雪間に若菜を摘むが如き風情はお京よ、紅梅の媚くをお大に譬ふべくば、お瀧は寒牡丹の驕れるにさも似たり・水仙の憐なるがお達ならば、さては福壽草の仇なきはお篠の上の、何れを何れ、新年を飾るなる美しの娘姿。

紅葉山人著

再版
江見水蔭作
仇浪
定價六十錢
（郵稅…）

再
新…

東京市日本橋區榑正町壹番地
日本五大噺發行所
文祿堂
堀野書廛發兌
電話本局八十八番

賣捌
全國各地書林諸氏

明治三十六年一月一日發行
毎月二回一日十五日發行
第拾參年第壹號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

恭賀新年



婦人最良藥！中將湯

子宮病血の道にて悩み種々の藥を用ひて其効なく年久く御困りの人は中將湯を試し見よ



本舗 東京市日本橋區通三丁目七番地（特電話本局千〇九十七番）
支舗 大阪市南區堺筋塩町北へ入ル（特電話東二百七十八番）

津村順天堂本店
津村順天堂支店

定價
五週間分弐圓
三週間分壹圓廿五銭
二週間分八拾五銭
一週間分四拾五銭
三日分弐拾八銭
一日分七銭五厘
郵送料
拾六 拾 六 四 弐 弐 弐 銭

効能
子宮病
血の道
逆上頭痛
月經不順
産前産後
諸症に奇効あり



（東京築地林文館社[illegible]社印刷所[illegible]印刷）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA